新妹魔王の契約者（テスタメント）I

上栖綴人
イラスト○大熊猫介［ニトロプラス］

The TestAment of Sister New Devil

スニーカー文庫

魔王な妹が交わした“逆契約”――それは、

マスターの言うことを何でも聞くこと!?

スニーカー史上初! かなりHいバトルアクション!

S
246-1
Y600

上栖綴人

S 新妹魔王の契約者（テスタメント）I

スニーカー文庫

9784041004951

ISBN978-4-04-100495-1
C0193 ¥600E

定価：本体600円（税別）

1920193006001

「お前、妹が欲しいって言ってたよな」高校生の東城刃更に再婚宣言した父は、義理の妹になる女の子二人を連れて同居させた。と思ったら自分は海外出張へ行ってしまう。澪と方理亜、二人の少女は父が家を離れるや態度を一変させ、刃更を圧倒しようとする。二人の正体は、新米な魔王とサキュバスだった！ だが刃更と主従契約を結ぼうとして誤って逆契約、刃更がマスターの立場になってしまい!?――最強契約者のディザイア・アクション！

『新妹魔王の契約者（テスタメント）』こんな人にオススメ!

- ☑ エッチがしたいんじゃない! パンチラが見たいんだ!
- ☑ ちっぱいが好きです。でも巨乳さんはも――っと好きです。
- ☑ 自分のエロ数値は7000エローくらいかな?
- ☑ バカにしつつも心の奥底では期待せずにいられない。お風呂シーンを。
- ☑ 世界の神秘を。宇宙の秘宝を探すんだ!

……えーと、ちゃんとした話ですのでご安心をf^^

イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）

S
246-1
Y600

上栖綴人

S

新妹魔王の契約者（テスタメント） I

角川スニーカー文庫

9784041004951

ISBN978-4-04-100495-1
C0193 ¥600E

1920193006001

定価：本体600円（税別）

「お前、妹が欲しいって言ってたよな」高校生の東城刃更（とうじょうバサラ）に再婚宣言した父は、義理の妹になる女の子二人を連れて同居させた。と思ったら自分は海外出張へ行ってしまう。澪（みお）と方理亜（ほうりあ）、二人の少女は父が家を離れるや態度を一変させ、刃更を圧倒しようとする。二人の正体は、新米な魔王とサキュバスだった！ だが刃更と主従契約を結ぼうとして誤って逆契約、刃更がマスターの立場になってしまい!?
――最強契約者のディザイア・アクション！

スニーカー文庫☆上栖綴人の本 (2012.10)
新妹魔王の契約者（デスタメント） I

カバー　泉文社

●上栖綴人（うえすてつと）

スニーカー文庫の読者の皆さん、初めまして。上栖綴人と申します。今回こちらのレーベルでも書かせていただく事になり、デビュー当時のようなドキドキというか、正直かなり緊張しています！　どうしよう！　あ、こういう時はあれだ。好きな食べ物だ。ラーメン好きです。毎日食べてます。私、こういう所でこういう事するの（スニーカー文庫さんで書くの）初めてなので、とても緊張しています。優しくしてくれると嬉しいです。

カバーイラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
カバーデザイン／濱﨑正隆（NARTI;S）

新妹魔王の契約者（テスタメント） I

上栖綴人

角川スニーカー文庫
17613

The Testament of Sister New Devil
新妹魔王の契約者
テスタメント
I

東城刃更
Basara Tojo
「一緒に暮らして、守ってやりたいと思ったら、それはもう家族だろうが」
成瀬澪
Mio Naruse
「義理の妹なんて、調教する以外に使い道ありますか？」
成瀬万理亜
Maria Naruse
「お願い、このままでいて……動いたら、百回殺しちゃうんだからね」
野中柚希
Yuki Nonaka
「刃更、てっきり怒ってるかと思った。だって……抱きついたのに嬉しそうな顔しなかったから」
滝川八尋
Yahiro Takigawa
「残念だったなバサっち～。一人だけ楽できると思ったら大間違いだぜ」
東城迅
Jin Tojo
「妹は良いぞー。可愛いし、優しいし、柔らかいし。朝とか起こしてくれるしな」

「――う、動かないでっ!!」
「っ？　お、おいっ!?」
「さあどうぞ刃更さん……あーん」
「美味しいですよ澪さま――良かったら、そこの肩に付いてる部分とかどうです？」

「――どうしてっ!?」
「これで終わりだよ」
「……別に、彼女の味方になった訳じゃない」

「えっと……
実はこれから刃更さんに、
初めての調教を
して貰うんです」

新妹魔王の契約者（テスタメント） I

上栖綴人

角川スニーカー文庫
17613

The Testament of Sister New Devil

ConTeNts

プロローグ
妹ができた日 —— 005

第1章
義理の妹の攻略方法 —— 026

第2章
初めての主従契約 —— 078

第3章
再会と信頼の狭間で —— 129

第4章
君の悲しみがゼロになるまで —— 216

エピローグ
守りたいもの —— 271

あとがき —— 298

口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
口絵・本文デザイン／濱崎正隆（NARTI;S）

向き合う事さえままならずに、ずっと罪だけを背負って。
それでも生き続ける事で、誰かを守る事ができるというなら。

プロローグ　妹ができた日

1

「なあ――お前、妹が欲しいって言ってたよな？」
夏休みも中盤に差し掛かったある日の晩。
東城刃更は、父親がさらりとそう言い放ったのを聞いた。
それは夕食の最中――刃更がカレーをおかわりするために席を立ったタイミングで、
「言ってねえよ。脳のヤバイ所にスパイスでも入ったのか？」
アホらし、とばかりに背中越しに言うと、刃更は炊飯器の蓋を開けた。
「反応薄いなおい……妹だぞ妹。男の子なら涎が出るほど欲しいもんだろうが」
「生憎と、妹じゃ腹は膨れねーんだ」

父親の戯言に付き合ってられるか。こちとら食べ盛りだ。高校生男子の胃袋舐めんな。
ご飯を皿によそい終えると、刃更はガス台のコンロに置かれたカレーの入っている鍋の前へ移動。具材たっぷりのルーを掛けると、刃更は自分の席へと戻り、
「あれ？　福神漬けはどこ行った？」
カレーの相棒が入った瓶が、テーブルの上から消えていた。
すると正面、向こう側に座った父親が、福神漬けの入った瓶を片手に得意げな顔で、
「なあ、もうちょい妹談義に花とか咲かせてみようぜ」
ニヤッと笑みを向けてくる。刃更はやれやれと嘆息し、自分の父――東城迅を見た。
いい年こいて飯時に、居もしない妹の魅力について息子と語ろうとしてくる父親。
字面にすると結構な痛さだ。軽く殺意が湧く。
「乗り気って……つーかそもそも俺、妹が欲しいなんて本当に言ったか？」
「何だ……。覚えてないのかよ？」
と、呆れたように迅。
「『僕は妹が欲しい』って、ラノベのタイトルみたいな事、眼ぇキラキラさせながら言ってただろ――十年くらい前」
「そんなん覚えてるかっ！」

十年前だと、刃更がまだ五歳前後の頃の事だ。どう考えても子供の戯れ言でしかない。
しかし、迅は「まあまあ」と片手を前に出しながら、
「妹は良いぞー。可愛いし、優しいし、柔らかいし。朝とか起こしてくれるしな」
「まあ、そうなのかもな……」
「ああ。それに――エッチな事もし放題だ」
「息子に犯罪をけしかけんな！　ってか、そんな妹がいたら逆に怖えよっ！」
そんな妹は二次元にしかいない。
「何なんだ親父……そんな都条例に規制されそうな妹の話がしたかったのかよ？」
「別に、非実在の話じゃねーよ。エッチな事し放題ってのは流石に冗談だけどな」
福神漬けの入った瓶を、テーブルの上を滑らすようにこちらへ寄越しながら迅。
「ま、要は確認だな。お前、妹って好きか嫌いかで言ったらどっちだ？」
「何の意識調査だ、そりゃ……まあ、ドラマや漫画みたいな妹ならともかく、リアルの妹ってそんなに良いもんじゃないって聞くからな。生意気だったり、ガサツだったり」
「だったら。逆に言えば、可愛い妹なら良い訳だ」
「まあ……それならな。――ってか、何なんだよ先刻から。その誘導尋問みたいなのは」
刃更の言葉に、迅は「ああ」と短く言うと、含みのある笑みを浮かべた。

そして。あっさりと、東城刃更の運命を変える言葉を口にする。

「良かったな――できるぞ、可愛い妹」

2

見渡す限りの蒼。それが、この日の空の色だった。

天気は快晴。セミまでが暑いと喚いているかのように鳴き、どこかの街が観測史上最高気温を記録した、真夏の昼下がり。刃更は迅と共に、駅前のファミレスへやって来ていた。

「つーか、マジか……」

東城刃更は、まだどこか信じられない口調で呟く。

――昨夜、迅が振って来た妹話。**あれは何と再婚のフラグだったらしい。**

選択肢で何気なく「可愛い妹なら好き」と選んだら、昨日の今日で顔合わせときた。

「往生際が悪いな……向こうに連絡を入れたら、すぐにでもお前と会って挨拶したいって言ってきたんだ。大体、お前にも今日で問題ないか訊いただろうが」

「まあ、そうだけどさ……」

確かに。まだどこか状況を理解できず、勢いに流され、携帯片手に問い掛けてきた迅に「構わない」と伝えたのは刃更だ。しかし一晩寝て、改めて考えてみるとやはり思うべきところがある。迅が再婚するという事は、刃更にとっても新しい家族ができるという事。それも妹だけでなく、母親もできるかもしれないという事だ。

……でも。

そう――あくまで、かもしれないだ。

当人同士だけでなく、向こうの家は刃更の妹になる娘さんも、再婚についてはクリアになっているという。だが、それでも迅の再婚はまだ完全に確定した訳ではない。要は、……後は、俺が納得するだけ、か……。

既に外堀が埋まった状態で、最終的な結論が自分次第とは少し気の重たい話で。やれやれと刃更が思っていると、ふと店の入口の方で電子音が鳴った。来店客を報せる合図。思わず身構えながら刃更は入口の方を見て、はあと嘆息した。明らかに別の家族連れだ。

「客が来る度に何を力んでんだお前は」

「い、良いだろ……別に」

フンと手の平の上に頬を置きながら、刃更はやって来たばかりの家族連れを見る。

――父親がいて、母親がいて、そして子供がいる。

そこにあったのは当たり前の幸せ。しかしだからこそ尊いもの。

東城刃更は思う――もし今からでも得られるなら、自分はあの幸せを得たいだろうかと。

……どうなんだろうな、実際のとこ。

正直よく解らない。女性の家族など、刃更にとっては未知の存在で。でも――その答えがこれから出るのかもしれない。未来で家族になるかもしれない人達と会う事によって。

――そして。自分でも何故そうしたか解らない。

新たな来店客を報せる電子音が鳴った訳でも、注意を引く何かがあった訳でも。

それなのに東城刃更は、まるで導かれるように――ふと店の出入り口へと視線を向けた。

「――――」

ゆっくりとした足取りで、二人の少女が店内に入ってきた。

一人は刃更と同じ位の年の頃で、恐らくは高校生だろう。もう一人は刃更より下。かなり背が低いため、中学生にも小学生にも見える。恐らく二人は姉妹なのだろうが、

「……うわ」

無意識に、驚きの声が漏れてしまう。これまでも、街で通りすがりに可愛い女の子を見かける事はあった。思わず立ち止まったり、それこそ振り返ったりしてしまう事もある。

だが――やって来た彼女達は、そんな生易しいレベルを完全に超えていた。

現に、彼女らに気付いた他の客達も、二人に視線が釘付けになっていて。やがて少女達は店員に連れられるようにして、刃更や迅とは逆側のテーブルへと案内されていった。

その後ろ姿を見送っていると――また新規客が来店した。

それは小学生くらいの娘を連れた、穏やかな雰囲気の二十代らしき女性で、

……とうとう来たかっ？

思わず刃更が身を硬くするのと同時、母娘がこちらに気付いたようにやって来る。

間違いない。刃更はやって来た母娘に対し、バッと勢い良く席から立ち上がった。

「ど、どうも初めましてっ……東城刃更です！」

しかし眼の前の女性は、困惑したように刃更を見た。突然の挨拶で驚かせてしまったのかもしれない。刃更は慌てて取り繕おうとして――突如、後頭部を拳骨でしばかれた。

「痛ってぇ！　な、何しやがっ……とっ!?」

「すいませんねー、ウチの馬鹿が」

刃更が背後を振り返るより先に、迅に強引に頭を掴んで下げさせられる。

前屈に近い状態まで強制的に身体を折られた刃更は、それでも強引に迅の手を払いのけ、

「誰が馬鹿だ。こっちは突然の再婚話が少しでも上手くいくように、気を遣って――」

と、そこで母娘が刃更達の前を通り過ぎていった。

「え……？」

その背中を刃更が眼で追いかけると、母娘はそのまま隣の席――旦那さんと思われる若い男性がいるテーブルへと腰掛けた。奥さんと子供を笑顔で迎えた旦那さんが、眼の前で自分の女房に声を掛けた刃更に対し、一瞬だけ厳しい視線を向けてくる。

……えっと、これはつまり。

Ｔｈｅ・勘違い。悶絶モノのミスに、気まずさ大爆発の刃更へ迅はやれやれと、

「緊張しすぎなんだよ、お前は……トイレで顔でも洗って、気を落ち着かせてこい」

「……悪い、そうする」

げっそりとした表情で言うと、刃更はふらふらと店の奥のトイレへ向かった。

……何をやってんだかな、俺は。

一人で緊張して、一人でテンパって、一人で舞い上がって。

このままでは、顔合わせでどんな失敗をしてしまうか解らない。迅の言う通り、少し気を落ち着かせるべきだろう。俯きながらトイレのドアを開き、中へと足を踏み入れ、

「えっ――？」

顔を上げた東城刃更は、そこで思わず固まった。

扉を開けたトイレの中――そこに女の子が居た。

その瞬間、狭い個室に気まずい沈黙が降りた。

トイレの中に居たのは、先程店へやって来た美少女姉妹の姉の方だ。

これから脱ぐのか、それとも穿いたところなのか。少女は身体をやや前に倒してスカートをたくし上げ、白のショーツのサイドに両の親指を引っ掛けた状態で。突然の事態に完全に思考を停止させ、呆然とした表情でこちらを見ていた。

だが誤解だ。刃更は断じて、女性用トイレの扉を開けたりなどしていない。

――実はこのファミレス、元は居酒屋の居抜き物件を改装したものである。

トイレは女性用と男女共用の二つだけ。恐らく女性用が使用中だったため、こちらの男女共用の方を利用したのだろう。しかしこの男女共用側のトイレには、常連の利用者ならば誰もが知っている欠陥があった――鍵の閉まりが悪いのだ。よって事情を知る女性客はなるべくこちらのトイレを使わないし、店側もできるだけトラブルが起きないよう、扉の内側に『鍵をしっかり掛けて下さい』という小さな張り紙をしてある。だがきちんと鍵を掛けたつもりでも、掛かっていない事はあったりした。そう――今この時のように。

刃更は慌てて扉を閉めて回れ右をしようとして――しかしふと『ある音』を耳にする。

それは少女が息を吸い込む音。悲鳴を上げる直前の動作で、

「っ――ちょっと待ってくれ！」

「んむぅっ!?」

辛うじて悲劇を防ぐ事に成功した刃更は、ひとまずホッと胸を撫で下ろし、

……って、ナニしてんだ俺はっ!?

気が付けば、刃更はトイレ中に完全に足を踏み入れ、少女の口を塞いでいた。

いけない。誤解と悲しい事故の筈が、状況が言い訳不能なレベルまで悪化している。

「怖がらせてすまないけど、頼む――どうか暴れずに聞いてくれ。この状況は故意じゃない。悲しい事故で、誤解なんだ……」

トイレの使用中に外から扉が開いたという事は、それは鍵をきちんと掛けなかった中の人間の落ち度だ。とはいえ相手は女の子。心情的には彼女が被害者で。だから刃更は、このトイレの鍵の閉まりの悪さ、扉の内側の張り紙について説明し、必死に説得を試みた。

この状況に加害者は存在しない。ここに居るのは――二人の被害者なのだと。

すると――刃更の説得が功を奏したのか、やがて少女はふっと身体の力を抜いた。

「えっと……もしかして解ってくれた、のか？」

こちらの問い掛けに、少女は頷きを返してきた。刃更が恐る恐る手を離すと、少女は居住まいを正し、「ふふっ」と笑った。友好の証を思わせる明るい笑顔だ。

良かった。どうやらこちらの誠意が通じ、状況を冷静に理解してくれたらしい。刃更も

つられて「はは……」と笑みを浮かべ――その瞬間、頬に衝撃を受けて横へ吹っ飛んだ。
平手打ちだった。すると、事故の原因である閉まりの悪い扉の鍵は当然ながら開いていて。扉にぶつかった刃更は、転がるようにトイレの外へ。そして床に尻餅をつき、
「な、何で……？」
「……何で、ですってぇ？」
頬を押さえながら呆然と見上げる刃更に、少女は口の端をヒクつかせて、
「女の子のトイレを覗いた挙句、中に入ってきて口を塞いで言い訳連発とか……自分のした事を、せいぜいよく考えてみる事ね――あの世で」
そのまま刃更に止めを刺そうと、少女が足を振り上げた時だった。
「――ん？　何をしてるんだ、二人共？」
横から聞き慣れた声が入った。戻りが遅いため様子を見に来たのだろう。
いつの間にか、迅がトイレの傍にまでやって来ていて、
「親父……」「迅さん……」
刃更と少女は同時に迅を呼び、「「えっ？」」と互いに顔を見合わせた。

そして――席に戻った刃更の眼の前には現在、二人の少女が座っている。
大きい方が成瀬澪。小さい方が成瀬万理亜。刃更が想像していた通り、二人は姉妹で。
彼女達は店員に飲み物の注文を終えると、
「あははー、すみません刃更さん」
万理亜が人懐っこい笑みを浮かべながら、
「店員さんには『待ち合わせしてます』ってちゃんと言ったんですよ？　でも、私達を案内してくれた人は、どうも刃更さんと迅さんの事を知らなかったみたいで」
要はバイト同士で情報を共有できていなかったのだろう。初歩的なミスである。
謎は全て解けた。しかし、だからといって『問題』が解決する訳ではない。
「……」
にこやかな万理亜とは対照的に、澪の方は先程からずっと無言で唇を尖らせていて、
……まあ仕方ないよな。
トイレの最中に扉を開けられたのに、機嫌良くしろというのも無理な話だ。再婚する家庭同士の大事な初顔合わせで、よもや最悪の第一印象を与えてしまうとは。
こんな事で再婚話がオジャンになってしまわないと良いが――刃更は改めて、眼の前に座る澪と万理亜の表情を窺った。そして思うのは、

……しかし、可愛いな。

単に外見だけでなく、雰囲気から何気ない仕草にまでドキドキしてしまう。特に澪は、刃更の方が少し誕生日が早いだけで、同じ高校一年生らしい。つまり互いの親が再婚前の今は、ただの同い年の女の子な訳で。そりゃあ鼓動も速くなるというものだ。すると、

「――でも、刃更さんが優しそうな人で良かったです」

斜め前に座る万理亜が、こちらに向かって「えへへー」と笑った。刃更や澪とは一歳違い、中学三年生にしては幼い容姿だが、この可愛さは何とも男の庇護欲を刺激する。

「年頃の男の子だし、切れてるナイフみたいな人だったらどうしようかと思ってました」

「は、はは……」

切れてるナイフみたいになる年頃って、どんな年頃だ。国民的リアクション芸人か。

「心配しなくていいぞ。何せこいつは可愛い妹が大好物らしいからな」

「みたいですね。何せ、女の子が入っているトイレに突入してくるくらいだし」

迅の冗談交じりの軽口に、正面の澪がチラッと冷たい視線を向けてきた。

「だから、あれは誤解で、事故だって何度も――」

「ふーん、まだ言い訳するんだ？」

刃更が嘆息混じりに告げると、澪は少しだけ前に身を乗り出した。

思わずドキっとするような距離。身長差が生む絶妙の上目遣いで見つめられる。

「……すいませんでした」

弱い。その破壊力に耐え切れずに刃更が謝ると、澪は「ん、許したげる」と満足そうに頷き、ようやく表情を自然なものにしてくれた。刃更はホッと胸を撫で下ろし、

「そうだ……えーと悪い、ちょっと聞きたいんだけど」

そこでふと、刃更は素朴な疑問を口にした。

「二人のお母さんはどうしたんだ？　後から来るのか？」

妹になるかもしれないのが、ここまで可愛く、さらには二人だった事には驚いた。

だがまあいい。迅も、先方の連れ子が一人だけとは言っていなかった。

しかし、迅が再婚する澪達の母親が不在では、この顔合わせの意味がないだろう。

「ああ、そういや言ってなかったっけな……」

と迅。

「彼女らの母親――千早さんはな、今は仕事の関係で海外に行ってる」

「……はい？」

ちょっと待て。この親父、今なんつった？　言うに事欠いて、再婚相手は現在は海外？

「……。あー……親父、ちょっと顔貸せ」

迅の腕を摑み、刃更は澪と万理亜に声が届かない場所――フロアの端へと移動した。
「……悪い、もう一度聞かせて欲しいんだけど」
刃更は腕を組み、右手の人差し指で左の二の腕をトントンと叩いた。
「ん？『なあ――お前、妹が欲しいって言ってたよな』ってヤツか？」
「どこまで遡ってんだ！　さっきの、再婚相手が海外に行ってるって件だよっ！」
「覚えてるんじゃねえか。で、それがどうしたんだ？」
「おかしいだろ！　再婚する相手方の家族との顔合わせに、当の本人が来ないなんて！」
しかも、昨日の今日でもう会いたいと言って来たのは向こうだ。別に出張している事を責めるつもりはないが、最初の顔合わせに本人不在では何の意味もないだろう。というか、
「まさかとは思うけど……何か騙されてるんじゃないだろうな？」
「ハハッ、その心配はねえよ。大体お前、この俺が騙されると思うか？」
確かに。むしろ、どちらかというと騙す側の方だ、この食わせ者の父親は。
「でも――それなら、顔合わせはその人が帰ってきてからでも良かったんじゃ……」
「生憎と、ちょっと急いだ方が良い理由もあってな」
フッという笑みから、ふと表情を真剣なものに変えて迅。
「刃更……お前、あの二人を見てどう思ったよ？」

「どうって……まあ可愛いと思ったけど」
何せ初めて見た時、アイドルか何かだと思った位なのだ。だから、
……急いだ方が良い理由、か……。
話の流れから、ようやく刃更にもその理由とやらが見えてきた。再婚するという事は、当然ながら向こうの家は母子家庭で。そして、その母親は海外出張で長期不在。
「確かに、あの二人だけだと、親は心配だろうな……だからなのか？」
「ああ。というかあの二人、実際に何度か不審者に襲われ掛けているらしい。そもそも、俺が街で出会った時も、変な野郎に絡まれていたくらいだからな。それに、どうやらしつこいストーカーもどきの奴まで居るそうでな」
「マジかよ……」
色々と物騒な世の中だが、まさか既に実害が出ていたとは。確かに緊急性を要する話だ。警察は民事不介入。事件になるまで、それこそ大抵は手遅れになるまで動かない。
「万理亜ちゃんの方はそのストーカー野郎が原因で、少し前から不登校になっているらしい。学校なんざ、行きたい奴が行きたい時に行けば良いものだが、行けない当の本人は苦しいだろうよ。今はあんな風に明るく笑っていてもな」
と迅。

「まあそういう訳で、お前さえ良ければ先にあの二人との同居生活を始めようと思ってるんだ。一緒に暮らして相手を知ってからの方が、再婚の失敗も少なくて良いしな」
「一時的に保護しながら、家族としてやっていけるかどうかも見極めろって事か？」
「これも何かの縁だ。俺達で守ってやれるなら守ってやりたいだろ？」
迅の言葉に、刃更は黙り込んだ。それは肯定の沈黙だ。そして、
……ん？
ふと、向こうにいる澪と眼が合った。それは先程までの強気な態度がまるで嘘だったかのように、不安げな表情で。刃更はスッと眼を細めながら、隣の迅に問う。
「――期間は？」
「取り敢えず一年。致命的に相性が合わない場合は、それより先に再婚について結論を出すかもしれないが――元のように互いに離れて暮らすのは、彼女達の安全がある程度確保できてからだな。こうやって話までしておいて、後々彼女達が何かの事件に巻き込まれて被害に遭ったなんて知ったら、俺もお前も寝覚めが悪いだろ」
それはそうだ。一年後にあの二人の母親が戻ってきて、いざ再婚をどうするかという話になった時。澪や万理亜に何か起きていたとしたら、それどころではなくなる。
何より――刃更自身、澪や万理亜には酷い目になど遭って欲しくはない。

「でも住む家はどうするんだ？　ウチには部屋に余裕なんてないぞ？」
「適当な物件を借りるさ。もう当たりも付けてある。家族になれるか見極めるには、なるべく環境は再婚後に近い方が良いし、そのまま再婚する場合は手っ取り早いしな」
「……あの二人は、そのお試しの同居の事は？」
「もう知ってる。お前が問題ないなら、ぜひそうしたいそうだ」
迅の言葉に、刃更はしばらく無言だった。だが、やがてゆっくりと呟く。
「……解った。親父がそう決めたんだろ？　なら良いよそれで」
別に投げやりになった訳ではなく、本心で。
「そうか。悪かったな、お前にはずっと黙ったまま話を進めて」
「良いって。親父がそうしたって事は、何か考えか事情があるんだろ」
ならば、話せるようになったらその事情を教えてくれれば良い。
自分と迅は血の繋がった親子で、それ位の信頼関係はもう築けている。
過去に刃更が問題を起こした時――全てを擲って庇ってくれたあの時から。
「戻ろうぜ親父……二人が心配しちまってる」
そう言って、刃更は迅と共に自分達のテーブルへと戻っていった。椅子に腰を下ろすと、
「……あ、あのぅ」

怖ず怖ずとした口調で、万理亜がこちらの様子を窺ってくる。
「あーゴメンな……ちょっと男同士の話がしたくてさ」
「コイツ、真剣な顔して何を言い出すかと思えば『二人があんまり可愛いんで、興奮しすぎてヤバイ』だと。やだねー思春期のガキは色めきすぎてよ」
「はっはっは。親父、後でもっぺん話があるからな」
今夜は拳でたっぷり語ろうか。親子水入らずでな。
そして、万理亜と同じく不安そうにしている澪に、
「昨日から急に色んな話を聞いたから、少し驚いちゃってさ……でも、もう大丈夫」
と刃更。
「君らのお母さんが戻るまで、まだ再婚話が完全にどうなるかは解らないけど……いきなり再婚ってなるよりは、まずは一緒に暮らして、家族になれるか試してみるっていうのは確かに良い考えだと思う。ゆっくりきちんと、お互いの事を知っていけるしさ」
「……本当？」
不安げに問い掛けてくる澪に、刃更は「ああ」と頷いて、
「ウチは男所帯だから、女の子が居てくれると色々とありがたいし……なあ親父？」
「だな。大体俺も、前から可愛い娘が欲しかったからな。刃更も妹が欲しいってずっとがっついてたし。何も遠慮する事はないぞ、二人共」
「ありがとうございます」「わーい、よろしくお願いしまーす」
澪と万理亜がペコリと頭を下げる。そして、
「それじゃあ、刃更君もよろしくね？」
顔を上げた澪は、こちらへニッコリとした笑顔を向けると、
「でも——もし今度またトイレに入ってきたら、その時は百回殺すからね」
「……はい」
眼がマジだ。刃更が表情を引き攣らせると、迅がその場をまとめる口調で、
「んじゃ、まあ……これからは、お互い家族見習いって事で」
ニヤッと笑って宣言したのは、新しい暮らしの始まり。
「色々あるかもしれないが——皆で一緒に幸せになろうぜ」
だから——少し前途多難な気はしたものの。この時はまだ、平和だった気がする。
東城刃更の日常も——そして世界も。

第1章 義理の妹の攻略方法

1

――またあの時の悪夢だ。
過去の光景の中に意識だけを浮かべながら、刃更は自分が夢を見ている事を理解する。
真紅。その色を宿した狂ったような瞳が、かつての刃更を見下ろしていた。
響き渡る大人達の悲鳴と怒声。背後でする大切な友達の泣き声。
そんな中、黒い人影がゆっくりと迫ってきた。
「――――」
無我夢中だった。何とかしなきゃ――それだけを思っていた。
だけど眼の前で起きた惨劇に、とうとう刃更の精神は限界を迎えて。

そして次の瞬間――刃更の視界が白く染まった。
意識がゆっくりと薄れていく。自分が助かったのかどうかも解らない。
ただ――それでも最後に、誰かの叫び声がしたのを刃更は聞いた。
その言葉を、今も東城刃更は忘れていない。泣き叫ぶ女性の声が、何度も繰り返される。
まるで呪いか何かのように――どうかあの子を返して、と。

2

「――っ！　はあっ……はあ……――っ」
刃更が眼を見開いたのと、荒い息を吐いたのは同時だった。天井を見上げている状況に、自分の意識が覚醒した事を理解。深呼吸を行ない、乱れている鼓動を落ち着かせる。
……何度見ても慣れないな、あの時の夢は……。
仰向けに寝た状態で、刃更は顔の上に持ってきた己の右手をジッと見つめていると、
「……あれ？　何か、まだ苦しいような……」
夢から覚めたというのに、何故か呼吸が上手くできなかった。そこへ、
「あ――やっと起きた」

ふと声がした。視線を下ろすと、掛け布団代わりの無地のタオルケットの上――刃更の腰の辺りを、太股で挟むようにして女の子が馬乗りになっていた。こちらの胸に両手をつき、悪戯っぽさを含んだような表情。その少女――成瀬澪は刃更を見下ろして、

「おはよ」「……おはよ」

刃更は反射的に朝の挨拶を返した。澪の体重が軽いのと、タオルケット越しのせいか、重みはそれほど感じない。だが、リアルな感触が刃更に現在の状況を思い出させる。

――自分と彼女は、昨日から一緒に暮らし始めたのだと。

引越しを業者に頼み、幾らか割り増しにすれば、荷造りから配送まで全てやってくれる。しかも仕事は丁寧かつスピーディ。ファミレスで初めて会ってから一週間。

東城家と成瀬家は、無事に一軒屋を借りて同居生活をスタートしていた。だが、

「えっと……何してんの？」

「何って、起こしてあげたの。男の子は、こうやって起こされると嬉しいと思って」

思わず問い掛けた刃更に、「サービスなんだからね」と澪は笑った。

恐らく、澪にそんな意図はないのだろうが――確かにこれはサービスだった。

こうやって起こす場合、普通は腹の上に乗るものだ。しかしタオルケットのせいで位置が解らなかったのか、澪は刃更の腰の位置に座っていて。これではまるで騎乗位だ。

さらに現在季節は夏真っ盛り。女の子の服装が、一年で最も露出が多くなる時季で。早い話が薄着です。澪の今朝の格好は、キャミソールタイプのブラトップに、下はホットパンツ。にゅっと出ている太股は視覚的に眩しく、また乗られる感触も最高なのだが。

それよりも――刃更は思わず別の場所に眼を奪われてしまう。

……でかいな。

実はファミレスで会った時からずっと気になっていたのだが。澪の胸はかなりのボリュームを持っていた。その豊かな膨らみは、伸縮性の高い素材のブラトップをはち切れんばかりの状態にしている。指が何本でも入りそうな谷間も相当なものだが、ブラトップの横からは、収まりきらない胸のサイドのライン――肌色の曲線が完全に出てしまっていて、

「ホラ、いつまでもボケっとしてないで、さっさと起きるの」

「あ、ああ……」

どうしよう。本人は気付いていないのだろうが、澪の両手が刃更の胸を押す度に、大きな胸がたゆんと揺れて絶景すぎる。思わず刃更が動けずにいると、

「ほら、早く起きないと……えっ？」

ふと何かに気付き、怪訝そうに表情を変えた。そして、手で何かの感触を確かめながら、

「……ね、ねえ。何か……変な固い感触があるんだけど？」

おや？　と刃更は首を傾げた。まさか、腰の上に乗られたのが裏目に出たのだろうか。

「え……っと、もしかしてそれは男特有の生理現象的な？」

「ち、違うわよっ！　何だろ……携帯か何かみたい」

ああ、と刃更は思い出す。昨晩は余り眠れず、仕方ないので携帯ゲーム機で遊んでいたのだ。いつの間にか寝てしまっていたようだが、恐らくはそれだろう。というか、

「起こしてくれるのは有り難いけどさ。君が乗ってるの、俺の腹じゃなくて腰だからな。女の子にそんな所へ乗られたら、本当に生理現象が起きても責任は取れないぞ？」

刃更の言葉に、澪はみるみる顔を真っ赤にした。ようやく自分の無防備さに気が付いたのだろう。てっきりすぐに飛び退くか、それこそパニクって踏みつけてくるかと思いきや、

「そ、そうね……そういう事もないとは言えないかも。お、お、男なんだし」

意外に耐えた。恐らく刃更に対しては、精神的に優位でいたいのだろう。だが動揺しているのはバレバレで。どうやら自分の思い通りに行っている時は良いが、不測の事態には弱いらしい。だから試しに、ちょっとだけからかってみる事にする。

「……さてと、それじゃあ起きるかな」

「ふぇっ!?　お、起きちゃうの？」

途端にわたわたし始める澪に、刃更は「ああ」と言って、

「いつまでもボケッとしてたら悪いだろ。せっかく起こしに来てくれたんだし」
「そ、それはそうだけど……で、でもっ」
焦る澪に、刃更は苦笑。下から澪を見上げながら、
「そんなに困るなら、今度からは普通に起こしてくれ。人の上に乗ったりしないでさ」
優しく諭したつもりだった。だが、澪は赤い顔を悔しそうにして、
「べ、別に困ってなんかないわよっ……そんなの、た、ただの生理現象じゃないっ」
おかしな方向に意地を発揮した。刃更が止める間もなく、
「ホ、ホラっ、さっさと起きなさいよっ！」
刃更のタオルケットを摑んで引っ剝がした。
するとその拍子に、タオルケットの中から何かが宙へ——澪の方へと飛び出した。
「えっ……？」
思わずタオルケットから手を離し、澪はそれをキャッチする。携帯でもゲーム機でもなかった。勿論、生理現象の原因でもない。アレは股間に据え置きだし、宙とか飛ばれたらえらい事だ。ならば何か。刃更の眼が見たのは、プラスチック製のケースだった。それはゲームや映像作品のソフトによく使用されているもの——というかまさに何かのソフトだった。パッケージの表側がこちらを向いていたため、刃更の眼がそのタイトルを捉える。

可愛らしい少女のイラストを前面に押し出したその作品の名は、
『俺とリアル義妹の青春番外地』
妹モノのゲームだった。
「ひっ……——きゃっ!?」
澪は刃更の腹の上にソフトを放り、その拍子にバランスを崩してベッドから転げ落ちた。
「お、おいおい大丈夫か——ん？」
するとパッケージの逆側が上になった。澪が見ていたゲームの内容が書かれている裏面だ。可愛らしい女の子を映したゲーム画面は、肌色とモザイクが満載で。
——早い話がエロゲーだった。しかも、ライトなタイトルとは裏腹に調教系。
清々しい筈の朝の空気が、一瞬でこの世で一番気まずいものになる。
「な、何でこんなモンが俺のベッドに……？」
刃更は十五歳だ。こんなものを買った覚えはない。しかし床の澪は戦慄しながら、
「あっ、あっ、アンタ……っ、まさかあたし達と同居を始めたその日の晩に、そんなゲームやってたわけ？　やっぱり……あたし達にそのゲームみたいな真似をする気なの？」
「やっぱりって何だっ！　つーか、こんなモン俺が持ってる筈——っと？」
「やっ、ちょっと……きゃっ!?」

慌てて否定してベッドを降りようとすると、刃更までバランスを崩して床へ倒れ込んだ。
澪に乗られて下半身が痺れていたのだろう。とっさに覆い被さる形になって、
「あ……」
まるで押し倒したような感じ。吐息すら感じられる距離まで、互いの顔が接近する。
言葉を発する事すら躊躇ってしまうような近さ。女の子の甘い匂いがふわりと香る。
倒れ込んだ拍子に、澪のブラトップはストラップが両肩から腕の方へずり落ち、大きな胸は今にも零れそうな状態で。あわや先端が見えそうなところまで脱げ掛けていた。
またホットパンツから出ている艶かしい太股の間には、刃更の片膝が入ってしまい、あと一ミリでも前に動かせば、決して触れてはいけない場所に当たりそうになっている。
そして時間にして僅か十数秒、永遠にも思える沈黙の中、微動だにできずにいると、
「こ……」「……こ？」
ようやく澪が発した声を、刃更が繰り返すと、
「こぉの変態ぃぃぃぃっ！」
「ごっはあぁぁぁぁっ!?」
澪の振り上げた膝が、刃更の鳩尾に叩き込まれた。そして刃更の身体が僅かに浮いた隙に、澪はその場を脱出。部屋の扉の所で、床に転がったまま苦痛に呻く刃更を振り返り、

「こ、今度あたしに変な事しようとしたら、百回殺すからねっ！」
そう叫ぶように言うと、部屋を出て行った。後にはただ、床で蹲る刃更だけが残される。
「待て、誤解だ……」
手を伸ばし、呻くようにして発せられた呟きを、しかし聞く者はいない。
ベッドの上では、そんな刃更を嘲笑うかのように、可愛らしいイラストの少女がこちらを見ている。『俺とリアル義妹の青春番外地』のヒロインが——優しい笑顔で。

「くそ……親父だな、あんな悪趣味なモン人のベッドに仕込んだのは」
夏休みという事もあり、刃更はパジャマ姿のまま階段を下りて一階へ向かった。
というか、刃更が嫌われて困るのは迅だろうに。再婚が失敗しても良いのかあの親父は。
まあ再婚がどうなるにせよ、誤解でこちらの人格を疑われるのは勘弁なので、
「取り敢えず、後で誤解だけはきちんと解いておかないと……」
リビングの扉を開けると、途端に美味しそうな朝食の匂いが鼻腔をくすぐる。
特に焼けたパンの香ばしい匂いに、空っぽの胃が反応。そこへ、
「あ、刃更さん。おはようございますっ」

視線の先、対面キッチンで料理をしていた万理亜がこちらに気付き声を掛けてくる。
「あ、うん……お早う」
刃更は軽く頭を下げた。どうやら澪はまだ、先程の勘違いを吹聴していないらしい。
リビングに迅と澪の姿はなかった。トイレか、もしくは洗面台で身だしなみでも整えているのだろう。ホッと胸を撫で下ろしつつ、刃更がキッチンの方へ足を向けると、
「ん～、よっと……」
小さな身体で大きなフライパンを見事に操る、万理亜を見る事ができた。
一番年下ではあるものの、学校に行っていない事も関係あるのか、万理亜は家事全般が得意なのだという。何せ同居する前から、家事は任せてと豪語していた位だ。
そんな万理亜が身に付けているのは、新妻が着そうな白のフリル付きのエプロンで。
幼い外見の万理亜が装備すると、却っておかしな色気を感じさせて何とも困る。
刃更は戸棚から取り出したコップを片手に冷蔵庫を開け、パックの牛乳を注いだ。
「もうちょっと待ってて下さい、もうすぐできますよー」
「ああ、サンキュ――ぶふうぅっ!?」
思わず口に含んでいた牛乳を刃更はリバース噴射し、宙に小さな虹を生み出した。
くるんとこちらを向いた万理亜の姿を、正面からモロに見たからだ。

「あれれー、零しちゃいましたね。刃更さんは、朝からやんちゃさんです」
万理亜は穏やかな笑みを浮かべると、トコトコこちらへやって来る。
「っ、ちょっと！　待ってくれ万理亜ちゃん！」
慌てて両手を前に突き出しそれを制止する刃更に、
「え？　どうしたんです？」
万理亜はキョトンと小首を傾げた。ペンギンみたいな仕草が可愛い。思わず一緒に身体を傾けたくなる。だが、今はそれよりも、
「そっちこそ朝から何なんだ、その格好は……？」
刃更は指摘した。だって裸エプロン――リアル裸エプロンなのだ。二十一世紀なのに。
いかん落ち着け。ペンギンだ。ペンギンの裸エプロンだと思えば、何とか――なるか！
「えっと……何か変ですか？」
刃更が止める間もなく、万理亜は再びその場でくるりと回転。しかし、
「……あ、あれ？」
万理亜はちゃんと服を着ていた。キャミソールの重ね着に、ミニスカートという組み合わせのため、正面から見ると裸エプロンに見えていただけだ。すると万理亜は、
「……はは～ん、そういう事ですか」

自身の姿を見下ろすと、刃更が何に焦っていたのか気が付いたのか、にまーと笑い、
「年頃の男の子ですもんね、刃更さん……刺激強すぎました？　興奮しちゃいました？」
確かに刺激は強かったかな。主に痛々しい方向で。
「……何か失礼な事考えてますか？」「いえいえ」「ちゃんと興奮して下さい」「ははは」
兄と妹でするにはおかしくねーかこのやり取り、などと刃更が思っていると、
「そうだ。先刻、澪ちゃんが起こしに行きましたけど、どうでした？」
「……お陰で眼が覚めたよ」
流石に朝食の前にゲソパンを食らったとは言えない。しかし、
「いえいえ、そういう事ではなくて」
と万理亜は手をふりふり振って、真顔で、
「刃更さんのベッドに仕込んだあのソフトみたいな事――澪ちゃんにしましたか？」
「アレは君の仕業かあああああぁぁぁぁぁっ！」
とっさに刃更は絶叫していた。犯人発覚。まさか万理亜だったとは。
「一体、何のつもりであんな悪趣味なモンを……」
「何のつもりって……刃更さんは、あまり義理の妹の調教に詳しくなさそうだったので」
「詳しくてたまるか！　大体、どうして俺がアイツを調教しないといけないんだよっ！」

「え？　だ、だって……」
と万理亜は途端にオロオロと困惑したように、
「義理の妹なんて、調教する以外に使い道ありますか？」
「あるわぁぁぁっ！　って言うか、使い道って何だ使い道って！」
侮れねえ。最近の中学生が侮れない事は知っていたが、このロリ妹は一体、自分の姉を何だと思っているのか。すると万理亜は握り拳をブンブン振りながら、
「で、でも……あのゲーム凄いみたいですよ？　最後は完全に義理の妹を虜にして、言葉攻めだけでアヘ顔にできたり、潮まで噴くようにできたり。だから刃更さんも見習って」
「知らんわっ！　何だって俺が、そんなモン見習わないといけないんだよ！」
「だ、だって……義理の妹なんて、アヘ顔で潮を噴く以外に存在価値なんて――」
「あるよっ！　そんなん幾らでもあるよっ！」
全三次元と全二次元の義理の妹に謝れ。いや、そんな事より、
「えっと、万理亜さん……？」
敬語になりながら、刃更は問い掛ける。まさか――まさかとは思うが、
「あのゲーム……ひょっとして君の私物だったりする？」
もしそうだったらどうしよう、と刃更がゴクっと喉を鳴らすと、

「いやですね刃更さん、そんな訳ないじゃないですか。私まだ中学生ですよ？」
あははー、と笑って手をフリフリしながら万理亜。
「あれはこれからお世話になる刃更さんへの、引っ越し祝いみたいなものです」
「引っ越し祝いにあれは最悪だ。それなら、もうちょっとちゃんとしたものにしてくれ」
「……つまり『ゲームでは物足りないから、ちゃんと生身が良い』って事ですか？」
「へ……？」
「わ、解りました。恥ずかしいですけど、他ならぬ刃更さんがそうお望みなら……」
眼を点にした刃更の前で、万理亜はスッとエプロンを脱いだ。恥ずかしそうにミニスカートの中に手を入れ、たくし上げられる状態にすると、わざとらしくモジモジしながら、
「あ、あのぅ……私、調教とかよく解らないんですけど、最初からこんな明るい朝にやるというのは、ちょっとレベルが高くないですか？」
「やるかっ！　大体調教なんてモノ自体、既に中高生の手には負えねえレベルだよ！」
「んー何の騒ぎだ？」
そこへ、リビングの入口から声がした。パジャマ姿で新聞を小脇に抱えている迅だ。慌てて刃更が言い訳しようとして、しかし先に万理亜が頬を赤らめながら、
「えっと……実はこれから刃更さんに、初めての調教をして貰うんです」

「だから、やらないって言って――」
「――へえ、そうなんだ」
続いてリビングへ入って来た澪が、ケダモノを見るような視線を刃更へ向けた。
「アンタ……先刻あたしの事押し倒したのに、今度は万理亜と青春番外地なんだ。へー」
「人聞きの悪い事を言うなっ、あれは単に足が痺れただけだろ！」
そして、刃更は「そうだ」と思い出したように、
「聞いてくれ。先刻のソフトは万理亜ちゃんが――」
「え？　一体何の話です？」
途端にとぼけられた。
「何の事だかさっぱりです。刃更さんの趣味の責任を、私に押し付けないで下さい」
「くっ……こんな時だけ純粋な顔を」
こちらをからかうために、スカートの中に手を入れて調教待機までしやがったクセに。
「親父……何とか言ってくれ」
長年二人で暮らしてきた父と子。想いはきっと通じる筈。すると先にテーブルの席に腰掛けていた迅は「ああ？」と新聞から顔を上げると、「ふむ」と顎に手をやった。
「可愛い妹が二人もできて、はしゃぎたい気持ちは解るが――犯罪だけは勘弁な」

「欠片も解ってねえ！」

理不尽だ、と刃更は思う。自宅の筈なのに、このアウェイ感は一体何なのだろうかと。

3

新しい共同生活が始まれば、どうしたって必要な物は生じるもので。

この日。午前中は引越しで残っていた荷物を片しつつ、午後からは皆で家具屋に行き、カーテンやシーツなど新たに必要なものを購入した。広い店内を一通り見て回るだけでも意外と時間がかかってしまい、家に帰る頃には陽が傾きかけていて。

――そして現在。東城刃更は、自転車を漕いでいた。

引っ越したばかりの新しい街に少しでも早く慣れるようにと、近所を散策するためだ。

「夕方になると、ちょっとは過ごしやすいよな」

呟くように口にしたのは独り言ではない。後ろの荷台には、澪が座っていて、

「何であたしが……」

こちらの腰に腕を回しながら不満そうに呟いた。女の子との二人乗り。しかも超巨乳。男なら胸躍る展開だというのに、まさかこんなギスギスした二人乗りになるとは。

「そう言うなって……俺はこの辺詳しくないけど、そっちは普段よく来てるんだからさ」

澪が通っている高校は、引っ越した新居の近くにあった。だから、出掛ける際に澪を誘ってみたのだ。良かったら街を案内して欲しいと。今朝のソフトは万理亜の悪戯だと理解してくれたみたいだが、そう簡単に気まずさは消えない。澪は露骨に嫌な顔をしたが、ブツブツ言いながらも、最終的には案内役を引き受けてくれたのである。

「ねえ……刃更、アンタ本当にあたしと同じ学校に来るの？」

「みたいだな」

背後からの問い掛けに対し、刃更は肯定の言葉を口にした。

――この転校は迅の提案によるものだった。新居からでも前の学校へ通う事はできたが、澪の高校なら歩いて行ける距離にある。校風も良いという事で、それならばと転校を選択した。まだ高校生になって一学期を終えたばかり。無論それなりに仲良くなったクラスメイトがいなかった訳でもないが、通っていた高校に対する名残惜しさは少ない。

……それに。

澪が以前、襲われ掛けたという話もある。刃更が同じ学校に通う事で、少しでもそうした事態やリスクを避けられるのであれば、転校するのは有りだろう。

後ろの澪は、「ふーん」と言ったきり、嫌とも良いとも言わなかった。茜色に染まりつ

つある街の中を、刃更と澪を乗せた自転車はゆっくりと進んでゆく。すると、
「……ねえ。今朝、何の夢を見てたか訊いても良い？」
「……あー」
ふと何気ない口調で問われ、刃更は頬を掻いた。澪が起こしてくれる前、恐らく自分は激しくうなされていた筈だ。澪からしてみれば、それは当然の疑問で。
……気ぃ遣わせちまってるよな。
澪の、無理に訊こうとはしていない雰囲気に、刃更はどうしたものかと考える。
残念ながら自分の事情を、一般人の澪に話す訳にはいかない。だから、
「昔……田舎に住んでた頃に、ちょっと色々あってさ。トラウマっていうのかな……今でもたまに見るんだ。その時の夢を」
「……そうなんだ」
澪は短くそう言ったきり、それ以上を訊いてくる事はなかった。ただほんの少しだけ、互いの間にある空気が柔らかくなった気がする。それはきっと澪の気遣いなのだろう。
ありがたかった。
もし全てを話したら——恐らく刃更は、澪や万理亜とは一緒に居られなくなるのだ。

散策のついでに頼まれた食材の買出しのため、刃更と澪はスーパーへ。
「結構買ったなぁ……」
引越し直後という事で、食材だけでなく調味料の類も色々と買う羽目になった。
「先に自転車を持ってくる。重いだろうし、カートのままでいいから出口まで来てくれ」
「ん、了解」
頷く澪を残し、刃更は一足先に店の外へ。
そして辿り着いた駐輪場で、自分の自転車の防犯錠に鍵を差し込んだ時だった。
『——今朝、何の夢を見てたか訊いても良い？』
澪の言葉を思い出し、今朝見た悪夢が脳裏にフラッシュバックした。途端に、
「……——っ！」
一瞬、呼吸の仕方を忘れ、動悸が跳ね上がり、刃更は胸を押さえた。
——忘れられたら、どれだけ楽かと思う。だが、忘れる訳にはいかないのだ。
五年前の事件。刃更は被害者であると同時に、加害者でもあって。
だから。東城刃更はこれからも、この苦しみを一生背負って生きてゆく。
「……っと、いけね」

澪を待たせている事を思い出し、刃更は自転車を押して店の出入り口へ。すると多くの人でごった返す中、すぐに澪を見つける事ができた。

げ、と刃更は顔を顰める。澪が、明らかにガラの悪そうな四人の青年に囲まれていた。そして、馴れ馴れしく肩に手を伸ばしてきた男の腕を、澪は払いのけるとキッと睨み、

「――触んないで。あたしに触れたら、百回殺すわよ！　ねえ、刃更！」

強気だ。並の高校生男子なら腰が引けたかもしれない。だが、残念ながらこの四人組には大した効果はなかった。ニヤニヤと笑いながら、澪の傍から離れようとしない。

「……えーと、俺の連れが何か？」

だから取り敢えず、刃更は無難に声を掛ける事を試みた。

「――あん？　ナンだお前？」

「いや、その子の連れなんだけど」

「フーン……だから？」

あれ？　こういうのって、男連れだって解れば引き下がるものじゃないか普通？

少しマズそうな展開に、澪が表情を硬くしてこちらを見た。

……さて、どうしたものか。

刃更が考えていると、一番近くの青年がガムをクチャクチャ嚙みながら、顔を斜めに傾けつつ近付いてきた。威嚇か挑発か知らないが、ムカつく顔をするのが中々に上手い。

「バサラだぁ？　ハッ、何だそのダセぇ名前――」

「――お前の顔ほどじゃねえよ」

不機嫌そうに言うなり、刃更は自転車のハンドルを引くようにして持ち上げた。その場で前輪を高く浮き上がらせ、ウィリーの状態にし、

「あ――？」

釣られる様に見上げた眼の前の青年の顔へ、振り下ろすように前タイヤをブチ込んだ。

直撃。「プゲッ」と短い声を上げて、青年がそのまま後ろへ引っくり返る。

――突然の事態に、その場に居た誰もが呆然となる中。

刃更は自然な動作で自転車のスタンドを立てると、残る三人の青年の間をスタスタ通り抜けて澪の下へ到着。カートの買い物カゴに入っているエコバッグの中に手を突っ込み、

「テメエ――っ！」

事態を理解し、殴りかかろうとしてくる青年達に向けて、買ったばかりの調味料の小瓶をキャップごと速攻で開けて中身をぶち撒けた。

「ごはっ!?」「テ、メ……っクショイ！」「眼がっ、眼が痛ってえ……っクション！」

それはそうだろう。お値段二九八円の、お徳用テーブル胡椒だ。

「――ホラ、ぼーっとしてないで逃げるぞ！」「え？　え？」
困惑する澪の手と、買い物カゴの中のエコバッグを摑んで駆け出した。
今は一刻も早くここから逃げるのが先だ。前カゴに無理矢理エコバッグを押し込むと、
「摑まれ、行くぞ！」
澪を後ろに乗せて、全速力で発進。と同時。
「ぐはァ――っ!?」
自転車がぐにっと何か踏んだ。多分、最初に前タイヤをブチ込んで地面に倒れたままだった青年だろう。しかし悪いが構ってはいられない。
東城刃更は立ち漕ぎで、その場から全力で撤退する。
そして――街道を自転車の二人乗りで爆走する事しばし。
もう追いかけてこないだろう、というタイミングで信号待ちになった。
「ふう、ここまで来りゃ大丈夫か……」
真夏の全力疾走で軽く息が上がり、汗が額にじんわりと滲む。すると、
「……ゴメンね。あたしのせいで」
ふと背後でした澪の声が、殊勝なものになっていた。澪はポフっと刃更の背中へ額を置き、こちらへ軽く体重を預けてくる。刃更は肩越しにそっと背後を振り返り、そんな澪の顔を見た。自分のトラブルに刃更を巻き込んだ事を気に病んでいるのか、眼を伏せるようにして視線を落としている澪の表情は切なげで、
……こんな顔もするんだな……。
新たに目の当たりにした澪の一面。だが、東城刃更はこれ以上そんな表情をさせたくなくて。何か上手い言葉なんて見つからなかったけれど――それでも、
「えっと――なら、ちょっと寄り道して帰るか」
信号が青になると同時、刃更は走らせ始めたハンドルを切った。
「……え？」
家とは別の方へ向かい始めた事に澪が驚きの声を上げる。
だが刃更は止まらない。時刻は夕暮れ。今から行けば、ちょうど良い頃合の筈だ。

刃更が澪を連れて来たのは、広大な敷地を誇る公園だった。
夕陽の丘と呼ばれる景観スポットもあるが、地元では有名なため、この街に通学している澪は知っているだろう。だから、刃更は敢えて人の来ない場所へと案内した。
それは公の展望台ではないものの、街の風景を一望できるポイントで、

「わあ……！」

街並みを見下ろした澪は、驚きと喜びの声を上げた。刃更の計算通り、到着したのはジャストのタイミング。世界が等しく優しい茜色に染まる、夕焼けの風景が広がっていて、

「綺麗……でも引っ越して来たばかりなのに、どうしてこんな場所を知ってたの？」

「親父があの家に決めた時、俺も一緒にこっちに来ててさ。有名な公園だっていうから、不動産契約で待っている間に、一人で来てみたんだ。そしたら偶然ここを見つけた」

と澪の隣に並んで刃更。

「悪くないだろ結構」

「うん。こんな場所があったんだ……全然知らなかった」

「今度は夜に来ようぜ。この公園は夜景も有名だ。ここからも綺麗に見えると思うしさ」

ちょっとした未来の約束を提案する。すると、

「うん……そうだね。……また今度」

ふと澪の表情が曇った。ここからは先程のスーパーも見える。青年達に絡まれた時の事を思い出してしまったのかもしれない。刃更は「えーと」と指で頬を掻きながら、

「今日さ……朝、俺の事起こしてくれただろ」

その言葉に、澪がこちらを見た。だから、刃更はゆっくりとした口調で、

「家族ってさ——多分、どれだけ互いの面倒や迷惑を許容できるかって事だと思うんだ」

「え……？」

「お前にとって今、俺は朝起こしてあげても良い程度には近しい存在な訳だろ？　勿論ウチの親父とお前や万理亜ちゃんのお母さんが再婚するかどうかは、まだ完全に決まった訳じゃないけどさ……それでもこれから一緒に暮らして行きながら、小さな事でもお互いに助け合ったり、認め合ったりして、少しずつ家族になっていければって思うんだよ」

何故なら、

「少なくとも俺は、さっきスーパーでやったのは当然の事だって思ってる。それは多分、親父も同じだ。もしまたお前や、万理亜ちゃんがあいうトラブルに巻き込まれたら、俺や親父はきっと何度だって助けるよ。でも、それを気にしたり遠慮したりする事はないんだ。だってそんなのは、きっと朝起こしてくれるのと同じで、当たり前の事なんだから」

取り敢えず、伝えておきたい想いを何とか言葉にしてみたのだが、

「……」

しかし澪は口を閉ざして黙り込んだ。ちょっと言い方が遠回しだっただろうか。

……上手くないな、やっぱり俺は。

こういう時、迅ならばもっと単純明快な言葉で伝えられるのだろうが、如何せん刃更は

あの父親ほど自信たっぷりに物は言えない。
「えーと、だからさ」
視線を地面に落としつつ、どうにか言葉を繋げようとした時だった。
「……生意気」
ふと零れた呟きに、刃更はふっと顔を上げた。自分の隣、澪の顔には笑みがあって、
「今。少しだけ刃更、お兄ちゃんぽかったかも」
「……そうか？」
「うん。ちょっとだけね」
おお。何か良い感じかも。
「なら今朝と、ファミレスのトイレでの事は水に流して――」「それはまだ駄目」
すげなく言った澪の声は、しかし明るかった。先程までの重い空気が、まるで嘘のように。刃更は思う。自分達が本当の家族になるための道のりは、きっとまだ遠いけれど。
でも自分と澪は今、一歩距離を縮める事ができたのかもしれない。だから、
「さて、そんじゃそろそろ戻るか。良い具合に腹も減ったしさ」
同じ家に――家族のように。刃更はくるりと踵を返し、停めてある自転車へと向かった。
「……そうね。万理亜と迅さんも待ってるし」

澪の穏やかな声が背中から聞こえてくると、足音もまた付いてきて。
二つの影がゆっくりと、同じ方向へと歩いてゆく。

――だけど。
「――――」
背中を向け、影しか見えない刃更には、澪のこの時の表情を見る事はできなかった。
先程よりも深い悲しみを湛えた、澪の切ない表情までは。

4

同居生活が始まってから、一週間が経過した。
流石にまだ『知り合い以上、家族未満』の域を脱する事はできていない。
それでも当初に比べれば、大分ぎこちなさはなくなってきていた――そんな矢先だった。
「――俺、明日から仕事でしばらく海外に行く事になったから」
「へ……？」
帰宅して早々、玄関で迅がした突然の発言に、刃更は思わず聞き返す。

澪と万理亜には聞こえていない。二人は今、キッチンで夕食の準備をしている。

「イタリアの客がアラブの写真を欲しがっててな。ちょっくらドバイでドバって来るわ」

迅の職業はフリーのカメラマン。写真を撮る事を生業にしているプロである。

そのため、たまに海外へ写真を撮りに行く事もあるのだが、

「ちょ、ちょっと待て！」

ポンとこちらの肩を叩いて階段を上ってゆく迅の後を、刃更は慌てて追い掛けた。

「どういう事だよ、急にドバイだなんて！」

迅の後に続いて、彼の部屋に足を踏み入れた刃更は問い詰める。しかし迅はあっさりと、

「馴染みの客なんだ、仕方ねーだろ」

明日からの仕事のための準備か、迅はカメラにレンズを装着してゆく。

迅は、世界中に顧客を持っている特殊なカメラマンだ。業界では『ＪＩＮ』という名は、一部の間で非常に有名で、撮った写真はそれ自体が絵画のような芸術性を持つと評されている。多くのファンもおり、年収も同業のカメラマンより桁が一つか二つ上だ。

「お得意さんが大事なのは解るけど……断れないのかよ？」

今は、澪や万理亜と同居を始めたばかりの重要かつ微妙な時期だ。

ここで唯一の大人である迅に家を留守にされては、精神的な支えがなくなってしまう。

「ウチには、普通に生活するには充分な蓄えがあるんだしさ……」

「フリーは信用が第一だ。一度断ったら、二度とその客から仕事は来ねえんだよ」

「でも……、親父はウチの家長だ。家族を守るのが仕事だろ」

「だから行くんだ。良いか。父親が居ない時、家族を守るのは長男の仕事だぜ」

「それは……」

諭すように言われ、反論の言葉を失くした刃更の肩に、迅は軽く手を置いて。

笑う。

「心配すんな、お前ならやれる――何せお前は、俺の自慢の息子だからな」

――そして翌日の夜。

「じゃ、留守の間よろしくな」

そんなあっさりとした一言と共に、迅を乗せたタクシーは走り去った。

「やれやれ……」

刃更は自分の手にある物――迅から渡された一枚の写真に視線を落とした。昨日、家の前で記念に四人で撮った一枚だ。案の定、刃更の表情は引き攣ったものになっている。

「……ん？」

しかし、ふと刃更は自分が見ていた写真に違和感を得た。

写真の中、澪や万理亜は確かに笑顔を浮かべている。それなのに、

……気のせいか？

光の加減なのだろうか。澪はどこか、寂しそうな顔をしているようにも見えた。やはり、大人の迅が居ない事に不安を感じているのかもしれない。

「――良し」

刃更は意を決し、自分の部屋を出た。階段を降りながら、今日は寿司や鰻などの出前でも取ろうと思案する。迅からはクレジットカードを預かっているし、こういう時は景気付けに美味しいものを食べるのが一番だ。だから刃更はリビングの扉を開けて、

「なあ二人共、今日の晩飯なんだけどさ――」

そこまで言った時だった。室内にある重たい空気に気が付いたのは。

「……」「……」

刃更の呼び掛けに、ソファの澪も、食事用のテーブルの椅子に腰掛けた万理亜も無言。ただ反応はあった。こちらに対し、凍るような冷たい視線を向けてきたのだ。

――だから、刃更はやれやれと嘆息する。

あーあー来たよ。ホラ来たよ。性格に少々難ありとはいえ、いきなり可愛い妹が二人もできるなんて、絶対おかしいと思ってた。とうとう来たのだ、ここまでの幸運の反動が。仕方ない。唯一の大人が不在になっただけでなく、これからは若い男女だけで一つ屋根の下。いきなりそんな状況になってしまっては、警戒されても無理はない。とはいえ、

「……」「……」

ちょっと長くないですか無言。テレビやラジオだと完全に放送事故レベルなんだが。

「あのー、出前とかどうですかね……寿司とか、鰻とか」

特上でも良いのよ、と微妙に丁寧語になりながら提案する。すると、

「……あのね刃更、お願いがあるんだけど」

ようやく澪が重い口を開いた。

「ああ何だ、どうした？　何か希望があったら何でも言ってくれ」

刃更は即座に澪へと歩み寄った。口をきいて貰えた。そんな些細な事でも凄く嬉しい。

そして――東城刃更は、澪が口にした「お願い」を聞いた。底冷えする声で、

「――この家から出てって」

刃更は一瞬固まって、どう言ったものやら言葉を探す。

「えーと……」

うん。ちょっと驚いた。ちょっと驚いたかなー。だって何の出前にするか訊いたら、家を出てけとか。会話のキャッチボールができてないにも程がある。

「……悪い、もういっぺん言ってくれるか？」

取り敢えず刃更は、自分の聞き間違いだった可能性を模索してみる——望み薄だが。

「————」

すると万理亜が、こちらへ向かって軽く手を上げた。何か意見があっての挙手——という訳ではなかった。小さな手の平が、刃更に対してかざすように向けられていて、

「へ——？」

そんな万理亜の手が光った——と思った瞬間。

刃更は突然、突風のようなものを受けて壁へと吹っ飛ばされていた。

「がは——っ!?」

背中に衝撃。呼吸が一瞬できなくなり、思わず激しく咳き込む。そこへ、

「——澪さまの言った事が聞こえませんでしたか、刃更さん？」

いつの間にやって来たのか、眼の前に万理亜が立っていた。

これまでとはまるで別人のような、冷酷な表情を浮かべて。

「今のは……何なんだ、お前らは……？」

当然——否、必然ともいうべき刃更の問い掛けに、

「へえ……結構冷静ですね」

少しだけ驚いたように万理亜が言う。東城刃更の日常を変える、決定的な一言を。

「初めて魔法を見た人間は、大抵はパニック状態に陥るものなんですが」

「魔法……？」

眉を顰める刃更に、「ええ」と万理亜は肯定する。

「フィクションや空想の産物だと思ってましたか？　実在するんですよ魔法は——いいえ、魔法だけじゃありません。人間以外の種族というものも」

言うと同時、青い輝きと共にバサっと万理亜の背に広がったものがあった。人間には決して存在しない物——それは黒い翼だ。耳もそれまでとは異なる、尖ったものに形状を変えていて。人あらざる者。存在する事は信じられなくても、その名は誰もが知っている。

「悪魔だった——っていうのか」

「そういう事です」

こちらが呟くと同時、間髪入れずに即答が来た。

断言だ。俄かに信じたくはないが、どうやら本当の事らしい。

「そして刃更さんには出て行って貰います。この家は、澪さまがいただきますので」

胸を張って言う万理亜に対し、澪は「出て行け」と言ったきり黙ったままだ。

……澪さま、か……。

万理亜の澪に対する呼び方の変化から、刃更は二人の関係性を理解した。だから問う。

「……どういう事だよ澪。今のこの状況は、お前の差し金って事か？」

「口を慎んでくれますか刃更さん。ただの人間が、未来の魔王に対して不敬が過ぎます」

刃更の問い掛けに対し、横から応えたのは万理亜だ。

「魔王……って、そいつが？」

「悪魔という種族があるんです。それを統べる王がいらっしゃるのは当然でしょう。私達の原初の宿敵である神族にも、王たる上位神がいるのと同じように。ついでに、貴方達が言うところの勇者も実は存在するんですよ？　まあ尤も、連中は自分達の存在を隠すため、基本的に隠れ里に住んでいるので、普通の人がその存在を知る事はまずありませんけど」

「……」

平然と語られる話に、刃更は無言を返す。いきなりそんな話をされても、まだ自分が置かれている状況を信じる事ができない。

「……何だって魔王がこんな家を欲しがる？　魔王なら、魔界にデカい城とかあるだろ」
「色々あるんですよ、事情が。その辺りの詳しい話を、貴方にする義務はありません。とにかく。この家は、澪さまと私がいただきます――この人間界での拠点にするために」
全ては拠点となる家を得るための演技だった。ならば、
「じゃあ、親父とお前らの母親の再婚話は――」
「それこそ存在しない話です。迅さんとは街で偶然知り合いました。豪快に見えて、良い人ですよね凄く……だから私の――サキュバスの魔法で記憶を操作させて貰ったんです」
サキュバス。女性型の夢魔であり淫魔だ。もし万理亜の正体がそれなら、見せた夢を現実と思わせる事など造作もないだろう。
「親父を魔法で騙して、居もしないお前らの母親との出逢いから再婚話まで、偽の記憶を信じこませたって訳か……」
「ええ。そして次は刃更さんの番です」
そう言って、万理亜は刃更に向かって手をかざした。
「父親が海外へ行き、女の子二人との生活に馴染めなかった刃更さんは、迅さんが帰ってくるまでこの家を離れる事にする――与える記憶はそんなところで良いでしょう」
対する刃更は黙ったまま正面の万理亜を、続いて澪を見た。

すると澪はスッとソファから立ち上がり、ようやく刃更と視線を合わせてくる。
「悪いけど――この家は私達が貰うから」
冷たく言い放つ。それは先日の、不良達を前にした時と同じ瞳で、
「大人しく万理亜の魔法を受けて、さっさとこの家を出てって。さもないと大声出すわよ。そしてアンタの頭の中に、私達に乱暴したから自首しなきゃって記憶を入れて、警察を呼ぶわ。未来の妹を乱暴した罪で、ブタ箱には行きたくないでしょ？」
「……そうか」
澪から告げられた言葉に、刃更は俯き、ポツリと短くそれだけを言った。
すると、こちらへ向けられた万理亜の手が輝き出す。
「どうします澪さま？　夏場とはいえ、野宿は少し可哀想ですかね。生まれ育った田舎へ帰って、親戚の家に厄介になる事にした……って記憶にでもしておきましょうか」
「……そうね。それで良いわ」
と澪。
「バイバイお兄ちゃん……少しの間だったけど色々楽しかったわ」
そしてその言葉を合図にして、万理亜の手にあった光が刃更へと解き放たれた。

万理亜が放ったのは、夢を見させ記憶を操るサキュバスの魔法だった。
よって刃更は記憶を操られ、自分からこの家を出ていく――その筈だった。しかし、
「……おや？」
記憶操作の魔法は、確かに刃更に命中した――にも拘らず、刃更が動こうとしない。
……おかしいですね。
首を捻りながら、再び記憶操作の魔法を刃更へ向かって解き放とうとして、
「えっ……？」
万理亜はふと、眼を瞬かせた。眼の前に居た筈の、刃更の姿が消えていた。
まさかという思いと共に、万理亜はとっさに背後――己の死角を振り返る。
するとリビングの中央――そこに東城刃更が立っていた。
一瞬で背後を取られた。その事実に万理亜はゴクリと喉を鳴らして、
「て、抵抗するつもりですか……痛い目を見ますよ」
厳しい視線を刃更へと向ける。怪我をさせるつもりはなかったが仕方ない。万理亜は、先程刃更を吹き飛ばした風の魔法を唱え、解き放つ。生み出された風が一直線に刃更へ向かい――その瞬間。キュイィィンッ、と甲高い鳴動音と共に魔法の風が消滅した。

「な……っ？」
一瞬、白い線が横に走ったのが見えた気がして――次の瞬間には自分の魔法が消された。
驚愕の思いと共に、万理亜は見る。眼の前の刃更が、いつの間にか巨大な剣を手にしていた。肘までが金属の装甲で覆われているのは、剣との契約によるものだろう。
契約した武器の持つ力が、使用者の肉体までフィードバックされているのだ。
「……何を驚いてる」
ゆっくりと刃更が顔を上げた。別人のように鋭い瞳がこちらを射貫く。
「お前が言った事だろうが。お前らのような魔族がいて、敵である神族もいると」
一息。
「そして――勇者の一族も存在していると」
「嘘……どうして」
隣の澪が、呆然とした声を上げた。
「だって勇者の一族は隠れ里にいるって……何でこんな場所で、一般人みたいな生活……」
「それこそお前らに説明する義理はねえよ」
冷たく切り捨てた刃更に、万理亜は驚きの視線を向けた。
……まさか、こんな事が……っ。

道理で記憶操作の魔法が効かない訳である。サキュバスが夢を見させて記憶を操る事ができるのは、主に自分より魔力が劣っている存在――魔力に対して無防備な普通の人間などに限られる。勇者の一族のように、対魔族のエキスパートには通用しないのだ。

だが――その事実よりも、万理亜は異なる驚きによって思考を混乱させていた。

ありえない、という思いがある。それは、刃更が今やってみせた行為についてだ。

確かに万理亜が今使ったのは、攻撃用の風系魔法ではない。吹き飛ばして少し痛い目でも見せてやろうと、飛行用のものをぶつけただけだ。殺傷能力はなく、大した威力もなかった。だから勇者が相手なら、弾かれたり斬られたりしても不思議はない。

――だが刃更は今、剣を振るって万理亜の魔法を消し去った。否、それだけではない。ひとたび魔法が発動すれば、どのような防ぎ方をされても魔力の残骸のようなものは生じる。それなのに、刃更によって斬られた魔法には、塵ほどの残滓すら存在していなかった。完全に消滅させられたのだ。まるで、存在自体をなかった事にされたかのように。

「俺はもう……勇者とか魔族とか、そんなのとは関係なかったんだ」

と、刃更がゆらりと一歩前へ出た。

「だが生憎と、黙ってやられてやるつもりもねえんだよ」

と言うなり、弾かれたように刃更が動いた。

こちらとの間にあった距離を、一瞬でなかったものにする神速で

「――っ！」

いけない。とっさに澪を庇うようにして万理亜が前に立ったのと同時。

刃更の剣が、万理亜と澪へ振り下ろされた。

「――――――」

東城刃更は見る。自分が斬り掛かった二人の少女が、ギュッと眼を瞑っているのを。

手にした剣は――紙一重の所で止めていた。

「……あ」

自分達の無事を悟った万理亜と澪は、ぺたんと床にへたり込んだ。

腰が抜けたのだろう。だから刃更は己の魔剣――ブリュンヒルドの具現化を解いた。

「どうして……」

呆然と問い掛けてくる澪に、刃更は無言を返して背中を向けた。

彼女達に対する激しい怒りはある。それは決して許す事のできないものだ。だが、

「……出ていけ」

ポツリと刃更は呟いた。

「お前らが魔族だろうと魔王だろうと、俺には関係ない。でもな、俺や……何より親父を騙そうとした奴らを養う余裕は、ウチの家にはねえんだよ。今なら見逃してやる。荷物は後でどこへでも送ってやるさ。だから――さっさと出ていけ」

それから数分後――東城家のリビングは静寂に包まれていた。

腰が抜けたのが回復した後、澪と万理亜はこの家から出て行って。そして、魔剣ブリュンヒルドを、待機形態のペンダントトップに戻した刃更は、ソファに腰掛けながら、

「……っ」

歯を食い縛り、震えの止まらない右手を押さえていた。

……大丈夫だ。

刃更は必死に自分自身に言い聞かせる。久しぶりの戦闘だった。勘も戻っていない。だから。あの技が発動してしまったのは完全な偶然だ。

――五年前、勇者の一族の里にいた頃。東城刃更は大きな問題を起こした。

『とある事件』をきっかけに、自分の能力を暴走させてしまったのだ。

それは、本当ならこんな風に暮らしてなどいられないような被害を生んで。

それでも諸々の事情を鑑みた結果、迅と共に里を出る事になった。要は追放されたのだ。

そしてこの東京へ出てきて、父子二人の馴れない都会生活を始めたのである。

「……くそ」

刃更は憎々しげに呟いた。だが、それは澪や万理亜に対してではない。

無論、東城刃更は澪や万理亜を許すつもりはない。二人が刃更や迅を騙そうとしたのは、紛れもない事実なのだから。だが、どうにも腹に据えかねる奴がもう一人いるのだ。

――それは、かつて最強の勇者と呼ばれた男。

それこそ勇者としての力は、刃更よりもずっと上の父親――迅だ。

あの男が、澪や万理亜の企みに気が付いていなかった訳がない。万理亜は迅の記憶を魔法で操作して騙したと言っていたが、迅は間違いなくそれを防いでいた筈だ。

だから刃更は家の電話の受話器を取り、短縮ダイヤルで迅の携帯に掛けた。

『――もしもし、何だどうしたよ？』

数秒のコールの後、よく知る声を吐き出した受話器に対し、刃更は低い声で、

「親父……今ちょっと良いか？」

『構わないぜ。タクシーの運ちゃんがどうにも無口でな。暇してたところだ』

迅の軽口に混じって、風が低く鳴るような音が微かに聞こえてくる。恐らく現在、迅を乗せたタクシーは高速を走っているのだろう。タクシーのドライバーに会話を聞かれる事になるが、迅ならばどうとでも言い訳をするに違いない。だから、

「――どういうつもりだよ？」

刃更は問い掛けた。冷静に話そうとするも、声に怒りが入ってしまう。すると、

『早いな……もう気付いたのか。俺の予想じゃ、もうちょい後だと思ってたんだがな』

迅は微塵も悪びれる事なく、ヌケヌケと言ってくる。

「やっぱり知ってたんだな、アイツらが魔族だったって事――いつからなんだ？」

受話器を握り締めた刃更は、しれっとした声を聞いた。

『最初からさ。あの二人の事なら、それこそ街で見つける前から知ってたよ』

「……見つける？　どういう事だよそれは……？」

迅の言葉に、刃更は眉を顰める。万理亜は「迅とは街で偶然知り合った」と言っていた。

『ま、あの二人は偶然出逢ったと思っただろうな』

迅はさらりとした口調で言うと、「だが」と言葉を繋ぎ、

『前から《里》が極秘に動いているって情報が入っていたんだ。俺とお前が里を離れてもう五年近くになる。今更こっちにちょっかい掛けてくる訳じゃなさそうだから、しばらく俺の方でも様子を見ていたんだが……少し前から事態が急速に動いていたみたいでな。場所も都内で比較的近いし、どんな奴らか、念のため俺の方でも調べておいたのさ』

一息。

『何せ――長老共が準Ｓ級監視対象に定めた位だからな』

「準Ｓ級監視対象？　あの二人が？」

刃更達の一族は、魔族の脅威レベルに合わせてランク付けを行なっている。準Ｓ級と言えば、その中でもほとんど最上位のランク。この上にはＳ級と、特Ｓ級しか存在しない。

……本当かよ。

魔族は通常、この人間界とは別の世界――魔界と呼ばれる異世界に生きる種族である。無論、たまにこちらの世界へやって来て問題を起こす者もいるが、そうした存在はいずれも下級の悪魔ばかり。基本的に彼らは、自分達の世界から出てくる事はない。

何故なら現在、勇者の一族と魔族とは、ほぼ休戦状態にあるからだ。

――この世界を舞台に、長きに亘り人知れず繰り広げられてきた勇者の一族と魔族との戦い。だがそれは、刃更が生まれた頃――親の迅達の代で区切りが付けられた。新たな魔王が、神族や勇者の一族との戦いを中止し、人間界から魔族を引き揚げさせたのだ。

よってこの人間界に来るような魔族は、いずれもはぐれの悪魔ばかりで、ほとんどがＥ

級やD級といった、低レベルの監視対象や消滅対象でしかない。それなのに、

「あの二人が、準S級……」

刃更は信じられないように呟いた。そして、自分の右の手の平を見つめる。

準とはいえ——よもや、人生で二度もS級の存在と遭遇する事になるとは。

『正確に言えば、準S級監視対象になっているのは澪の方だな。万理亜はあくまで、彼女の傍にいる存在として警戒されている』

「澪が……」

そこで、刃更はふと万理亜の言葉を思い出す。先程のリビングでの戦闘。こちらが勇者の一族である事を知らずに油断していたとはいえ、見た限りでは澪からそこまで脅威を感じる事はなかった。だから万理亜が口にした言葉も、てっきりこちらを脅すためのデタラメだろうと思っていたのが、

「アイツが……本当に未来の魔王だとでもいうのかよ？」

そう言って、それでも刃更はその可能性を否定した。そんな筈はないのだ。何故なら、

「だって魔王は代々男で……今の魔王もそうだって」

ウィルベルト——それが穏健派で知られ、人間界から魔族を撤退させた現魔王の名だ。

本来、魔族の敵は万理亜が『原初の宿敵』と言っていたように神族である。よって魔族

はこれまで人間を虫けら程度の存在にしか考えず、あわよくばこの世界を神界へ攻め入るための踏み台として攻め滅ぼそうと企んでいた。そんな魔族の中で、ウィルベルトを始めとする穏健派の魔族は神々への復讐を止め、争う事なく魔界で穏やかに暮らしてゆくという新たな道を示していた。何より彼らは、無闇に人間を傷つける事を禁じていた筈で。

だからこそこの十六年、人間界は平穏が保たれていたのである。

しかし。そんな刃更の言葉と想いを、電話の向こうからした迅の声が覆す。

『魔王ウィルベルトなら死んだよ——一年程前らしい』

「え——？」

告げられた衝撃の事実を、刃更はとっさに理解できなかった。

「そんな話、全然……」

『俺達はもう《里》と縁を切ってるからな。俺も知ったのは、つい最近の事だ』

それに、と迅。

『下手に話しでもしたら——どうせお前、また例の悪夢を見ちまうだろうが』

「それは……」

刃更は思わず口篭った。現に先日も、あの時の悪夢にうなされたばかりだからだ。

「でも……それじゃあ次の魔王が、澪って事なのか？」

『いや。現在、先代のウィルベルトに代わって魔界を支配しているのは、別の上位魔族らしい。聞けばバリバリのタカ派らしくてな……そいつが澪を狙っているのさ。ウィルベルトの一人娘で、ウィルベルトが死んだ際に奴の力を受け継いだ彼女をな』

魔族の中では穏健派で知られる魔王ウィルベルトだが、その力は歴代の魔王の中でも抜きん出ていた。だからこそ、好戦的な魔族達に停戦を納得させ、人間界から撤退させる事ができたのである。もし澪が、そんな最強の魔王の力を受け継いでいるとしたら。

新たな魔王として君臨する者にとっては、喉から手が出るほど欲しいだろう。だが、

「待ってくれ……」

だとしても腑に落ちない事があった。それは、

「大方の話は解ったよ……けど、だったら何で親父はあの二人を受け入れたんだ？」

それも——何もかも承知の上で。そんな真似をすれば、魔族はおろか里の一族すら敵に回す事になりかねない。刃更を気遣って、先代魔王の死を隠していた事とも矛盾する。

『俺の方でも色々と調べたって言ったろ？』

すると、それまでと同じ軽い口調ながら、迅の言葉の中に真剣さが混じった。

『穏健派のウィルベルトは、魔界の中にも多くの敵を抱えていた。そういう連中からしてみれば、気に入らない魔王の一人娘なんてのは格好の人質になる。その事は、ウィルベルト自身が一番理解していたんだろうな。生まれた娘をすぐに人間界へ送り、配下を両親役にして、極秘裏に人間として育てさせていたらしい……』

たとえ娘と離れ離れになろうとも——全ては愛する娘の幸せのために。

それはきっと、断腸の想いで下した決断だっただろう。

『だが皮肉な事に、ウィルベルトの死後——奴の強大な力は、争いから遠ざけるために離れた場所で暮らしていた成瀬澪へと受け継がれてしまった。ただの女の子として暮らしていた、当時中学生だったあの子にな……後はどうなったか解るだろ』

新たな魔王が、澪の存在を見逃す筈がない。養父母を任されていた配下達もだ。そして今、澪を育てた養父母は彼女と一緒にいない。澪を襲った悲劇は、想像に難くなかった。

「そんな……そんな事ってあるのかよ」

声を絞り出すように言った刃更に、

『魔族や俺達の一族が異能の力を使えるのは、人間の世界の外にある理を知っているからだ。半年前の当時、あの子はそれを知らないただの一般人だった。恐らく今は力の使い方を多少知ってはいるだろうが、魔王の力自体は受け継がれただけで、まだ未覚醒の状態なんだ。だからこそ、里の連中も消滅対象ではなく監視対象に留めている』

おまけに、と迅。

『ウィルベルトの死後、穏健派は急速に力を失いつつあるからな。護衛が万理亜一人なのがその証拠だ。残念ながらあの二人だけで、現魔王派の連中に対抗できるとは思えない。そのまま放っておいたら、遅かれ早かれあの子らは命を落とすだろうな』

「それで、わざと騙されたフリを……」

ようやく迅の真意が見えた。

刃更は嘆息し、そして次の瞬間、受話器に思い切り言葉を叩きつける。

「このクソ親父っ――そういう事は先に言いやがれ！」

そうすれば、まだ刃更としても対応のしようがあったというのに。

『悪いな。お前とあの二人には、対等な立場で居て貰おうって最初から決めていたんだ』

笑みを含んだ声で迅が言った。

『あの子達は魔族である事を、俺達は勇者の一族だった事を隠してた。一方だけが相手の事情を知っていたら、もう一方は自分達は騙されていたと思って信頼関係を築けなくなる。だが両方に隠し事があったなら、痛み分けにできるだろ？　騙していたのはお互い様って事で、お前らには歩み寄れる余地を残せる――全てを知っていた俺を悪役にしてな』

「……って事は、今回仕事が入ったっていうのも嘘だな？」

澪や万理亜を守るだけなら、傍に居るのが一番である。それなのに、この状況で迅が

家を空けるという事は、そうしなければいけない理由があるからだ。

『ま、そういう事だ。悪いが、どうしても調べておきたい事ができてな――ちょっくら魔界まで行ってくる』

それは、敵陣の奥深くまで入り込むという事。無論、かつては最強の勇者の名をほしいままにした迅だ。それこそ大戦中には、幾度となく魔界へ赴いた事があると聞いているが、

「そんな……大丈夫なのかよ？」

『ああ、心配すんな。詳しい事は言えないが、ちょっと連絡を取りたい奴がいるだけだ。上手く行けば、これ以上澪が狙われずにすむようになるかもしれない』

成る程。大本の方をどうにかするという事か。ならば、

「解った……こっちの事は任せてくれ。俺の方で何とかしてみる」

『頼むぜ長男。で？　二人はどうしてる？　まあ、その様子じゃ大方――』

まだ迅が何か言っていたが、刃更は受話器を叩き付けるようにして電話を切った。

そして、次の瞬間にはもう駆け出している――玄関へと向かって。

第2章 初めての主従契約

1

東城家を追い出された成瀬澪は、万理亜と共に高台にある公園を訪れていた。
刃更と自転車で街を散策した日、一緒に夕焼けを見たあの公園だ。
――ここへ来て、かれこれ三十分。澪は黙って、夜の街の灯りを眺めていた。
美しい夜景だった。建物の灯り、車や電車のライトは、まるでイルミネーションのようで。澪は思う。満天の星々を上から見下ろせば、こんな風に見えるのだろうかと。
……アイツの言ってた通りね。
ここの夜景の美しさを教えてくれた青年を思い浮かべ、澪は僅かに眉尻を下げた。
「やっぱり、一緒は無理だったわね……」

あの時、刃更が口にした誘いに、澪は曖昧な答えを返した。解っていたからだ。そんな機会は訪れない事を。初めて会った時からずっと、自分達は刃更を騙していたのだから。
「あの、澪さま……お気を落とさないで下さいね」
隣の万理亜が、気遣う瞳でこちらを見上げてきた。その姿は人間のものに戻っている。
「彼らが勇者の一族だったのは運が悪かっただけです。別の相手なら、きっと――」
「ううん万理亜……もう誰かを騙して、どうにかしようとするのは止めにしようよ」
澪は首を横に振った。
「できれば周囲を巻き込まないように、どこかにあたし達の拠点が欲しかったけど……それで誰かを騙すのも、やっぱり嫌だから」
別にお金がない訳ではなかった。死亡した澪の養父母は、充分な蓄えと遺産を残してくれている。だが拠点として、理想的なのは一軒屋だ。下手にアパートやマンションなどの集合住宅を選べば、他の部屋に住んでいる人達を巻き込んでしまいかねない。
しかし、そもそも澪は未成年だ。さらに身寄りもない。そして万理亜も外見は子供。
これでは住居を買う事は勿論、借りる事すらままならない。無論、万理亜が魔法で記憶操作を行なう事は可能だが、未成年だけで家を買い、不動産関係者やご近所に違和感を与えずに生活するとしたら、無数の人間の記憶を操作しなければならなくなる。しかも、そ

れぞれの立場や関係に合わせてだ。記憶操作の魔法は、そこまで万能ではない。

だから澪と万理亜は、こんな回りくどい真似をしたのだ。

「解りました……澪さまがそう言うなら」

万理亜は反対しなかった。こちらの気持ちを理解してくれたのだろう。ふっと笑って、

「そういうとこ、澪さまは優しいですよね……別に下心があって近づいてくる人間を騙すくらい、私は全然問題ないと思いますけど」

「かもね……」

万理亜の言う事は尤もだ。現に両親が死んだ後、遺言を管理していた弁護士は、澪を騙して遺産を掠め取ろうとした。夜に万理亜と二人で街を歩いていたら、こちらを心配する言葉を発しながら、下心丸出しの男達が寄ってきた。だから澪は、段々自分達以外の存在を信じられなくなっていって。いつしか彼らのような存在ならば、別に騙しても構わないと考えるようになった。嘘を吐いているのは、お互い様なのだからと。

――だから一ヶ月前。街で不良に絡まれた自分達を、迅が助けてくれた時も。

彼を信じる事ができなかった。どうせこの人も、自分を騙そうとしているのだと。

最後には裏切るに違いないと……そう思った。

だから万理亜の魔法で記憶操作を行ない、家を奪おうと企んだのだ。でも、だからといって同じように騙したら、自分達までそういった連中と同じになってしまう。

「……けど、まさかあの二人が、勇者の一族だったなんてね」

澪は自嘲めいた笑みを浮かべた。彼らが素性を黙っていた事を責めるつもりはない。こちらも彼らを騙そうとしていたのだから。勿論、今から家に戻って油断せずに挑めば、刃更を圧倒できるかもしれない。今度こそ、あの家を自分達の拠点にできる可能性はある。

「だけど……」

迅も刃更も、これまで澪を騙そうとしてきた者達とは違っていて。両親の死後初めて、もしかしたら信じても良いような人達に出会えたのかもしれないと思った。

……でも。

今さら何を思ったところで、もう遅すぎる。時間は元には戻らないのだから。すると、

「澪さま……」

隣の万理亜が、静かな口調でこちらを呼んだ。

「ごめん……これからの事を考えるにせよ、まずは今夜の宿を考えないとね」

しかし万理亜は、首を横に小さく振って。そして、微かな硬質さを含んだ声で言った。

「いえ――それより先にやる事ができたみたいです」

その言葉に、澪は周囲の様子に気が付いた。

いつの間にか、公園中が不気味なまでに静まり返っていた。不自然な静寂。それが何を意味するのか、澪はすぐに理解する。この半年で、それなりの知識は付いていた。

「人避けの魔法……」

澪や万理亜が使用したものではない。となれば、答えは一つ。

「気を付けて下さい……敵です」

正面を睨むようにして万理亜。すると、その視線の先にある闇が動いた。

暗がりから現れたのは、不気味な三つの闇だった。その闇が、徐々に形を変えてゆく。

一つは黒い布に全身を包み、柄の長い大鎌を持った死神を思わせる人型の『影』に。

残る二つは羽を持った獅子の魔獣――マンティコアへと。

間違いない。魔族だ。それも恐らく現魔王の手の者だろう。こちらに対して放たれたのは、確かな殺気。それが彼らの存在を教えてくる。その目的もだ。だから、

「そう……まさか、そっちから来てくれるなんてね」

澪は挑むような視線で、対峙する三体の『敵』を睨んだ。

絞り出した声が僅かに震える。それは恐れからではなかった。怒りだ――だから、

「絶対に許さない……父さんと母さんの仇……っ」

無論、澪は両親が殺された後、万理亜から自身の素性や真実を聞かされている。成瀬澪は、先代魔王の一人娘なのだと。自分が両親と思っていた二人は、養父母だったのだと。

俄かには信じられないような話も、万理亜の姿や魔法などを見て、やがて納得した。

そう。澪の父と母は、血の繋がった両親ではなかった。もしかしたら本当の父親の命令で――義務感だけで澪の面倒を見て、育てていただけなのかもしれない。

……でも。

成瀬澪は思う。それでも自分を育ててくれたあの二人は、間違いなく父と母だったと。

会った事もない本当の父親より、自分にとってはよっぽど大切な家族だったと。

だから絶対に許さない。確かに澪はまだ父親の――魔王の力には目覚めていない。だが、

「ご丁寧に人払いまでしてくれたんだもの……いいわ、やってやるわよ」

澪には、父親の血と共に受け継がれていたものがあった。それは――魔法の才能だ。

「覚悟する事ね……アンタ達、百回殺してやる」

そう言い放つと同時、澪の体から紅蓮のオーラが立ち昇った。己の魔力を解放したのだ。

――本来。魔族が放つオーラは負の存在を思わせる黒である。

現に、眼の前にいる敵が放つ魔力の波動は、夜の闇よりも暗い漆黒だった。

対する万理亜や、澪の父というウィルベルトのような穏健派の魔族のオーラは青。それは神族への復讐に囚われていた事からの脱却と解放を誓った者の色だ。

魔力のオーラは、魔力を使う者の心によってその色を変える。
だが——澪は両親を殺した魔族に復讐を誓い、敵対する事を選んだからだろうか。
万理亜に教わり魔力を使いこなせるようになると、そのオーラは黒でも青でもなく、血よりも鮮やかな朱色になっていた。許せぬ敵を焼き尽くす、燃えるような紅に。
「——さあ、始めましょうか」
魔法などの特殊能力は、本来この世界に存在しないもの。その現象を一般人は知覚できない。よって邪魔が入る事はない。そして——澪の言葉が戦闘の始まりの合図だった。
『影』と二体のマンティコアが、一斉に澪達へと向かってくる。連係の取れた動きに対し、
「喰らいなさい！」
澪は攻撃魔法を発動させた。閃光と同時に迸る炸裂音。上空から、雷撃魔法が降り注ぐ。
だが、衝撃で舞い上がった砂埃を、二つの影が突き破るようにして抜けてきた。
マンティコアだ。俊敏性の高い魔獣ならではの動きで雷を回避したのだろう。
……大鎌のアイツは……。
立ち昇る砂煙の中には最早、敵の気配は感じられなかった。雷撃魔法で倒せたか戦闘不能にできたのだろう。ならばと澪は、突っ込んでくる二体の魔獣へと意識を戻すと、
「澪さま、次は私が」

隣の万理亜が地面を蹴って前に出ると、マンティコアの行く手を遮るように立ちはだかる。しかし一対二という数的不利に加え、体格差は圧倒的で、
「————」
マンティコア達は、片付けやすそうな万理亜から始末する事にしたのか、一旦左右に分かれると、横から挟み込む動きを見せた。距離を詰め、一体は牙で、一体は爪による攻撃で万理亜に襲い掛かる。上と横からの同時攻撃。万理亜に許される回避は後退だけ。しかし、
「あははは、馬鹿ですねえ」
笑みと共に、万理亜は前へと跳躍した。向かう先は左手の一体——牙で噛み殺そうとした方のマンティコアだ。一瞬で距離を詰め、手の届く距離まで肉薄すると、
「ちょっとは楽しませて下さいよ？」
そう言って、巨大な魔獣の頭部へと右の拳を振り下ろした。
——万理亜は、澪と違って攻撃魔法を得意にしていない。
ならば彼女の戦い方はどのようなものか。その答えは——轟音と衝撃が教えた。万理亜の拳の直撃を喰らったマンティコアが、押し潰されるように地面へ激突。その衝撃で大地が抉れ、クレーターが穿たれた。その中央で、最早マンティコアは微動だにしない。原形すら失っていた。万理亜がその残骸を見下ろし、蔑むようにフンと鼻を鳴らす。

「この程度ですか……つまらないですね。もっと無様に抵抗して、私を濡らして下さいよ」
そして、新たな標的へと視線を移した。
だが右から万理亜へ向かっていた魔獣は、己の進路を変更していた。澪へと向かって突っ込んでくる。澪は動かなかった。そして振り上げた鋭い爪が、澪へと振り下ろされ、
ガキィィィィン！　金属音と共に、その爪が弾かれた。獰猛な魔獣の攻撃を防いだのは、澪の前に出現した透明の壁だった。澪は右手をマンティコアへとかざしながら、
「終わりよ――百回死んで出直しなさい」
静かに告げると同時、澪が生み出した赤い光球が直撃。
爆発の後――そこには塵ひとつ残っていなかった。
「お怪我はありませんか、澪さまー」
離れた所から呼びかけてくる万理亜に、「ええ」と澪は頷いた。
……とうとう連中も動き出したわね。
敵が両親を殺してから――始まりの惨劇から半年。
今までは目立った攻撃を仕掛けてこなかった敵が、ついにこちらを狙ってきたのだ。
「良いわ……受けて立ってやるわよ」
両親を殺した敵を、成瀬澪は決して許さない。

そして、その命令を下した今の魔王を必ず倒す。何があろうとも。
「――っと、早くここから離れなきゃね」
敵を倒した事で、人避けの魔法は消えた筈だ。地面は澪と万理亜の攻撃でボコボコ。
こんなところを通行人に見られたら通報されてしまう。
……でも、その前に。
最後に、もう一度だけ澪は街の夜景を眺めた。あの青年と見る筈だった光景を。
――それが隙だった。
「澪さまっ！」
悲鳴のような万理亜の声に振り返ると、澪の眼の前に『影』が立っていた。
最初に雷撃魔法で倒した筈の敵だ。その手には、黒い魔力の輝きが宿っていて。
いけない――澪はとっさに障壁を張ったが、少しだけ遅かった。『影』が放った電撃魔法は、展開途中の障壁にぶつかって威力を落としたものの、そのまま澪へと直撃。
その衝撃で、澪は後方へと吹っ飛ばされた。公園は高台――小高い丘を切り立つようにして造られていて。澪が街を眺めていたのはその端。崖のすぐ手前だった。
落下防止のために設けられた木製の柵は老朽化もあり、澪の体を受け止めきれなかった。
だから。まるで崖下へ突き飛ばされたかのように、澪の落下が始まって、

「く……っ！」

とっさに澪は風の魔法を発動しようとして、しかしできない。

敵の電撃で体が上手く動かず、魔法に必要な意識の集中も行なえなかった。

……このままじゃ……っ！

下の道路まで、十m以上はあった筈だ。

地面はアスファルト。とてもじゃないが、澪の体は激突の衝撃に耐えられない。

澪は自分の油断を呪った。こんな所で死ぬのが自分の運命だったのかと。

両親を殺されて、仇さえ討てないまま命を落とすのが自分の一生だったのかと。

絶望と悔しさとでギュッと眼を瞑る——その時だった。澪は一つの音を聞いた。

それは声だった。叫ぶように「お」を長く伸ばす声で。

……え？

だから澪は、声のした方を見た。己の真横を。すると、

「——おおおおおおおおおっ！」

土壌の崩落防止のため、壁面に敷き詰められたコンクリートのタイル。そこを足場に、一人の青年が凄まじい速度の横走りで、こちらへ向かって駆けて来る。

それが誰か解った時には、澪は空中で抱きとめられていた——東城刃更によって。

「——っと！」

澪をキャッチした刃更は、空中で体を捻った。澪の視界の中で、ぐるりと天地が入れ替わる。そして澪を抱えたまま、刃更は難なく地面に降り立った。地面までの距離はまだ相当あった筈だ。それを、刃更は下半身のバネをクッションにしただけで着地に成功し、

「……ふう」

刃更の腕の中、彼が安堵の息を吐いたのを澪は聞いた。ゆっくり地面に下ろされる。

敵の電撃魔法の影響でまだ立つ事が出来ず、地面に座る状態で、

「どうして……」

澪は刃更を見上げた。まだどこか、自分が助かった事が信じられない。

何で刃更が澪を助けてくれたのか、その理由が解らなかった。

「どうしてって、そりゃあ——」

と、刃更が少しだけ気まずそうに何かを言おうとして、

「——危ないですっ！」

崖上からした万理亜の叫びが、その言葉を打ち消した。

成瀬澪は見る。こちらを見ている刃更の背後、上から飛び掛かってくるように『影』が降ってきていた。恐らく刃更の存在に気付くと同時に、こちらを追って崖上から飛び降り

ていたのだろう。既に大鎌の間合いまで接近し、今まさに斬撃を繰り出そうとしていた。

――だが、その斬撃が繰り出される事はなかった。それより先に、『影』の胴が真っ二つにされたからだ。一瞬の出来事だった。刃更の手に剣が生まれてから、振り向きざまに剣を一閃して敵を斬り裂くまで。信じられないような身のこなしと剣速だった。

「……」

今度こそ呆然となった澪の眼の前で、刃更はふっと手の剣を消した。

それからこちらへ振り返ると、その顔は何故か困ったような表情になっていて、

「あー……えーと、だな……」

何か言葉を探しているのだろう。刃更は頬を掻きながら、視線を少し彷徨わせた。

そして――やがて、ゆっくりとこちらへ手を差し出すと、

「……帰るぞ」

こちらと視線を合わせないまま、ぶっきらぼうに言い放った。

2

――取り敢えず、一緒に家へ戻ろう。

窮地を救った後。そう提案した刃更の事を、それでも澪は警戒していた。

刃更が勇者の一族である事。澪と万理亜が魔族である事。そして澪達が刃更を騙していた事。これらを総合して考えれば、刃更が澪を助ける理由など何処にもなくて。

刃更に敵意はない事を伝えたが、澪はしばし判断を迷わせていた。恐らく罠の可能性を考えていたのだろう。そんな中、澪を説得したのは配下の万理亜だった。刃更には、自分達を回りくどい罠で陥れるような必要はないと。自分達を滅ぼすつもりなら、先程のリビングでそうしていた筈だし、今も澪を見捨てればそれで話は済んでいたと。

よって、程なく澪は万理亜の説得に小さく頷いて。

そして現在――東城刃更は、帰宅した家のキッチンに立っている。

冷蔵庫の中から程よく冷えた麦茶を取り出し、コップに注いだものを持ってリビングへ。

「あ、どうも。いただきます」

万理亜はコップを受け取ると、麦茶を一気に飲み干した。思わず刃更は眉を顰めて、

「……また随分とあっさり飲むな」

幾らなんでも少し無防備すぎやしないか。

「そりゃあ、一緒に戻ろうって言ったのは俺だけどさ……」

「――もうちょっと警戒した方が良い、ですかー？」

万理亜は、「言ったじゃないですか」と空になったコップをテーブルの上に置いて、
「一度家から追い出したのに、わざわざ私達を追い掛けて来て、助けて。そして家に連れて帰って麦茶に毒を入れる……そんな面倒な真似を、刃更さんがする必要はないです」
それに、
「私達が騙していたと知った時、刃更さんは本気で怒っていましたから。それは私や澪さまを本気で家族だと思っていたからです。だとしたら、一緒に過ごしたこの十日ほど、私達に接していた時の刃更さんに偽りはありません。なら、信じても良いと思ったんです」
万理亜に視線で「違いますかー？」と問われ、
「成る程……」
どうやら何も考えていない訳ではないようだ。
「……まあ、澪さまはあの性格ですから、まだちょっと頑なですけどね」
万理亜は、リビングの扉の方を見た。
「お風呂で、少し気分を落ち着かせてくれたら良いんですけど」
日本の夏は夜でも暑い。そんな蒸し暑い中、外で戦闘を行なえば、否が応でも汗を掻く。
そのため、家に戻ってすぐ万理亜が澪に入浴を勧めたのである。
「――それより、そろそろ聞かせて貰って良いですか？」

と万理亜。
「どうして勇者の一族である刃更さんが、魔族の私達を助ける気になったのか」
「どうして、って言われてもな……親父から聞いたんだ、お前らの今の状況を」
刃更は頬を掻きながら、澪や万理亜を助ける気になった理由を伝えた。それは、迅が調べた澪の境遇や魔族の現状、そして万理亜たち穏健派の話について。だから、
「親父がお前らを放っておけなかったように、俺も嫌だったんだよ……お前らの境遇を知りながら、見殺しにするような真似だけは絶対に。だって、アイツに罪はないんだから」
成瀬澪は、ただ一人の女の子として生きていただけだ。それを周囲の都合で命を狙われるというのはあんまりだろう。刃更が真剣な口調で語り終えると、自然とリビングに静寂が降りた。こちらの話を、黙って視線を伏せながら聞いていた万理亜は、やがて、
「……そうだったんですか、迅さんが」
と神妙な面持ちで言うと、ふと顔を上げて、
「大変ありがたい話ですが――全部知ってて黙ってたとか、最悪ですねあの人」
「まあそれは否定しないけどな」
けど、俺の事を騙してたお前らも、人の事をどうこう言えた義理じゃないと思うぞ。
「――でも、それだけで勇者の一族の迅さんや刃更さんが私達を助けてくれますかね」

そう言って、万理亜はこちらの真意を問う視線を向けてきた。
「むしろ、監視対象に設定しているという里の方達の方が普通の対応なのでは？」
万理亜の疑問は当然だ。たとえどれだけ同情できる境遇であろうと、勇者の一族が魔族を助ける理由はない。そう——普通ならば。だが、
「言っただろ。俺はもう、勇者や魔族なんかとは関係ないって……昔、ちょっと色々とあってな。俺も親父も、今はもう勇者でも何でもない。里とは無関係のただの人間なんだ」
それは刃更の心に、決して消える事のない傷を生んだけれど。
だけどもう、勇者の使命に縛られる事もなくて。
「守りたいと思ったから、守る……それだけの話さ」
「たとえそれが魔族で——魔王の力を受け継いでいたとしても？　澪さまを守る事で、刃更さんの身にまで危険が及ぶ事になってもですか？」
万理亜の念押しのような確認に、刃更は「ああ」と頷く。
「お前らが、この世界やこの世界の人間に危害を及ぼそうとしない限りはな」
すると万理亜は苦笑を浮かべて、
「……お人好しさんですね、刃更さんと迅さんは」
「別に。ただ頑固なだけさ……親父も俺も」

だから、かつて里を悲劇が襲ったあの日。刃更が問題を起こしてしまった時も。迅はあっさりと勇者の立場を捨てる事を決めたのである。だから——今度は刃更の番だ。
「……解りました。それなら、やっぱりご厚意に甘えさせていただきます。今の澪さまには……一人でも多くの味方が必要ですから」
万理亜の静かな口調には、重い切実さが込められていた。そして万理亜は居住まいを正すと、こちらへ向かって深々と頭を下げてくる。
「刃更さん……これまで騙していてすみませんでした。私達の危険に巻き込む事になりますが、どうかお願いします。澪さまをお守りするために、貴方の力を貸して下さい」
改まった口調。それは心の底から主を想う、臣下の言葉だった。だから、
「ああ。こっちもそのつもりだ」
刃更もまた、自分の決意を口にする。いつまでも過去から逃げ続ける訳にはいかない。ならば、もう一度剣を持って戦おう。今の自分にはもう、勇者も魔族も関係ない。
澪を守ってやりたい——そう思った気持ちに嘘はないから。その想いを信じて。
「それでだな、えっと……万理亜ちゃん」
「万理亜で良いです。これからはもう、私と刃更さんは仲間なんですから」
「そうか——じゃあ万理亜、今回こうして襲われはしたけど、基本的には今まで通り普通

に生活しようぜ。敵の狙いもまだ少しはっきりしないしな」
「え？　でも、敵は現に澪さまを狙って……」
キョトンと問い返してくる万理亜に、
「まあな……ただどうにも腑に落ちないんだよ」
と真剣な顔で刃更。
「魔王派の連中の狙いはアイツより、むしろアイツが受け継いだ先代魔王ウィルベルトの力の筈だ。しかもアイツはまだ、魔王の力には未覚醒の状態だからな。もしアイツが死んだら、今度は誰にその力が受け継がれるか解らないし――最悪、そのままウィルベルトの力まで消えてしまう可能性だってある」
だが、
「公園で敵がお前らを襲った時、俺が間に合わなかったら下手すればアイツは死んでいた。もちろん実戦の中じゃ、何かの拍子に予想外の状況になる事はあるだろうけど……」
ただの偶然か、それとも他に何か狙いがあるのか。幾つか可能性は考えられるが、それもいずれハッキリするだろう。相手が、このまま黙って引き下がる訳はないのだから。
「恐らく向こうも、お前らが勇者の一族の要監視対象になっている事はとっくに気が付いている筈だ。下手に無関係な人間を巻き込んだりすれば、今度は自分達が殲滅対象になる。

人が居る所では、そうそう襲ってこないだろう」
だからこそ、先程の公園ではわざわざ人避けの魔法を使ったに違いない。
「まあ次にアイツを狙って来た時には、必ず尻尾を摑んでやるさ」
すると万理亜は嬉しそうに、
「心強いですねえ。少し見ただけですけど、刃更さん、かなり強いみたいですし」
「いや、あんまり期待しないでくれ……もう五年近く実戦からは遠ざかっていたからな」
魔剣ブリュンヒルドは具現化できたが、それでも体はかなりナマっていた。
やはり昔のようにはいかない。時間のある時に一から鍛え直さないとヤバそうだ。
「でも。先刻ここで私の魔法の風を斬って消滅させたの。あれは本当に驚きました」
「ん？　ああ……」
万理亜の言葉に、刃更は表情を静かなものにする。そして、
「残念だが――ありゃマグレだぞ」
肩を竦める刃更に、万理亜は「またまたー」と目を弓にして、
「マグレで魔法を完全になんて消し去れる訳ないでしょう。一体どういう技なんです？」
興味津々の万理亜に、刃更は苦笑して、ふっと自分の右の手に視線を落とした。
「悪いけど本当にマグレなんだ……」

――そう、マグレに決まっている。
あの技は――五年前のあの事件の日以来、二度と使えなくなっているのだから。

3

真夏に汗を流すだけならシャワーの方が気持ち良い。
初めは澪もそうするつもりだった。簡単に汗を流したら出ようと思っていて。
――しかし今、澪はお湯を張ったバスタブの中に身を浸からせていた。
「……っ」
澪は湯船の中でギュッと体を抱いた。真夏だというのに、体の芯が驚くほど冷えている。
……あたし、初めて……。
半年前――両親を殺されて以来。万理亜の指導で魔法や戦闘の鍛錬を行なってきた。
お陰で今では、万理亜よりも強力な魔法を唱えられるようにもなっている。
だが実戦は……命を賭けた戦いは、先程が初めてだった。敵を倒した事。一歩間違えれば自分が死んでいたかもしれない事。あの場所で行なわれたのは、間違いなく命のやり取りで。そうだ――もしあそこで刃更が助けに来てくれなかったら。あのまま澪は、アスフ

アルトに激突して死んでいたかもしれない。そう思うと、どうしようもなく体が震えて。
もう三十分近く、澪は湯船の中で膝を抱えたままでいる。
――少し前、万理亜が一度様子を窺いに来た。澪がいつまで経っても出てこないので心配になったのだろう。澪が返事をすると、脱衣所で万理亜はホッとしていたようだった。
そして、そこで万理亜は、刃更と話した内容についても聞かせてくれた。
刃更がどうして澪を助けてくれたのか――その理由についても。
「そろそろ出なくちゃ……」
いつまでもお風呂に引き篭もっている訳にはいかない。澪はゆっくりと浴室を出た。
脱衣所で濡れた体をバスタオルで包んでいると、思わずポツリとした呟きが零れた。
「良いのかな……」
本当に刃更を頼って良いのか、澪はまだ判断を迷わせていた。
別に刃更が信じられない訳ではない。万理亜に改めて言われるまでもなく、一緒に過ごしたこの十日程で刃更がどういう人間かは解っている。騙されていたにも拘らず、こちらの事情を知ったらすぐに駆けつけてくれるような青年だ。勇者の一族だったというのもどうやら過去の話らしいし。多分、信じて良いのだろう。
澪は新しいショーツに順に足を入れ、膝から太股、尻へと引き上げながら、

……問題なのは。

そんな刃更を、澪の置かれている状況に巻き込んでも良いのかという事だ。自分は育ての親を殺された。それも、本当の父親を殺した連中によって。悪い事は何もしていないのに、理不尽に、無慈悲に家族を奪われた――あの日の事を、成瀬澪は鮮明に覚えている。

絶対に許すものか。たとえどれだけ敵が強大でも、必ず仇を討ってみせる。

そう心に誓って、この半年間生きてきた。そして今日、ついにその戦いが始まったのだ。

敵は今の魔界を統べる、新たな魔王。恐らくこれから、先程のような――否、それ以上に辛く苦しい戦いが待ち受けている。そんな気の遠くなるような戦いに、本当に刃更達を巻き込んで良いのだろうか。勇者の一族である事を捨て、戦いを捨てた刃更や迅を。

「……」

そして澪は服を着終えた。既に夜も更けてきたが、まだ今後の事を色々と話さなくてはならないため、着替えたのはパジャマではなくラフな部屋着だ。

洗面台の鏡に映った自分の表情は、いつもと違ってひどく儚く見えて。

澪がそっと自分の身を抱いた時、ふと脱衣所の扉が外から控えめにノックされた。

「ゴメン、万理亜……今出るから」

また心配させてしまったかと、澪が返事をすると、

『あー……いや、俺だ』

扉の向こうからした少し気まずそうな声に、澪は思わず息を呑んだ。まだ刃更に何と言えば良いか答えを出せていない。黙ってはいけない、と思う。でも言葉がないのだ。

――公園で敵の攻撃を受けて崖下へ落ちた澪の命を、刃更は助けてくれたというのに。

澪には、そんな刃更に対して返す言葉がなかった。すると、

『悪い。出てきてからの方が良いとは思ったんだけど……でも、どうしても一言だけ先に言っておきたい事があってさ』

一体何を――そう問い返すより先に、澪はその答えを聞いた。

『――すまなかったな』

一瞬、刃更が何を言っているのか解らず、

「なっ……何で刃更が謝るのよっ？」

震える声で思わず訊き返すと、扉の向こうで刃更は申し訳なさそうに、

『親父や万理亜から聞いたんだ、お前の話。ゴメン、俺……お前の事情とか何も知らなくて。それで先刻は、ついカッとなっちまって……本当にゴメン』

「そ……そんな事……っ」
どうしよう。騙して、迷惑を掛けたのはこっちなのに。それなのに、命を助けてくれた相手に謝られた。しかもこちらよりも先に。これでは、いよいよもって何も言えない。
「〜〜〜〜〜〜っ」
視界が揺れる。言葉にできない感情が込み上げてきて。ふと澪は、大きな音が鳴ったのを聞いた。気が付けば、床に尻餅をついていて。腰が抜けたのだと理解するより先に、
「お、おい！　大丈夫か？」
突然大きな音がして驚いたのか、脱衣所の扉を開けて刃更が中へと入ってきた。

刃更が脱衣所の中に入ると、澪は床にへたり込んでいた。
顔が赤い。一時間近くも風呂に入って少しのぼせてしまったのだろう。
「立っていられなくなるまで長風呂なんかすんなよ……ホラ、大丈夫か？」
近寄り手を貸そうとすると振り払われた。そして澪は、今にも泣き出しそうな顔で、
「どうして謝るのよ……あたしはアンタを騙してたのに」
対する刃更は、行き場をなくした手でやれやれと頭を掻きながら、

「俺だって、昔は勇者の一族だった事を隠してたんだ。おあいこだろ」
「で、でもあたし達は、この家を奪おうとしたわ……アンタを追い出して。それもおあいこだって言うの？」
強がった口調で言ってくる澪に、刃更はあっさりと言い放つ。
「いや……あれは確かにお前らが一方的に悪いだろうな」
でも、と穏やかな表情をふっと浮かべて、
「お前らは、俺が勇者の一族だとは知らなかった。もし家を手に入れるだけなら、わざわざ魔法で記憶を操ったりしなくても、もっと手っ取り早い方法があった筈なんだ。実力行使で幾らでもな。けど、お前らはそれをせずに、俺を田舎に帰らせようとした」
それは何故か。
「あれは――俺をお前らの戦いに巻き込まないようにするためだったんだろ？」
刃更が口にした推測に、澪の眼が驚きに見開かれた。どうやら図星だったらしい。
「どうして……」
呆然と呟く澪に、
「普通に考えれば、これまで一緒に過ごしていた時が演技で、この家を出て行けと言った時がお前の本性だと思うだろうな。でも、これでも俺は人を見る目は確かなんだ。最初は

ついカッとなっちまったけど、親父から事情を聞いて、ちょっと冷静になったら解ったよ」

一息、

「お前は正体を現したんじゃない——逆だ、俺を追い出すために演技をしたんだよ」

けど、と刃更。

「もうそんな真似をする必要はないぞ。俺も親父も、もうお前らを守るって決めたんだ。だってもう、俺達は家族なんだから」

「な、何言ってんのよ……再婚話は全部嘘なのに」

まだ頑なな態度を崩さない澪に、刃更は告げる。

「別に、血の繋がりや戸籍だけが家族じゃないだろ。一緒に暮らして、守ってやりたいと思ったら、それはもう家族だろうが」

だから何があっても守る。

「俺はもう勇者じゃないし、血の繋がりも戸籍上の関係もまだないけど、それでも俺はお前の兄貴なんだ。だから、守らせてくれよ——お前達の事」

そう告げると、刃更は強引に澪の手を取って立たせた。

「やっ……ちょ、ちょっと！」

「つーわけで、改めてよろしくな」

向かい合う形で刃更がニッと笑うと、澪はたちまち「む～」と悔しそうな顔になって、

「い、いつまで触ってるのよ！　さっさと出てって！　百回殺すわよ！」

「おや——お二人共、かなり打ち解けられたみたいですねー」

そう言って、万理亜が脱衣所の中に入ってきた。澪の方へトコトコ歩み寄りながら、

「まあでも、まだ少し澪さまは素直になれてないみたいですけど」

「あ、あたしは別に、そんな事は……」

澪が顔を赤くして口篭ると、万理亜は笑みと共に、

「なら良かったです。実はお二人に、これからの事で少し提案があるんです」

「提案……？」

今後について話をする必要はあると思ってはいたが、しかし『相談』ではなく『提案』とは。刃更が先を促す無言を放つと、万理亜は「ええ」と頷いて、

「これから刃更さんには、私と共に澪さまを守るために戦っていただける事になりました。言うなれば刃更さんは、澪さまの護衛です。ですが現状では、何かの理由で離れ離れになった際、必ずしも今回のように澪さまの居る場所へ駆け付けられるとは限りません」

「まあ、そりゃあな……」

確かに今回、刃更が澪の下へ辿り着けたのは運が良かった面もある。あの公園は先日共

に行き、また夜に一緒に行こうと言っていたため有力な心当たりだった。だから家を出て、すぐにそちらへ向かったのだ。無論、走りながら携帯のGPS機能で居場所を確認したが、落下していた澪をキャッチしたのはギリギリのタイミングで。もしGPSで先に居場所を確認してから走り出していたら、間に合わなかった可能性は否定できない。

「だけど、こればっかりは仕方ないだろ。これからは、なるべく離れないように気を付けて、万一の場合は携帯のGPSとかで――」

「何を甘い事をー！　携帯なんて、いつ壊れたりバッテリーがなくなったりするか解らないじゃないですかー！　肝心な時に通信障害に陥る事も、敵に奪われたりどこかに捨てられたりする事だってあります！　そんなものに頼りきっていては、いざという時に罠に掛けられてしまいかねません！　現代科学を妄信したら痛い目を見ますよー！」

いきなり熱弁を振るい始めた万理亜に、気圧されながら刃更。すると隣の澪が、

「でも、他に方法もないでしょ？　完全な居場所探知なんて、そんな魔法はないんだし」

その通りだ、と刃更は思う。居場所探知の魔法自体は初歩的なものだ。しかし、自分の居場所を探知される事は、戦いにおいて最優先で防がなくてはならない事の一つ。よって探知に掛からないための魔法防壁や、ダミーを探知させる囮魔法などが多数生まれ、今では探知魔法は戦闘ではほとんど意味をなさなくなっている。だが、万理亜はふっと笑って、

「それが、可能なんですよー。特定の相手に限り、居場所を察知する事は。『主従契約魔法』によって――魂を結ばれた者同士なら」

リビングの床を、所狭しと埋め尽くしているものがあった。

魔力によって描かれたルーンが紡ぎ出すそれは、儀式を行なうための巨大魔法陣だ。

「……本当にやるのか？」

魔法陣を前に、いまいち気乗りしない声で刃更は言った。

主従契約魔法という事は、どちらかが主に、どちらかが配下になる訳だが、何せ澪は未来の魔王になるかもしれない存在だ。立場的にも、性格的にも刃更の配下になる訳もなく。万理亜もまた当然のように、刃更が配下側になる事を前提に提案してきていた。だが、

「大袈裟に考えないで下さい刃更さん。これでお互いの居場所が感じられるようになるんですよ？　確かに主従契約は結ばれますが、あくまでそれは形式上のものです」

万理亜の説得に対し、それでも刃更は煮えきらない。

「魔法で互いの魂を結び付けるなんて……居場所が解るくらいなら良いが、相手の思考ま

で解っちまったりとかすると、色々と気まずいだろ」
プライベートも何もあったものではない。しかし万理亜は首を振って、
「それなら大丈夫です――そういうのが目的の魔法じゃないですから」
目的？　と刃更は眉を顰める。すると万理亜が、
「そんな事より。この魔法は、こちらの世界では満月の日にだけ使える特別なものなんです。このチャンスを逃す手はないですよー。それに、もし契約を結んで不都合があった場合は、次の満月に契約の解除も可能です。さあ、早くそこに立って下さい刃更さん」
「いや……そう言われてもな」
それに、こういうのは男よりも女の方がキツイんじゃないか？　刃更は背後を振り返り、
「何とか言ってやってくれ。魔法で俺と魂が結ばれたりなんかしたら嫌だろ？」
先程からずっと黙っている澪へ問い掛ける。すると、
「……べ、別に。あたしは良いけど」
予想外の反応が返ってきた。思わず刃更が、聞き間違いかと眉を顰めたところ、
「あ、アンタが良いなら……あたしは、構わないけど」
恥ずかしそうに言って、澪はチラッとこちらを見てきた。そして、
「刃更は――あたしとじゃ嫌？」

「え？　いや、嫌というか……。でもお前、本当に良いのか？」
「……うん。居場所が解るだけなら」
おお、どうやら本気のようだ。
……主従契約、か。
澪の位置が解るようになるというのは、彼女を護衛する上で確かに魅力的ではある。
勇者の一族が魔族の配下になる事など本来はありえない事だが、生憎と今の刃更はもう戦えるだけの一般人だ。頼りの迅がしばらく不在な以上、今後の事も考えて不安材料は可能な限り消しておきたい。ただ――刃更としては、できれば澪とは対等の関係でありたいと考えていた。家族としても兄妹としても、その方が良いと思ったからだ。父親が魔王でも、澪はこれまで人として育てられ、人として生きてきた女の子なのだから。
……でも。
東城刃更は思い出す。先程脱衣所に入った時、床に尻餅をついていた澪の表情を。
あの時の澪の表情は、とても儚げで。そして――その時と同じ顔が今、刃更の眼の前にあった。恐らく澪は不安で堪らなくて、だからこそ主従契約を結ぶ事を受け入れているのだろう。だから、もし契約を結ぶ事で少しでも澪を安心させてやれるというなら――これは悪くない話なのかもしれない。契約も一生ではなく、あくまで形式上のものであり、解

除も可能だという。それなら迅が戻ってくるまで、一時的に契約を結ぶというのは選択肢としては有りだ。だから、刃更は嘆息を一つして、

「解った――で？　主従契約って、一体俺はどうすれば良いんだ？」

すると、こちらの了承を聞いた万理亜の顔が途端に笑みになり、

「ありがとうございます。それでは刃更さん、入口側のそこに立ってください……そうそこです。そちらが配下側の方ですので。で、澪さま。澪さまは窓側です」

そして二人がそれぞれの位置に立つと、そのまま一気に魔法の準備が始まる。

「それでは――澪さま、私の手を握って下さい」

「手を？　握れば良いの？」

万理亜に従って澪が手を繋いだのを見て、

「あれ……俺と澪の魂を結ぶのに、万理亜まで手を繋いでて良いのかよ？」

これでは三人が繋がってしまいそうなものだが。すると万理亜は「はい」と頷いて、

「これは澪さまが初めて使う魔法なので、今回は私が補助として入るのです。それにこの魔法は澪さまの魔力ではなく、私の魔力を使って詠唱した方が良いと思います」

まあそう言うなら。そして万理亜から呪文を教わった澪は、深呼吸を一つすると、

少し緊張した面持ちでそう言って――詠唱が始まった。途端にまず床の魔法陣が光り出し、次に澪の体が、続いて刃更の体も同じ色の光を帯び始める。

どうやら魔力だけ貸すという話は本当だったらしく、万理亜の体はそのままだった。

そして――程なくして澪が詠唱を終えると、万理亜がこちらに向かって、

「もうすぐ澪さまの右手の甲に、魔法陣がしばらく出現します。なので刃更さんは澪さまの手を取り、消える前にその魔法陣へキスして下さい。それで主従契約が成立します」

「――は？　キス？」

別に手の甲くらいなら構わないが、まあ主従契約を結ぶにあたって必要な形式なのだろう。やれやれと刃更が思っていると、やがてぼんやりと魔法陣が浮かび上がった。

ただし澪ではなく――何故か刃更の右手の甲に。

「え……？」

事態が理解できないのだろう。澪が目を瞬かせた。対する刃更は怪訝そうに、

「おい……何か俺の手に出てきたけど、良いのかこれ？」

「ちょ、ちょっと！　一体どういう事よこれはっ!?」

澪が血相を変えて、隣の万理亜の襟首を掴んで揺すった。万理亜は首を傾げながら、

「あ、あれー？　お、おかしいですねぇ……どこで間違えたんでしょう？」

「どうすんのよっ!?　こ、これじゃ……っ」
刃更が澪の配下になるのではなく、澪が刃更の配下になってしまう。
「えーと、ここは取り敢えず、澪さまに刃更さんへキスして貰うのはどうですか？　ほら、主従契約は逆ですけど、当初の目的通りお互いの居場所は解るようになりますし」
と万理亜が言った瞬間、澪は顔を真っ赤にして、
「じょ、冗談でしょ！　何であたしが刃更の下僕にならないといけないのよっ！」
いや、下僕は少しニュアンスが違うんじゃないだろうか。それなら刃更も御免である。
「ですが、このままでは……あ」
万理亜が上げた声にふと見れば、刃更の右手にあった魔法陣が消える所だった。
「澪さま、早くっ！　魔法陣が、魔法陣が消えちゃいますっ！　いざとなれば契約の解除は可能なんですから、取り敢えずここはぶちゅーと一発！」
「で、でも……次の満月まで解除できないんでしょ。そんなの……」
焦る万理亜に、それでも澪が躊躇していると、程なくして魔法陣は消え去った。
「ああ……」
それを見た万理亜が、消え入りそうな声を上げた時だった。
「んっ……え？　な、何……これ？」

ふと躰をピクンと震わせた澪が、戸惑いの声を上げた。そして、
「嘘……や、やだ……」
頬を赤くして呟くと、ぺたんと床に座り込んだ。そして体を小刻みに震わせ始める。
「お、おい……大丈夫か？」
そう言って、刃更が澪の肩を摑んだ瞬間、
「――ひあぁんっ！」
澪が甘い叫び声と共に、ビクンと大きく体を震わせた。
「な、何だ……!?」
突然の反応に刃更がとっさに手を離すと、隣の万理亜が慌てた声を上げた。
「ああっ……もう呪いの効果が」「――呪い？」「あ……」
しまったという顔をした万理亜の頭を、刃更はぐわしと鷲摑みにした。
「詳しく話して貰おうか――包み隠さず全部」
「あ、あはは……」
顔をギリギリまで近付けると、万理亜は乾いた笑みを浮かべて、
「え、えーとですね？　これは互いの位置を把握できるようになるだけでなく、実は『主従契約』において重要な、配下の忠誠を常に維持する目的もありまして。配下が主を裏切

ったり、後ろめたいと感じた時に罰として呪いが発動するのです。呪いは基本的に詠唱した者の特性に影響されるのですが、今回は私の魔力を使って詠唱しましたから」

床に倒れたまま、顔を赤くして甘い喘ぎ声を出し続けている澪を刃更は見ながら、

「万理亜……お前、確かサキュバスだったよな」

「はい。肉弾戦もイケますが、基本はバリバリの淫魔です」

「つまり――サキュバスの催淫効果が呪いとして出た？」

「……遺憾です」

「アホかぁぁぁっ！」

刃更は思わず大声で叫んだ。変な魔法を掛けようとした事も問題だが、

「つーか、何でそのまま澪の魔力を使って唱えさせなかったんだ？　催淫なんて、そんなので俺が変な気持ちになって、お前らを襲ったらどうするつもりだったんだよ？」

「あ、その点は大丈夫ですよー。配下が主に逆らおうとしたら呪いは一層強くなりますし、主を襲うなんて真似は、それこそ最大の裏切りですからね。もしそんな真似をすれば、精神と肉体が快感を許容できなくなり、失神するか脳の神経が焼き切れます」

「後者が怖すぎる！」

最低の死に方の部類だぞ、それ。

「大体、澪さまの能力特性の方が恐らく危険ですよ？　だって澪さまが魔法を使えるようになったのは、ウィルベルト様の死後、あの方の力を受け継いでからですから。覚醒自体はまだですが、特性も恐らくウィルベルト様のものを引き継がれている可能性が高いです。ちなみに昔、ウィルベルト様との契約を拒んだ者は、見えない力に押し潰されて死んだそうです。下手をすれば呪いで肉塊コースだったところを、私の冴えてる機転のお陰で回避できたという訳です。いやー、まさに間一髪です」

「何を誇ってる、今も充分危険な状況だろうが！」

「ハッ……そ、そうでした！」

刃更の突っ込みに、万理亜は頭を抱えつつ澪を見下ろして、

「このままでは澪さまがダブルの意味で天国に！　ど、どうしましょう刃更さんっ!?」

「いや、悪魔は死んでも天国にはまず行かんだろ」

呆れたように刃更は言って、

「しかし、キスする前に魔法陣は消えたんだ。契約は失敗したんじゃないのか？」

「ええ……ですが、詠唱を終えた時点で既に魔法は発動しているんです。そして魔法陣にキスをしないという事は、忠誠そのものを拒んだという事ですから」

「呪いも強めに発動している訳か……」

最悪じゃねーか。

「い……いいから、んっ、早く……っ、早く助けてよぉ……」

完全にとろけきった表情の澪が、艶っぽい声を上げて躰をくねらせた。

かなりエロい。刃更は思わずゴクリと喉を鳴らしながら、

「っ……どうすれば呪いの発動は治まるんだ？」

「主従契約魔法ですので、基本的には配下側が主への忠誠を誓えば呪いは治まりますね。契約成立後に発動した呪いなら、軽いものだと一定時間が経つと消えるんですけど、今回は契約自体を拒んでしまっていますし――まずは一度完全に服従させて、主従の契約をきちんと結ばないといけません」

「服従させるって……どうすりゃ良いんだ？」

「簡単です――澪さまを触って下さい」

「え？　さ、触るって……どこを？」

解呪の魔法陣でも出るのか？　すると万理亜は平然と、

「どこでも良いです。今の澪さまの感覚は、呪いの催淫効果で超引き上げられてますから。先刻だって、刃更さんが肩に触っただけであんな敏感に反応したでしょう？　澪さまは男性経験とか全くないので、こういう快楽は未経験ですし、耐性も一切ありません。五

分間かそこら触ってあげたら、素直になって自分から刃更さんに忠誠を誓うと思います」

「ちょ、ちょっと万理亜……あんた、何を言って……っ」

ギョッとする澪に、万理亜は無駄に慈愛の表情で、

「もう少し我慢して下さいね澪さま。今、刃更さんが楽に――そう、楽にしてくれます。別に私がサキュバス的に、澪さまが快楽に堕ちる顔を見たいとかそういう事は一切ありませんよ？　さあ刃更さん、早く澪さまの恥ずかしい所を触って楽にしてあげて下さい」

「触んのは、どこでも良いんじゃなかったのかよっ!?」

「ええ。ただ私は、一刻も早く澪さまをお救いしたいんです。時間をかければ、それだけ心や身体に負担が掛かります。本当に澪さまのためを思うなら、一秒でも早く服従していただけるように、最も効果的な所を触るべきだと思いますよ？　まあ刃更さん的に、ジワジワといたぶる方が良いなら構いません。私、そういうのも好きですから」

「くっ……、……あーもう解ったよ！」

こんな馬鹿な事で澪を死なせる訳にはいかない。刃更が澪の隣に腰を下ろすと、

「や……っ、こ、来ないでよ馬鹿ぁ……変な事したら、百回殺して……んぅ」

「……残念だけど諦めろ。なるべく早く終わらせるから」

熱い吐息と共に身を悶えさせる澪へ、刃更は冷静に告げながら手を伸ばした。

まずはこちらに抵抗させないよう、押さえ付けるようにグッと二の腕を摑むと、
「っ――ふあぁぁあんっ」
それだけで澪はビクンと躰を跳ねさせた。触れた肌は、明らかに熱を持っていて。
その熱と、返ってくる艶っぽい反応に早くも挫けそうになるが、
「刃更さん――澪さまのためです。澪さまのためですよー」
「……ああ、解ってるよ」
囁くような万理亜の声に、刃更は仕方なく思考を切り替えた。
要は澪を屈服させ、自分に服従を誓わせてしまえば良いのだ。
……それなら。流石に女の子を相手にそんな真似をした事はない。だが――勇者の一族は異能の力の才能を持って生まれてくるが、能力の覚醒はこの世界に存在する精霊などに認められ、契約を結ぶ必要がある。言うなればそれは、精霊に自らを認めさせるという事で。恐らくは今回も、澪に刃更を主と認めさせれば、主従契約は結ばれる筈だ。
だから刃更は心を静かなものにし、ただ澪に自分を認めさせる事だけを考えた。
こちらが上と解らせるには、万理亜の言うように澪の弱い場所を攻めるべきで、
「や……あっ、んん……ふぁんっ、……んっ」
刃更は服の上から、澪の中で最も弱い部分を探すように、彼女の躰を触ってゆく。

余程強く呪いの効果が出てしまっているのだろう。どこを触っても澪は敏感に反応し、甘い声を漏らしながら躰を震わせる。だが――しばらくして、
「っあ――ひあああぁぁんっ!?」
刃更がある場所に触れた瞬間、澪は信じられないような反応を見せた。一際大きい声と共に、激しく全身を震わせて。思わず刃更が息を呑むと、万理亜は笑みを浮かべて、
「どうやら、そこみたいですね……澪さまの弱点」
視線が向けられたのは、女性を象徴する柔らかな膨らみ――胸だ。
だから――東城刃更は深呼吸を一つして。その最も敏感な場所へ、そっと手を伸ばした。

全身を甘い感覚に支配されながら、成瀬澪は見た。
刃更の手が、ゆっくりと自分の胸へと迫ってきて、
「だ、駄目……」
何とか抵抗の言葉を口にするのだが、しかし刃更は止まらなかった。まるで別人のような瞳でこちらをジッと見つめ、澪にそれ以上の抵抗を許さない。
……ど、どうしよう……このままじゃ、あたし……。

先程刃更に胸を触れられた瞬間を——全身に走った甘い刺激を、澪は鮮明に覚えている。
もうすぐまたあれが来るのだ。そう思うと躰の力が抜けていって、
「あ、ああ……」
とうとう刃更の手が、澪の胸へと触れた。その瞬間、全身に甘い感覚が駆け巡り、澪は激しく躰を震わせた。それは先程と同じ——否、先程以上の感覚で、
「やっ……そこは駄目、駄目なの……刃更ぁ……っ」
刃更の身体の下で澪は腰をくねらせながら、とろけそうな声で懇願の言葉を口にする。
だが、それでも刃更の手が澪の胸から離れる事はなかった。
そして——澪は、とうとう自分の胸が刃更の手によって形を変えられてしまうのを見た。
甘い感覚と共に知ったのは、自分の胸がどれだけ柔らかくて敏感だったのか。澪の大きな胸は、刃更の手から溢れて零れるようなサイズで。それでも彼の五指を受け入れるかのように、揉まれる度に指と指の隙間からはみ出し、いやらしく形を変えていた。
だからもう誤魔化せない。成瀬澪は、自分が今得ている感覚が快楽なのだと思い知る。
その甘美な感覚は、澪から思考という概念を奪って。そして、突然その瞬間は訪れた。
「あっ——やっ、あああぁぁぁぁっ!?」
刹那の感覚の空白の後——激しい快楽のスパークが澪の視界を真っ白に染めた。

それは全身の毛穴から快感が噴出し、躰が浮いてしまうような感覚で。
全身が勝手に硬直し、一瞬呼吸の仕方を忘れた澪は、
「……っ、あっ…はぁ……あぁ……」
やがて甘く熱の篭った吐息を漏らした。白い霧が晴れ、ぼんやりと視界が戻ってくる。
……嘘、あたし今……。
高校生である以上、澪にも人並みにその手の知識はある。だから、自分が刃更によってどういう状態にされたのかを理解して。その瞬間——澪はブルっと身を震わせた。だが、
「やっ……な、何で……？」
澪は困惑の声を上げた。てっきりこれで終わりだと思ったのに。澪の躰から、甘い感覚が消えてくれない。それどころか、どんどんと強いものになっていって、
「駄目ですよ、澪さま……これは主従契約を拒絶した事で発動した呪いなんですから」
言いながら、万理亜が自身の両太股を澪の頭の下へと入れてきた。
膝枕の体勢で、小さな手がこちらの顔を横から抱きながら、
「刃更さんに心の底から忠誠を誓わない限り、その感覚は消えません。良いですか……今、澪さまの眼の前にいるのは、澪さまのご主人様になる方。服従を誓う相手です」
「ご主人様……服従……」

最早、完全に快感によって思考をぼやけさせた澪の意識の中に、万理亜の声が染み込んでゆく。だから、澪はとろんとした眼を正面へと戻した。

すると、すぐそこに自分を見つめる青年がいた——刃更だ。

こちらを見る刃更の瞳は、吸い込まれてしまいそうなほど力強くて、

……刃更が……この人が、あたしのご主人様……。

そう思った瞬間、澪は震えるような幸せを感じた。圧倒的な存在への服従——その悦びが一気に澪の中で膨れ上がり、そのまま刃更へ忠誠を誓ってしまいそうになる。だが、

「だ、駄目……そんな、あたし……」

それでも最後の理性で、その甘い誘いに対して澪が迷いを口にすると、万理亜は嘆息。

そして、信じられないような事を言い放った。

「刃更さん、服の上からではなく——直接澪さまの胸を揉んであげて下さい」

「そ……っ」

思わず澪がビクっと反応すると、刃更は静かな瞳のまま万理亜へと問い掛ける。

「……大丈夫か？」

「はい。手加減していては、いつまで経っても澪さまを楽にして差し上げる事はできないようですから」

そっとこちらの頬を撫でながら、万理亜は穏やかな口調で刃更に言った。すると、

「——解った」

刃更は短く言うと、澪の胸から手を下の方へと移動させた。

「う、嘘……」

呆然としながらも、もう抵抗する力は残っていなくて。澪は、ブラトップの裾の下から刃更の両手が中へ差し入れられるのを見た。そしてその手が、ゆっくりと胸へ向かって上り始める。刃更の手首の甲に裾が引っ掛かり、ブラトップが少しずつ捲れ上がってゆき、

「んっ……ああっ、やっ……駄目、お兄ちゃ、お兄ちゃん駄目ぇ……」

追い詰められた澪は、とっさに刃更を「お兄ちゃん」と呼んでいた。

その反応に、刃更がふと手を止めた。だから澪はハッとなって、

……や、やだ。あたし、今の無意識で……っ。

顔が赤くなる。成瀬澪は、自分でも気付かなかった己の本心を思い知った。公園で命を助けられてから、自分は強く頼りになる刃更を、心の奥ではそう呼びたかったのだと。

すると、こちらを見ていた刃更は、

「御免な……もう少しの間だけ恥ずかしいのを我慢してくれ」

そう告げると、再び澪の服を捲り上げてゆく。

「んっ……あ、……やぁ……ん」

徐々に上半身が露になる羞恥と、お腹の上を滑るように昇ってくる刃更の手の平が与える快感に、澪は身をよじらせた。しかし、できる抵抗はそれだけで。程なくして服が、澪の胸の所まで捲り上げられた。それは、刃更の手と澪の胸の間に遮るものがなくなった事を意味していて。恥ずかしさに耐え切れなくなり、思わず顔を逸らそうとすると、

「駄目ですよ、澪さま……眼を逸らしたり、閉じたりしちゃ。ご自分がこれからどうなるか、ちゃんとご覧になって下さい」

こちらを膝枕している万理亜の手により、澪の顔は正面――刃更へと向かせられる。逃げられない。そして、

「……行くぞ」

刃更がそれだけを告げた直後――澪は、自分の胸が刃更の手に直に触れられるのを見た。直接、胸を揉まれる――その行為の意味を身を以て理解した瞬間。

「――――――」

成瀬澪は、これまでの人生で最も甘い声を漏らしながら、全身を激しく震わせた。

そして——程なくして澪の呪いは解除された。
「あ……んっ、は……ぁ……っ」
まだ快感の残滓が身体の中にあるのか、ソファに寝かされた澪はぐったりとしている。
「九回ですか……さすが澪さま、思ったより粘りましたね」
「お前……仮にもコイツの配下だろ。もうちょっと他に言う事はないのか？」
そんな澪を前に平然と呟く万理亜に、刃更はげんなりとしながら言った。
——あの後。あそこまでやっても、澪の心はまだ刃更に屈服しなかった。
だから、心の底からこちらを主と認めて服従を誓うまで、澪の胸を何度も攻め続けて。
全身を震わせるような感覚を何度となく澪の躰に刻み続けてゆくと、やがて澪は甘い声で、うわ言のように刃更を「お兄ちゃん」と繰り返し呼ぶようになり。万理亜の言う九回目で、とうとう刃更に服従を誓い、澪は快楽の呪いから無事に解放されたのである。
呆れたような視線を向ける刃更に、万理亜は悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「またまた～、刃更さんだって途中からは結構ノリノリだったクセに」
「なっ、そんな事は……！」
顔を赤くして、刃更が慌てて否定すると、
「澪さまがどれだけ嫌って言っても、最後まで触れるのを止めませんでしたよね」

「そ、それは……早くしないと危険だからってお前が」
「でも澪さまに、途中から『お兄ちゃん』と呼ばれた瞬間——ゾクってしたでしょう？」
「う……」
確かに、あの時は思わず理性がぐらりときそうになったが……って違う！
「それは安心して下さい。先程言ったように、主と配下が合意の上なら、次の満月に同じ魔法を唱えれば契約は無効化できますので」
「そ、それで、これからどうするんだよ？　本当に契約の解除はできるんだろうな？」
「次の満月……って事は、ほぼ一ヶ月は解けないのか」
深く考えると、軽く気が滅入る。まあそれまでは、なるべく澪とは円満な関係を築こう。
今回みたいな事が何度もあったら、流石に色々な意味で危険すぎる。
そして。事態も一旦収束したという事で、刃更はそもそもの疑問を問う。
「——ところで万理亜、何だって呪いの事を黙っていたんだ？」
ああそれは、と申し訳なさそうに万理亜。
「せっかく刃更さんが澪さまを助ける気になってくれましたので、途中で気が変わらないように、念のために保険をと……契約を解除できるのは事実なので、まあ問題はないかなと思いまして。すみません」

「そうか……」

と刃更は嘆息した。

「あれ……怒らないんですか？　てっきり私、朝まで生説教かと思ってたんですが」

キョトンとする万理亜に、刃更は「ああ」と頷いた。そして、

「――そいつは俺の役目じゃないからな」

そう言うと同時、万理亜の頭が後ろからガシッと摑まれた。それが誰かなど、言うまでもない。途端に顔に脂汗をだらだら浮かべる万理亜に、底冷えするような声が告げた。

「……万理亜、ちょっと話があるの。一緒に来てくれる？」

万力のように万理亜の頭を摑むと、澪は万理亜を引き摺ってリビングを出てゆく。

「ああっ澪さま頭が、頭が痛いですっ！　別にわざとじゃ……わざとじゃないんです」

万理亜が悲鳴を上げるが、澪は完全無視。そのまま階段を上ってゆく音が聞こえて。

すると二階の部屋の扉が勢いよく閉まった音の後――激しい悲鳴と、重い物が引っくり返ったような振動音、さらには何かが割れるけたたましい破砕音が連続して鳴り響いたが、刃更は全て聞かなかった事にした。せめて、気が済むまでやれば良いと思ったからだ。

そして――この日の東城家の騒音は夜中を通り越し、明け方まで止む事はなかった。

第3章　再会と信頼の狭間で

1

配下が主を裏切れば、即座に呪いが発動する主従契約魔法。

およそ一ヶ月後――次の満月の晩まで解除は不可能で。

当初は絶望的かと思われたが、刃更達はどうにか一週間を乗り切る事に成功していた。

――経緯はどうあれ、契約は結ばれてしまった以上、後はいかに状況に対応するかだ。

まずはなるべく呪いが発動しないように心掛け、それが上手くいくと今度は澪を説得し、少しずつ呪いの発動条件のラインや、他の効果についても確認していって。

そうして今では、それなりに契約魔法について理解を深める事ができていた。

まず――配下は何も絶対服従を強いられる訳ではなく、理不尽な命令には従う必要はな

い事。これは主従契約が一方的なものではなく、双方向に作用するためらしい。よって主側もまた、主として相応しい態度で配下に報いる必要があるのだ。これは、鎌倉時代に本格的に始まった将軍と武士の主従関係『ご恩と奉公』に近い。とはいえ主側が無茶な命令をしても、契約の立場が上のため、主側に呪いが発動する事はない。それでも、配下がおかしな命令に従わなくても済むというのは、刃更達にとっては救いになった。

——では、どうすれば配下側が主側を裏切ったと判断され、呪いが発動するのか？

これは少し複雑で、どうやら『精神的な裏切り』が呪いの発動条件になっていた。

とはいえ、配下側は絶対服従を強いられてはいない。理不尽な命令には『逆らう』権利を持っていた。また行動としては『反抗』や『裏切り』に見えるものも、たとえば間違いを『正す』など、主を想っての行為であれば許されるようだった。

だが逆に正当性のある命令に従わなかったり、理不尽な態度を取ったりしたら、呪いは容赦なく発動した。そして呪いの強さは、配下側が感じた『後ろめたさ』の感情——つまり『精神的な裏切り』の度合いに比例して発動するようで。

そして呪いが発動すると、その印として澪の首には首輪のような痣が浮かび上がった。

だが——基本的には、相手を想い、信頼していれば呪いが発動する事はない。

最初に、刃更と澪との契約が通常通り行かなかったため混乱こそしたものの、本来は主

従の信頼を高められ、相手の居場所も把握可能な魔法なのだ。

だから何の問題もない。そう心に必死に言い聞かせながら一週間が経過して。

そして——夏休みが終わりを告げた。

とはいえ。夏休みが終わっても、夏まで一緒に終わる訳ではない。

天気が晴れれば気温は平気で三十度を超える。

朝から茹だるような暑さのこの日。東城刃更は初めての通学路を歩いていた。

今日から二学期。新しい学校生活の始まりだ。

「あー暑いな……くそ」

袖を通しているのは夏服だが、別にズボンがハーフパンツな訳ではないのだ。おまけに周りには同じ制服を着た学生だらけ。人口密度が高すぎて嫌になってくる。

「女子は良いよな……スカートだし、丈も短いし」

「——ちょっと、勝手な事言わないでくれる？　こっちは代わりに冬とか寒いんだから」

ぼやく刃更に、隣から冷たい声が掛けられた。同じ学校の制服に身を包んでいる澪だ。

呪いの発動ラインも大体見極められたため、普通の会話の中での憎まれ口くらいなら問

題はない。マズいのは悪意があったり、後ろめたさを覚えたりする感情なのだ。
「でも、お前ら冬はスカートの下に短パンとか、下手すりゃジャージとか平気で穿くだろ」
どいつもこいつも、平然と男の純情をブチ壊しやがって。すると、
「そんなの当たり前でしょ、冬に温かくしなくてどうするのよ」
「じゃあ結局、冬は冬で温かいんじゃん！」
いかん。思わず突っ込んでしまったが、自分でさらに熱くなってどうする。そこへ、
「そうですよー、落ち着いてください刃更さん」
背後から来る幼く甘い声。振り返れば、刃更達の後を万理亜がとことこ付いて来ている。
こちらは当然制服ではなく、ワンピースという涼しげな格好をしていた。
「暑いと思うから暑いんです。そんな時は、この私を見ると良いと思います」
そう言うなり、万理亜は手に持っていたコンビニの袋の中をガサガサと探った。
そしてまずペットボトルを取り出すとゴクゴクと飲み、次にアイスの袋をピリッと破いてパクンと一口。んーと幸せそうに目を細めると、笑顔をこちらへ向け、
「どうです？　涼しそうな光景を見ると、自分も涼しくなるでしょう？」
「ならねえよっ！」
「むー、刃更さんには、学校内で澪さまの護衛をお願いするので、少しでも元気になって

貰おうと思ったんですが」
しゅんとしながら、アイスを舐める万理亜。その姿には無駄に変なエロさがあって。
こういう何気ない瞬間に、やはり彼女はサキュバスなのだと思い知る。
「……気持ちだけ貰っとく」
げんなりしながら、刃更は前へと向き直った。すると視線の先で、同じ制服を着た生徒達の波が塀の中へ吸い込まれてゆくのが見える。程なくして刃更達もそこへ到着し、
「へーここがね」
正門の前で刃更は立ち止まり、大きな建物を見上げた。
私立『聖ヶ坂学園』。それが澪が通い、今日からは刃更も通う事になった学校だった。
「それじゃあ澪さま、私は近くで待機してますので」
「うん。よろしくね」
主従契約魔法をミスった晩は烈火の如く怒っていたが、流石に一週間も経てば澪の怒りも収まって。澪と万理亜は、すっかり仲の良い姉妹のような関係に戻っていた。
澪の言葉に「はい」と万理亜は微笑を浮かべると、ふと刃更を見上げて、
「では刃更さん、澪さまをお願いします。人が多い場所なので大丈夫とは思いますけど」
「ああ、何かあったらすぐ報せるよ」

しかし、ふと疑問が湧く。

「でも……近くで待機っていったって、今日は平日だぜ？　その辺をうろうろしてたら、警察なんかに見つかって面倒じゃないか？」

すると、

「ふふふのふ。ご心配なく、全然大丈夫なのですよー」

万理亜はふふんと笑って、肩から提げたポーチから一枚のカードを取り出す。

「ほら、こういう場合に備えて、十八歳の偽造免許証がありますから。十八歳ですよ？　今の私は、平日の午前中からぶらぶらし放題です」

「あ、そう……」

刃更は脱力する。十八歳だからといって、別にぶらぶらし放題ではないだろう。

というか満面の笑顔のとこ悪いが——その外見で十八とか、普通に偽造を疑われるぞ。

2

校内へ入ると、登校時間のピークという事もあって、廊下は生徒達でごった返していた。

転入生の刃更は、澪と別れてまずは職員室へ。入口で今日から通う事になった転入生だと伝えると、来客用の隣室で少し待つように言われて。そしてチャイムが何度か鳴った後、若い男性教諭が出席簿を手に迎えに来た。眩しい笑顔で手を差し出され、

「クラス担任の坂崎守だ。これからよろしくな、東城」

「はあ、どうも……」

無駄に爽やかなオーラにやや気圧されながらも、刃更は握手に応じた。

職員会議後はすぐに朝のホームルームのため、早速教室へと移動する。

「しかし、家庭の事情での転入はよくあるが、東城の場合はちょっと複雑みたいだな」

「ええ、まあ……」

澪と同居している事は隠しても仕方がない事だ。よって学校側にだけは、当初刃更が聞かされていたのと同じように、再婚前にこれから家族としてやっていけるかどうかの、同居期間中だと伝えている。とはいえ、クラスメイトにまで吹聴する事はないだろうが。

「でも、そういう試験期間を作ってくれるなんて、子供の感情をきちんと考えてくれている良い親御さんじゃないか」

刃更は「はあ」と曖昧な答えを返した。実際は何から何まで騙されていたとは言えない。とはいえそれは迅なりの考えがあっての事なので、坂崎の言葉に間違いはないが。

……あ、そういえば。

刃更はふと思い出した事を坂崎に訊ねる。
「あの……ウチの親父の知り合いがこの学園にいるそうなんですが、何か聞いてます？」
転入の手続きをした時に、迅がその人に何か便宜を図って貰ったのかもしれない。
ならばお礼の一つでも言った方が良いだろう。しかし、
「そうなのか？　いや、そんな話は特に聞いていないけどな。何なら後で調べておくか？」
「あ、いや、大丈夫です」
担任の坂崎が聞いていないという事は、言わない方が良い事なのかもしれない。
軽く断ったところで、教室の前に着いた。
「ここが俺とお前のクラスだ。新しい家族に新しい学校と、色々と大変かもしれないが、すぐに慣れるさ。それに、ウチのクラスには成瀬もいるからな」
へえ、と刃更は小さく驚く。兄弟や親戚が同じクラスになる事は少ない。てっきり澪とは別々のクラスになるものとばかり思っていたのだが。気を利かせてくれたのだろうか。
「それにクラス委員長は真面目な奴だし、担任の俺だっている。何か解らない事があったら、遠慮なく頼ってくれ。それじゃあ、入るぞ」
そう言って、坂崎が教室の中へと入ってゆき、その後に刃更も続く。転校生が来るという情報は回っていたのだろう。黒板の前に立つと、クラス全員の顔を見渡す事ができて、

……やれやれ。
刃更は心の中で嘆息した。教室中の視線が自分に集中し、一斉に刃更の値踏みが開始される。それは避ける事のできない転校生の宿命だ。
取り敢えず男というだけで、例外なく男子が落胆したのが見えた。解っていた事だが、自己紹介すらしていない時点で、早くも負け戦というのは正直へコむ。自分では並の容姿だと思うのだが、それでも女子の中には刃更への興味を失っていない者が何人かいて、
……あ。
その中に、窓際の後ろの方の席に座る澪もいた。
……やっぱ、目立ってんな。
こうして見ると、改めて澪の可愛らしさが良く解る。教室という空間では、誰もが同じ制服を着て、規則正しく並んだ席に座る。条件は同じ。そのため、余計に素材が際立って見えるのだ。まじまじと見つめていると、窓の外へ視線を逸らされた。
ハイまた一人減ったー。あと残っているのは、
……ん？
澪と同じ窓際の列――一番前に座っている女子がこちらを見ていた。
綺麗な少女だった。澪のような鮮烈な存在感とは対照的な、透き通る氷のような雰囲気。

タイプこそ違うが、澪にも引けを取らないような美少女だ。
隣の机が空いているのを見るに、恐らくあそこが刃更の席なのだろう。
成る程、自分の隣の席に座るとなれば、興味を持つのも無理はない。しかし、
……えーと、どうしたもんかなこれ。
可愛い子だとは思うが、ここまで思い切りガン見されると流石にちょっと気まずい。
とその時、助け舟のタイミングで、教卓の脇に立った坂崎が無駄に爽やかに、
「さて、見ての通りの転校生だ。――東城、自己紹介を」
「あ、はい……」
黒板に名前を書き、
「えーと、東城刃更です。名前はちょっと物々しいですが、見ての通り普通の奴なんで、これからよろしくお願いします」
どうせ突っ込まれるネタなので、先に自虐的に自己紹介すると、男子連中の表情が少し和んだものになった。歓迎の空気が僅かに流れ出し、刃更はホッと胸を撫で下ろす。
それから質問タイムになり、他愛のない質疑応答を何度か繰り返していると、やがてホームルーム終了のチャイムが鳴った。坂崎がパンと両手を鳴らして、
「――よし、取り敢えずここまで。続きは、始業式の後でな。東城、お前の席はそこの空

いている所だ。野中、委員長のお前が東城の面倒をみてやってくれ」
「……はい」
例の美少女が立ち上がり、静かに頷いた。どうやら彼女がクラス委員長だったらしい。
「さあ、全員廊下に整列しろ。体育館に移動するぞ」
坂崎の言葉に、全員が席を立ち始める。
「整列しろって言われてもな……順番とかどうすりゃいいんだ？」
教室の外へ人の流れができている中で、どうしたものかと刃更が立ち尽くしていると、
「――刃更」
いきなり名前を呼ばれて、刃更はギョッとそちらを振り返った。
「えっと、何かな委員長……？」
いつの間にか、すぐ傍に例の少女が立っていた。いきなり名前で呼ばれてびっくりしたが、転入生の刃更としては、彼女には何かと世話になる身だ。だから、
「これからよろしくな委員長。なるべく迷惑を掛けないように――」
するから……そう言おうとして、だができなかった。いきなり抱き締められたからだ。
「え――？」
一瞬、何が起こったのか解らなかった。

だが柔らかい女の子の感触と、ほんのりと甘い匂いが、それを現実だと教えてくれる。
「な、なっ、何やってんのよアンタ達っ！」
誰よりも先に刃更達の様子に気付いた澪が、顔を真っ赤にしながら、呆然としているクラスメイト達を押しのけてこっちへやって来ようとする。その眼は軽く血走っていて、
「おおっ!?　委員長、ちょっと離れようか！　このままだと多分危ないから！」
主に俺の身が。
「というか名前呼びにハグとか、もしかして委員長って帰国子女だったりするのか？」
「……違う」
こちらの問いに、刃更に抱きついたまま野中が顔を上げた。
「刃更……本当に忘れてる？」
そして、こちらへ向けられた少し拗ねた表情と、
「ん？　そういや、野中って……まさか」
担任の坂崎が呼んだ委員長の苗字に、ようやく刃更の記憶が繋がった。
「ひょっとしてお前……柚希か？」
数年ぶりに呼んだ幼馴染の名に、眼の前の少女は静かに「ん」と頷いた。
「刃更、久しぶり……」

嬉しそうに言って、野中柚希は微笑を浮かべた。そこへ、
「いい加減に離れなさいよっ！」
強引に割って入ってくる澪。刃更と柚希を引き離すと、
「い、いきなり抱きつくなんて……お、おかしいんじゃないのアンタっ？」
顔を真っ赤にして柚希に食って掛かる。しかし柚希は平然と、
「別に。私と刃更はこれが普通」
「ふ、普通……？　ちょ……ちょっと刃更、どういう事よそれ？」
鬼の形相で睨んでくる澪に、刃更は困ったように、
「いや、柚希とは幼馴染で……よく俺に懐いてたんだよコイツ」
「懐くって……アンタ、犬や猫じゃないでしょうがっ」
「そりゃそうなんだが……」
でも事実なんだから仕方ない。年も同じで家も近かったから、ほとんど兄妹みたいにして育ったし。というか痛い。澪もそうだが他のクラスメイト達の視線が痛い。特に男子。
そりゃそうだ。傍目には、澪と柚希が刃更を取り合っているようにしか見えない。
……いかん。このままでは、せっかく自己紹介で育んだ友好的な空気が……。
だが、どう説明したものか。そうこうしている間にも、事態は悪化を続け、

「……成瀬さんには関係ない」
とうとう柚希が、冷たくそう言い放った——それが澪の感情に火を付けた。
「か、関係あるわよっ！」
刃更が止める間もなく、廊下にまで響き渡る声で澪は叫んだ。決定的な一言を。
「あたし……っ、コイツと一緒に暮らしてるんだから！」

3

そして始業式が終わり、何度か授業が行なわれると昼休みになった。
楽しい食事時の空気が学校中に広がる中。
教室の自分の席で、刃更は一人ポツンと所在なさげに座っていた。思わず呟く。
「……マジか」
凄い。これは想像以上だ。人って、転校初日にここまで孤立できるものなのか。
取り敢えず、男子は完全に敵に回してしまったらしい。柚希に抱き締められただけでも既にヤバかったというのに、澪の同居宣言は完全に駄目押しになった。
対する女子はといえば、始業式後に教室に戻るなり刃更を容赦なく質問攻めにした。澪

や柚希の情報は教えてくれたが、自分達の気が済むまでこちらの情報を仕入れると、満足したとばかりに去っていき、それきり話し掛けて来なくなって。

よって刃更が話しかけられる相手は、澪と柚希しかいなくなっていた。

――しかし、そんな頼みの綱の二人も今はいない。柚希はクラス委員の仕事なのか、先生に呼ばれて行ってしまった。ならばと澪を昼食に誘ったら、「せっかく再会したんだから、幼馴染さんと食べれば」と言って、クラスの女子とどこかへ行ってしまった。ある意味こちらに気を利かせた提案のためか、主従契約の呪いも特に発動する事はなく。

そして――今現在の孤立へと至る。刃更はやれやれと嘆息して、

「取り敢えず、行くか……」

ここでこうしていても仕方がない。弁当を持ってきていない以上、選択肢は食堂か購買のどちらかだ。そして席を立って教室を出たところで、刃更はふと声を掛けられた。

「よーっす。クラスの男子のほとんどを一瞬で敵に回しちまうたぁ、災難だなー転校生」

振り返ると、人懐っこい笑みを浮かべた男子が立っている。クラスメイトの一人だ。

「えっと……滝川だっけ？」

「あれ、よく解ったな？　前にどっかで会ってたっけか？」

滝川は不思議そうな顔をした。クラスの前で自己紹介したのは刃更だけ。当然ながら、

滝川を始めとした他のクラスメイト達は名乗っていない。

「ああ、それなら坂崎先生に貰ったこれのお陰だよ」

刃更は、ポケットから一枚の紙を取り出して見せた。それは担任の坂崎が、少しでも早くクラスメイトの名前を覚えられるように用意してくれた、座席表のコピーだ。

「へー、さすが坂崎。気が利いてるな」

納得がいったとばかりに滝川は頷くと、馴れ馴れしく刃更の肩に手を置いてくる。

「つー訳で飯に行くとすっかよ転校生。まだだよな、昼飯？」

「ああ……でも、どういう話の流れで『つー訳』なんだ？」

「転校初日に、クラス中の男子敵に回して孤立した転校生が、昼休みに背中丸めてぼっち全開だからな。いと憐れすぎて、思わず声を掛けずにはいられないだろ。それに、俺も去年この辺に引っ越して来たんだ。転校生の苦労や憂鬱みたいなモンも少しは解るしな」

気を遣ってくれたのは有り難いが、もうちょっと他に言いようはないものか。

まあ悪い奴ではないのだろうが。

「なら東城で良いよ……俺も滝川って呼ぶし」

「あいよ。そんじゃ東城、食堂と購買どっちにするよ？」

「そうだな……今日のところは購買、かな」

休み時間の事もある。食堂は人の目が多くて、落ち着かなそうだ。
適当なものを買って、人の少ないところでのんびり食べたい。
「となると急いだ方が良いな。あんまり遅く行くと、ロクなモンが残らねーし」
そう言って滝川が歩き出した。刃更が隣に追いつくと、
「しっかし澪姫の未来の義理の兄貴で、柚希姫の幼馴染ねえ……ウチの学校が誇るアイドルの双頭とフラグ立て済みとか、どんな覇王ポジションだっつの」
「姫……？　そんな風に呼ばれてるのか、あの二人」
確かに容姿は抜きん出ているとは思ったが。
「ああ。だから多分お前、他のクラスや上の学年の連中も敵に回したと思うぜ。何せアイツら、ウチの学校じゃ特に人気が高くて、熱狂的なファンが大勢いるみたいだからな」
と、肩を竦めて笑いながら滝川。
「男の嫉妬ってのは案外、女のよりも根が深いし、ぶっちゃけかなり尾を引くぜ？」
成る程。道理で、休み時間に水を飲むために教室の外へ出たら他のクラスの男子から敵意の篭った眼で見られたり、トイレに行くとそこはかとなく殺意を感じたりした訳だ。
「あーやっぱ出遅れたか」
購買に着くと、既に昼食を求めて長蛇の列ができていた。

苦い表情になった滝川と共に、刃更は列の最後尾に並ぶと、さりげなく探りを入れる。
「なあ……アイツらのファンが熱狂的だって話だけど、これまでにそれに絡んで何か問題が起きたりした事ってあったか？」
「何だそりゃ、物騒だな……。で？　お前の言う問題って、たとえばどんなよ？」
と列の前方を見ながら滝川。「そうだな」と刃更は前置きして、
「たとえば誰かが強引に迫ろうとしたとか……逆に、人気の高さを妬んだ女子が何か嫌がらせをしたとか」
「まさか。そもそも抜け駆けなんてしようもんなら、他のファンの連中が黙ってねえよ。女子だって、成瀬や野中の人気の高さは知ってる。下手に嫌がらせをしたら、男子の非難の的になる事くらいは解ってるしな」
「成る程……」
つまり澪は、学校内にいる間はある程度人の目を集める状態にあるという事か。
敵が学校内に紛れ込むリスクがあったが、これならそう強引な手段は取れないだろう。
……まあ、現に一学期は普通に過ごせてた訳だしな。
勿論、だからといって学校内が安全だと言い切る事はできないが、少なくとも警戒しなければいけない場所や時間帯など、ポイントは絞り込める。

刃更が思案していると、隣の滝川がふと意地の悪い笑みを浮かべて、
「まあ、前に抜け駆けしようとした二年の男子が、数人の三年にシメられたって話ならあるからなあ……そういう意味じゃ、逆にお前が一番危ないんじゃねーかな？」
「みたいだな……」
それはそんな気がしてた。何せ購買に来てからずっと、一部の男子がこっちを睨んでいるのだ。澪の危険が少ないのは良いが、これではこっちの学校生活が思いやられる。
「でも良いのか滝川？　それだと俺と一緒に居たら、お前までその熱狂的なファンに眼を付けられちまうんじゃないか？」
刃更の問い掛けに、滝川は笑いながら、
「気にすんな。俺、逃げ足は速いから。いざという時は、お前を置いて逃げるし」
頼りがいのあるクラスメイトだ。すると滝川は「それに」と付け加える。楽しそうに、
「学園が誇る美少女二人とフラグ持ちってのは何気に凄いからな。主人公体質っつーの？　そういう『運』とか『見えない力』を持ってるっぽいヤツと一緒に居ると、学校生活が色々と楽しくなりそうだろ。これからよろしく頼むわ」
「こっちもよろしく。ただ……残念ながら、俺にそんな運や力はないよ」
刃更は苦笑した。自分はもう——勇者の資格を失った、ただの脇役に過ぎないのだ。

4

放課後。
教室を出てからずっと無言だった澪が、生徒玄関を出たところでようやく口を開いた。
「……何で付いて来んのよ」
「いや、普通に帰ろうとしてるだけなんだけど……」
不機嫌な声。どうやら朝のホームルーム後の一件が、未だに尾を引いているらしい。
まあ、確かにあれはこっちもびっくりしたが。
——しかし、いい加減機嫌を直してくれないだろうか。学校でもぼっちになりかけていたのに、このままだと家に帰っても、ロクに口をきいて貰えなさそうだ。
ここは一つ、人という字の意味について改めて再考を求める所存です。
支え合おうぜ。
「なあ澪……『人』って字をどう思う？」
「アンタと野中が抱き合ってるように見える」
ダメだ。無理。取り付く島ナシ。こうなると第三者の介入を期待するしかなさそうだ。

正門へ向かって歩いていた刃更は、視線を遠い前方へと向けた。すると、
「澪ちゃーん、刃更さーん」
正門の外で待っていた万理亜が、大きく手を振ってくる。どうやら人前では姉妹という設定を押し通すらしい。まあ「澪さま」とか呼んでたら、何事かと思われるしな。
「二人共……おつとめご苦労様です」
「出迎えはありがたいけど、その言い方はちょっと違うな」
人をムショから出てきたみたいに言わないでくれ。生活指導の先生が見てんだよ。
すると不機嫌そうな澪の様子に気付いた万理亜が、こちらと澪の表情を交互に見た後、
「刃更さん、刃更さん……」
こちらの袖を引いて澪と少し距離を取ると、そっと耳打ちしてくる。
「どうしたんです澪さま？　何だかとってもご機嫌斜めのようですが」
「いや、ちょっと色々あってさ……」
「？　……ああ、成る程。そういう事ですか。駄目ですよ、ちゃんと避妊しなきゃ」
「おいこら……お前は今、この数秒で何を考えた？」
やはり誰かに頼るのは良くないようだ。自分で何とかしよう。とその時、
……ん？

ふと向こうに居る澪が、こちらを見ている事に気付いた。
「……」
その表情は、どこか刃更の言葉を待っているかのようで、
……だよな。
自分を守ると約束してくれた相手に、知らない面があれば不安になって当然だ。
何て事はない。自分と澪は、まだ信頼関係がきちんと築けていないのだ。
家族としても——そして仲間としても。だが、
……妹を心配させてちゃ、兄貴失格だよな……。
自分に言い聞かせるようにそう思うと、刃更は澪の所へと戻っていった。
「……何よ」
拗ねたようにそっぽを向いた澪が、チラリと横目でこちらを見てくる。
だから、そんな澪を安心させる言葉を探そうとした時だった。
「——刃更」
横から遮るように、静かな声で名前を呼ばれた。いつの間にか、すぐそこに野中柚希が立っていて。そして、途端に不機嫌そうな表情になった澪を無視して告げる。
「大切な話があるの……二人だけで」

5

二人だけで話したいという柚希の申し出を、刃更は受ける事にした。
案の定、不機嫌になった澪は刃更を置いて帰っていったが、向こうは万理亜が一緒だ。
季節がら日はまだ高い上に、下校時間という事で人の目も多くある。
少し位なら二人にしても心配はいらないだろう。
刃更と柚希は駅前の喫茶店へ移動。奥の空席に案内された所までは良かったのだが、
「……なあ、柚希。カウンターじゃなくてテーブル席だし、普通は対面で座らないか？」
四人掛けが可能なテーブル席にも拘らず、何故か柚希は刃更の隣に座っていた。すると、
「駄目。これからする話は、他の人に聞かれない方が良い」
ただでさえ近い距離なのに、柚希は椅子をさらに刃更の方へぴったりと寄せてきた。
互いの腕が触れるような至近距離。スベスベの素肌の柔らかい感触と、柚希から発せられる甘い女の子の匂いがふわりと香って、
……うっ。これは、ヤバイ……。
離れていた間に幼さがなくなり、女の子として成長した幼馴染のギャップに、刃更は

異様に意識してしまう。だが対する柚希は涼しい顔で、メニューを手に取り眺めていた。
そして二人で簡単に飲み物を注文し、お冷で喉を軽く潤したところで、
「……ありがとう、来てくれて」
ゆっくりと柚希が口を開いた。
「いや、良いよ。俺もお前と話したい事があったし」
学校だと周囲の眼が凄くて、結局ロクに話せなかったもんな。
「良かった……」
ホッと胸を撫で下ろしたように柚希。
「刃更、てっきり怒ってるかと思った」
「ん？　何でだ？」
「だって……抱きついたのに嬉しそうな顔しなかったから」
「いや、あの時はまだお前だって気付いてなかったし……」
柚希と最後に会ったのは十歳の時、もう五年も前の話だ。互いに今は成長期。とっさに解らなくても無理はないだろう。そして初対面だと思っていた女の子に抱き締められれば、誰だって固まりもする。それに、
「……変わったよな、お前」

まず思うのは、驚くほど綺麗になった事。刃更の知る柚希は、幼馴染の中でも体も小さく幼い感じだったが、今はむしろ年齢よりも大人びて見える。

髪形を変えたせいかも、と柚希は言った。確かに昔の柚希は、髪を長く伸ばしていた。

だが——再会してすぐ、刃更が柚希に気付けなかった理由はそれらのせいではない。

改めて思う。

……こいつ、こんな顔する奴じゃなかったよな……。

口数自体は子供の頃から少なかったが、感情は豊かな方だった。だが、隣でこちらの表情を窺っている柚希の顔からは、まるで感情が見えない。

……五年か。

恐らく、刃更の知らない時間が彼女を変えたのだろう。今の柚希はもう、刃更の知っている柚希ではないのかもしれない。今の刃更が、もう五年前のあの頃とは違うように。

「……つーか俺って昔、そんな嬉しそうな顔してたか？」

思考が良くない方向に向かっている事を感じた刃更は、話題を前へと戻した。

すると柚希は「ん」と頷いて、

「私が抱きついたら、ギュって抱き締め返してくれた」

「んー、そうだったっけ……」

「——あと、どさくさでよく私のお尻触ってた」

「えっ、マジで!?」

全然記憶がないんだが。つーかただのエロガキだろそれ。何やってんだガキの頃の俺。

……あ。

慌てたこちらを見て、ようやく柚希が表情を綻ばせた。

その穏やかな微笑が、刃更の記憶の中にあるかつての柚希と重なって。

ようやく実感する——自分は今、確かに幼馴染の野中柚希と再会したのだと。

その事は凄く嬉しい。でも、だからこそ眼を逸らす訳にはいかない。

「……で？　話ってのは？」

刃更の問い掛けに、柚希はすぐに言葉を返さなかった。

そして浮かべていた微笑を、元の冷たい無表情へと戻し、

「……成瀬澪の事」

そっと囁くように言った。それは、予想していた通りの言葉で、

「刃更……これ以上、彼女と関わらないで」

「やっぱお前なんだな……里が決めた、アイツの監視役は」

そう。本来なら、柚希がこんな所に居るのはおかしいのだ。

刃更の幼馴染――勇者の一族の少女が、里を離れてこんな場所に居るなどという事は。
「準S級監視対象なんだってな……」
「……知ってたの？」
「親父から聞いた。アイツらの状況も、大体は解っているつもりだ」
「なら話は早い。今すぐ成瀬澪から離れて」
テーブルの上に置いていた刃更の手に、柚希の手が重ねられた。
そして、そっとこちらへと身を寄せて見つめられる。
「彼女は今の魔王から狙われてる――このままじゃ、刃更や迅さんも巻き込まれる」

――そんな刃更と柚希の様子を、離れた席からこっそり見ている者達がいた。
澪と万理亜だ。先に帰ろうとしたのだが、やはり刃更と柚希が気になって後を付けて来たのである。向こうの会話を辛うじて聞き取り、
「……やっぱり彼女、刃更さんと同じ勇者の一族だったみたいですね」
「え、ええ……そうみたいね」
万理亜の言葉に、澪は少し気まずそうに頷いた。

……そうよね。
刃更の幼馴染なのだ。よく考えれば解りそうなものだったが、朝は眼の前で行なわれた抱擁に動揺し、自爆さながらの同居宣言をしてしまうなど、どうにも冷静な思考ができなくて。てっきり今も、逢引きか何かだとばかり思っていた。
でも――今にして思えば、確かに野中柚希は、どこか澪を避けていたような気がする。無論、人には相性というものがある。向こうがこちらを避けるなら、無理に仲良くする必要もないので、そのまま距離を置いていたのだが、
……その割には見られている気がしてたのは、そういう事だった訳ね。
とはいえ、向こうから仕掛けてこない限り、こちらから手を出す必要もないだろう。
自分の敵は、あくまで両親を殺した魔族達だ。勇者の一族まで敵に回していては、とてもじゃないが目的を達せられない。
「澪さま、どうします？　あの人、刃更さんと私達を引き離そうとしてるようですが……」
「……そうね、もう少し様子を見ましょう」
上手くいけば、勇者の一族の動きを知る事ができるかもしれないし、
……それに、もしかしたら……。
刃更の本音を聞けるかもしれない。自分を守ると言ってくれた彼が、本心ではどう思っ

ているのかを。予期せぬ形ではあるが、成瀬澪が東城刃更という青年を見極めるためには、これ以上の機会はない。だから澪は、再び刃更達の会話に耳をそばだてようとして、

「――んぅっ」

覗きのような真似をしている事に、僅かな後ろめたさを得たせいだろう。躰の奥からじんわりと湧き上がる甘い感覚に、澪はピクンと身を震わせた。主従契約の呪いだ。

「……澪さま？」

不思議そうにする万理亜の隣で、澪は顔を赤くしながら「これは覗きじゃない」と心の中で繰り返す。自分は今、主を裏切っているのではなく、その身を案じているだけなのだと。すると程なくして甘い感覚は治まってゆき、澪はホッと嘆息。

再び刃更達の様子を窺いながら、

……それにしても。

再会したら人目を気にせずいきなり抱きついたり、今も身体を寄せて手を重ねて見つめたり。あの女――幼馴染とはいえ、ちょっと馴れ馴れしすぎやしないだろうか。

これ以上、澪と関わるな――懇願にも似た柚希の言葉に、

「遅えよ……残念ながらもう巻き込まれちまったからな」

刃更はゆっくりと首を振り、そして自らの決意を告げた。

「俺も親父も、もうアイツらを守るって決めたんだよ」

「――でも！」

珍しく声を大きくして柚希。短く息を呑んだ後、絞り出す声で、

「五年前のあの事件で、刃更は……」

「……うん」

柚希が何を言いたいかは解る。五年前に起きた事件のせいで、刃更は里を離れる事になった。その時に自分がした事と、失われたものを、東城刃更は忘れていない。でも、

「それでも……俺は、澪を守ってやりたい。澪が手に入れた力は、アイツが望んだものじゃない。アイツはただの人間として、一人の女の子として生きていただけだ。それを周囲の思惑で親を殺され、そして今――アイツ自身も、力を奪われて殺されようとしている」

それを黙って見ている事はできない。見過ごせない理由が、東城刃更にはあるのだ。

「アイツに罪はないんだ。もし里が、お前らがアイツを守ってくれるっていうなら――」

「……それだけはできない。刃更だって解ってる筈」

「だよな……」

表情を暗いものにした柚希に、刃更は苦笑を返した。
勇者の一族は、魔族からこの世界の平穏を守るために存在していて。
その理念は何よりも優先される——たとえ、どのような犠牲を払う事になろうとも。
——この世界の勇者は、誰も彼もを守るようなファンタジー世界の英雄ではない。
己の存在を隠し、守るのは世界という現実だけ。そのためには、払わなくてはならない犠牲もある。それは刃更も解りきっていた事だ——だからこそ、五年前のあの事件の後。
刃更は勇者の一族としての資格を失い、そんな刃更を勇者のままでは守れないからと、迅までもが勇者である事を止め——そして二人で里を離れたのだから。
そして澪が命を狙われているのは、あくまで魔族の内輪揉めだ。助ける理由はない。
だから。澪を助けてやれるのは、刃更と迅しかいないのだ。
「柚希が心配なのは解るよ。五年前、俺は自分のした事を最後まで背負いきれなかった」
「違う。あれは刃更は悪くない……だってあれは」
柚希が言おうとしたその先の言葉を、刃更は「いや」と首を振って遮った。
「それでも、俺がした事は消えない」
すると、それまで黙っていた柚希に変化が訪れた。俯き、今にも泣き出しそうな顔で、
「……絶対ちゃうもん」

訛りのある言葉遣いでそう言った。それは感情を抑えきれなくなった時に出る癖で、
「誰が何と言おうと、ウチを助けてくれたのは刃更やもん……」
「……うん。ありがとな」
柚希がそう言ってくれれば、たとえ許される事はなくても、少しだけ救われる。
大きな過ちを犯し、多くの者を失わせた自分に、それでも守れたものがあったのだと。
「けど俺は、自分のした事の責任を背負いきれなかった……今もそうだ。どうやって向き合えば良いのかも、まだ解らない」
でも、と刃更は言って、そして告げた。
東城刃更の譲れぬ想いを、柚希と、自分自身へと語り掛けるように、
「だけど澪は……アイツは俺とは違う。悲しい過去と向き合って、それでも前を向いて必死に生きようとしてるだろ。戦おうとしてるだろ。そんなアイツと俺は出会ったんだ。勿論そこには親父の意図があったし、騙されていたと知って最初は怒りもしたさ。でも——全てを知った時、守りたいって思った。ただの同情や、気の迷いなんかじゃない。アイツの事を守ってやりたいって、本当にそう思ったんだよ。確かに柚希の言うように、今の俺にはもう昔みたいな力はない。五年のブランクもある。どれだけ役に立つかなんて解らないよ。でもさ、それでも勇者がアイツを守れないなら、アイツのために戦えないっていう

なら。それはきっと、俺の役目なんじゃないかって思うんだ。だから、だからさ――」

そこまで言った時だった。けたたましい音が喫茶店中に響き渡った。

何事かと刃更と柚希がそちらを見れば、

「し、失礼しましたっ」

店の出口のところで、慌てたようにウェイトレスが床にしゃがんでいた。

恐らく客とぶつかり、ステンレスのトレーごとカップを落としてしまったのだろう。

客は慌てて外に出たのか、扉は開いたままになっていた。

飛び出すように店を出た澪は、必死になって走り続けた。

走って、走って、息が切れる限界まで走って。やがて転がり込むように、路地裏へと駆け込んだ。その直後、万理亜が慌てて後を追い掛けてきて、

「み、澪さまぁっ、いきなり走られたら困ります。外で一人になるのは危険――澪さま？」

息を切らしながら咎めてくる万理亜の声を、しかし澪は聞いていなかった。

仕方ないだろう。だって限界だったのだ。

もしあれ以上あそこで刃更の話を聞いていたら――間違いなく澪は泣いていた。

自分の顔が赤いのが解る。それは主従契約の呪いでも、全力疾走をしたせいでもない。

「どうしよう、万理亜……あたし、これから刃更とどう接すれば良いの？」

動揺で身体が震えてしまう。湧き上がる感情が抑えきれない。刃更にとって澪は厄介者のようなものだろうに、まさかあそこまでの決意をしてくれていたなんて。

知らなかった。刃更は――あんなにも強い想いで、澪を守ろうとしてくれていたのだ。

「良い事じゃないですか……刃更さんが本当に良い人だったって解ったんですよ？」

「でも……」

こうなると、刃更を巻き込む事に不安を覚えてしまう。しかし万理亜は首を振って、

「心配いりません。刃更さんの想いは、刃更さんのものです。澪さまがしなければいけない事は、おかしな遠慮じゃなくて、刃更さんの想いに応えてあげる事だと思いますよ」

「応えるって……どうしてあげれば良いの？」

「決まってます。もっと心を開いて、刃更さんを信頼してあげるんです」

「そ、それだけで良いの？　そんな簡単な事で？」

「そうですよー。後は、もし澪さまが刃更さんに何かしてあげたいと思ったら、それをしてあげれば良いと思います」

「あたしが、アイツにしてあげたい事……」

何だろう。こういう場合は、やはり何かお礼をした方が良いのだろうか。
だとしたら、一体今の自分に何ができるだろう。思わず澪が考え込んでいると、
「――あ、でも」
ふと、思い出したように眉根を寄せて考え込む万理亜。
「あの幼馴染さんだけは、ちょっと危ないかもしれないですね……私達が店を出た後、どうなったか解りませんが。刃更さんって基本良い人ですし。先刻も手とか重ねて、見つめ合ったりしてましたしね。あのまま泣かれたりとか、それこそもっと大胆に迫られたりしたら、案外刃更さん、情にほだされてふらふら彼女の方へ行っちゃうなんて事も……」
「だ、大胆って、まさか……人目のあるお店の中だし」
その可能性を否定しようとして、しかし澪は今朝クラスであった事を思い出す。
そうだ。そういえば、柚希は人前で堂々と抱きつくような女だった。再会の挨拶であれなのだ。刃更を引き止めるためなら、それこそそれ以上の事をやってもおかしくない。
……だ、抱きつくより上って……そ、そんな。
いけない。そんなの、余りにも選択肢が限られすぎている。
「や、やだ……どうしよう万理亜？」
無駄に想像力を働かせた澪が問い掛けると、万理亜もまた無駄に頼りがいのある表情で、

「澪さま、弱気になってはいけません。ここは攻める所です」
「ど……どうするの？」
その心を問う澪に、万理亜はふふふと笑って、
「任せて下さい――とっても良い方法があります！」

6

刃更と柚希の話は、結局その後も平行線のままだった。
刃更がどれだけ言っても、柚希は納得しなかったし。柚希がどれだけ説得しても、刃更は自分の考えを曲げなかった。そして喫茶店を出る頃にはすっかり陽は落ち、空には下弦の月が浮かんでいて。家路を急ぐ他の人達と同じように、刃更と柚希も歩き出した。
「……こんなもんで少しでも機嫌を直してくれれば良いんだけどな」
刃更は喫茶店で買ったお土産のケーキに視線を落としながら呟いた。
この後、家に帰ったら、間違いなく澪と万理亜への説明が待っている。説教とかも食らいそうだ。思わず憂鬱な気持ちになっていると、ふと隣にある筈の姿が消えていて、
「……ん？　どうした柚希？」

振り返ると、柚希は少し後ろで足を止めていた。そして、

「……やっぱり駄目。刃更も、迅さんも、もう里とは関係ない……刃更達だけで現魔王派と戦って勝てるとは思えない」

「かもな……でも俺達は、負けなければ良いんだ。敵の狙いは澪の命じゃなく、アイツの中に眠っている力なんだから」

それに、と刃更。

「現状が魔族同士の争いで済んでるのは、敵も事を大きくしたくないからだ。だからこそ俺と親父は、この状況におけるジョーカーになれる。確かに俺達はもう勇者の一族じゃないけど、それでも戦う力を持っているからな。恐らく敵は二の足を踏む。もし俺達に何かあれば、仲間をやられた勇者の一族が動き出すかもって考えてくれるかもしれない」

そうなれば、刃更達だけでも戦い抜ける可能性は充分にある。

「でも……」

「ああ。勿論、実際にはそんな事にはならない。里を追放された俺と親父は、その存在をなかったものにされてるからな」

里にとって刃更達はもう、仲間ではないだけでなく、守るべきこの世界の人間でもない。たとえ刃更達が死んでも、里は静観を続けるだろう。

「けどそれは別に構わない。俺達の戦いに、お前や里を巻き込むつもりはないんだ」

とにかく今は、澪を守り抜く。たとえそれが一時凌ぎの時間稼ぎにしかならなくても。その間に迅が敵の動きを止められれば良し。もしそれができなかったなら、迅と合流してまた次の手を考える。——だが。

「……それは無理」

柚希の静かな声が、刃更の言葉を否定した。何故——と刃更が問うより先に、柚希の身体が、勇者の一族が力を解放した時に出る緑のオーラを放ったのを刃更は見た。

そして、キンという甲高い音が響く。柚希がとっさに、具現化させた霊刀で居合いを放ったのだ。刃更の魔剣ブリュンヒルドと同じく、霊刀は柚希の腕を肘まで装甲に変えていた。一般人の眼には映らない霊刀によって柚希が生み出したのは、不可視の斬撃の刃だ。

それが、虚空に隠れていた『何か』を斬り裂いたのを刃更は見た。

「今のは……」

「低級のはぐれ悪魔。刃更は気付いていなかったけど、成瀬澪に魔王の力が宿ってから、少しずつその力に引かれて数が増えてきてる。今はまだ深刻なレベルじゃないけど、いずれ人に危害を加えるような奴が来るかもしれない」

柚希はスッとオーラと霊刀を収めながら、

「もし成瀬澪が存在する事で、周囲に危険が及ぶような事になったら――里はすぐに彼女を消滅対象に切り替える。多分、それはそう遠くない」

「柚希……」

思わず刃更が伸ばした手を、しかし柚希はすっと避けた。

悲しそうな瞳が、刃更を真っ向から見据える。

「もしそうなったら、私は容赦しない――たとえ刃更に恨まれる事になっても」

そして柚希はくるりと踵を返すと、そのまま去っていった。

何も言えないまま、立ち尽くす刃更を残して。

7

刃更は家に戻ると、すぐに澪と万理亜を呼び、自分と柚希との関係を説明した。

柚希が勇者の一族である事から、五年ぶりに再会した事。

そして喫茶店で澪から離れるように言われ、断った事まで、一つ一つ丁寧に話した。

別れた時の不機嫌さから聞く耳を持って貰えるか心配だったが、意外に澪も万理亜も大人しく話を聞いてくれて。そして、刃更だけが順調に話し続ける事、十数分。

「えーと……という訳で、これが喫茶店で買ってきたケーキなんだけど」

予想よりかなり早く事情を説明し終えた刃更は、恐る恐る二人の顔色を窺った。しかし、

「……」「……」

対する二人は無言のままでいて、

……き、気まずい……。

沈黙が重すぎる。まるで正体を現し、刃更に家から出てけと言ってきた時のようだ。

「あ、あのー……」

無言のプレッシャーに耐え切れず、刃更が二人に反応を求めると、

「……成る程、お話は解りました」

ようやく万理亜が、口を開いてくれた。刃更はホッと胸を撫で下ろす。

隣の澪はまだ無言のままだが、これ以上の贅沢は言うまい。

「そ、そうか？　良かった。じゃあ、早速夕飯を――」

「――いえ、その前にちょっと良いですか？」

と、刃更の言葉を遮って万理亜。

「実は、刃更さんが野中さんと二人きりで話をしている間、澪さまと私はそれはそれは不安だったんです。もしかしたら刃更さんは、野中さんに説得されて、私達を見捨ててしま

うのではないかと……ねえ、澪さま？」
「――え？　ええ、そうね」
突然話を振られると、それまで黙っていた澪が慌てて頷いた。
「悪かったよ……でも、こうしてちゃんと帰って来ただろ？」
「確かに。でも、こんな遅くまで逢引とかされてしまうと、刃更さんが彼女と通じたのではないかと、私いささか不安になってしまいます……澪さまはどうです？」
「え、ええ……そうね」
と、同意する澪。
「いや、逢引じゃなくて普通に話をしてきただけなんだけど……」
「――証拠はありますかー？」
「？　証拠って……何の？」
「決まっているじゃないですか。刃更さんが私達を裏切っていない証拠です」
ドヤ顔で無茶言うな。あるかそんなもん。
「それについては、俺を信じて貰うしかないんだが……」
「勘違いされては困ります。私達は刃更さんを信じています。ええ信じていますとも」
と、やや大袈裟な口調で万理亜。

「ただですねー、私達はもっと刃更さんの事を信じたいんです。これから一緒に戦ってゆく仲間同士、より信頼関係を深めたい。それだけなんです……ねえ、澪さま？」
「そ、そうね……その通りだわ」
本当か？　どうにも先刻から、三文芝居の臭いがするんだが。
……とはいえ。
成り行きで主従契約を結んでしまったが、信頼関係にまだ不安がある事は刃更も気になってはいた。迅がしばらく不在な以上、今後の事も考えて懸念材料は可能な限り消しておきたい。どうも澪と万理亜は、刃更に何かをして欲しいらしい。裏切っていない証拠を見せろなどという無茶な要求も、恐らくはその前フリなのだろう。
……ふむ。
こちらが何かする事で、彼女達が安心してくれるというなら悪くない話だ。ならば、
「言いたい事は何となく解った。――で？　一体どうすれば良いんだ？」
すると、万理亜の顔が笑みになった。そして、ゆっくりと刃更を手招きする。
「そう言って貰えると。それでは刃更さん、ちょっとこっちへ来て下さい」

「……何でこんな事になるんだ」

万理亜によって連れて来られた場所で、刃更は意味が解らないとばかりに呟いた。

刃更が今いるのは白い湯気が漂う空間――浴室だ。タオルだけを腰に巻いた刃更は、プラスチック製の椅子に座り、膝の上に肘を置いた体勢で頬杖をついている。すると、

「そんなのは決まってます」

湯船の方から明るい声がした。浴槽の縁に両手を置き、その上に顎を乗せてこちらを見ているのは、この状況を仕組んだ万理亜だ。

「こちらの世界で信頼関係を深めるといったら、裸のお付き合いしかありません」

「それは同性同士の話だ。男女で入ってどうする」

異性同士で裸の付き合いをしてたら、ただのエロシチュエーションだろうが。

「良いじゃないですか。狭い密室空間にほぼ裸――同じ恥ずかしさを共有した者同士なら、嫌でも結束が固まります。同じ痛みを知れば、相手に優しくなれるものです」

「何だその傷の舐め合いみたいなの！　つーか、嫌々固まった結束じゃ意味ないだろ！」

「いいえ刃更さん。女の子の『嫌』は、『良い』の裏返しです」

それとも、と万理亜。

「よもや刃更さん、女の子とお風呂に入るのが嫌なんですか？」

「いや、そりゃ嫌って訳じゃないけどさ……」

健康な高校生男子が、嫌な筈はない。ただ、男にだって心の準備が必要な時はある。

――あの後。万理亜が刃更を連れて来たのは脱衣所だった。

そして、いきなり着ていた服を脱ぎ出して。何事かと焦る刃更に言ったのである。

「――さあ、皆で一緒にお風呂に入りましょう」と。

全く意味が解らなかった。余りにも脈絡がなさすぎて。とっさに刃更は断ろうとしたものの、「一緒に入ってくれなきゃ、刃更さんの事を信用できません」と言われ。さらには、てっきり反対すると思っていた澪までもが、脱衣所の扉の鍵を閉めてこちらの逃げ道を塞ぎ、「……お願い。一緒に入って」と言ってきて。そのまま二人に服を脱がされそうになった所で刃更は降参。一緒に入る事を了承し、仕方なく自分から服を脱いだ。

背中を向け合い、肝心な部分はタオルで隠したため裸は見られていないと思うが、それでも気恥ずかしさは半端じゃない。跳ね上がった鼓動は、浴室の熱気のせいだけではない筈だ。そして平然としている万理亜に対し、澪は刃更と同じ想いでいるのか、

「……っ」

湯船の中――万理亜の隣で、恥ずかしさに顔を朱にしている。当然の反応だった。

またバスタオルを巻いてはいるものの、大きな胸がどうしてもお湯に浮いてしまうのだ

ろう。すぐに結び目が解けそうになり、最初こそタオルを手で押さえていたが、やがて澪は諦めて浴槽の縁に胸を置いていた。それは胸のボリュームを最も強調する体勢で、

……あれは反則だろ……。

ただでさえ、女の子とお風呂という十代男子には理性が飛びそうな状況だというのに、あの胸は眼の毒すぎる。何せ刃更はもう、澪の胸の感触を知ってしまっているのだ。

――あのどこまでも柔らかく、男を夢中にする感触を。

そして唇を噛んだ恥ずかしげな表情も。ほんのりと桜色に染まった肌も。今の澪は、全てが艶っぽくて。刃更は否応なく、主従契約を結んだ時の事を思い出してしまう。そこへ、

「さて――それでは澪さま、刃更さんの背中を流してあげましょうか」

湯船の中の万理亜がとんでもない事を言い出した。

「――え？　いや別にいいよ。自分で洗えるから」

「駄目です。それでは一緒に入った意味がありません」

断ろうとする刃更に、万理亜はキッパリと言い放つ。

「勿論、刃更さんは自分で背中を洗う事はできます。ですが、そこを刃更さんには敢えて、澪さまと私に無防備な背中を晒していただくんです――それこそ、戦場で背中を預けるのと同じように。それが信頼というものです」

そして、

「澪さまや私は、そんな刃更さんの背中をしっかりと流してあげる――ただ洗うのではなく、背中を預けていただいた信頼に応えるんです。無防備な状態を晒す事は、信頼できる相手にしかできません。お風呂での裸のお付き合いというのは、ともすれば命が無防備な状態を晒し合うからこそ、信頼関係が築けるとされているんじゃないんですかー？」

「う……」

何だか尤もな事を言われ、言葉に詰まった刃更は、やがてハァと嘆息。

「……解った。それで二人が俺を信じてくれるなら、お願いするよ」

どうせ既に椅子に腰掛けている状態なのだ。了承して背中を任せると、

「う、うん……解った」

ゆっくりと湯船から澪が出て、刃更の背後へと回った。

刃更の後ろへ移動した澪は、浴室の床に乙女座りで腰を下ろした。

そしてスポンジに液体のボディソープを染み込ませると、

「そ、それじゃあ始めるわね……」

緊張した面持ちで、刃更の背中を洗い始めた。当然ながら、男の子の背中を流す事は初めての経験で。自転車で二人乗りした時も密かに思っていた事だったのだが、

……これが男の子の背中なんだ。

女の澪よりもかなり広く、何より筋肉の付き方が逞しい。かつては勇者の一族であり、今も実戦で高い戦闘能力を発揮できる刃更の身体には、あちこちに傷があった。恐らくは、修行や戦闘の過程で負傷したのだろう。傷はどれも古いものばかりだった。

そんな刃更の肉体は、澪の素人目にも解る程に鍛えられていて。これならあの巨大な魔剣で、敵を一撃の下に斬り裂いたのも納得する事ができた。

成瀬澪は改めて思う。自分は間違いなく、この人に助けられたのだと。

「……どうした？」

「えっ？　う、ううん何でもない」

不思議そうに刃更に言われ、澪は慌てて止めていた手を動かし始める。

――すると、ふと澪の視界の端に映るものがあった。それは湯船の中でこちらを見ている万理亜の表情だ。その顔は、明らかにこちらを非難するもので、

……わ、解ってるわよ……っ。

刃更が帰宅する前、万理亜から言われていた事を澪は思い出す。

それは、刃更を柚希に取られないためのアイディア——万理亜が考えた秘策だ。
——あの喫茶店で、刃更は澪を守ると強く言ってくれた。あれは刃更の本心の筈だ。
そして今も、こうして澪に無防備に背中を預けてくれている。それは刃更が澪を信頼してくれている事に他ならない。ならば、自分もそれに応えるべきだろう。
「……っ」
澪はゴクリと喉を鳴らすと、巻いていたバスタオルの結び目を解いた。もし今振り返られたらどうしよう——そう思いながら、澪は完全な裸の状態になると、己の身を刃更の背中へ寄せてゆく。最初に触れるのは、必然的に澪の躰で最も膨らんでいる部分になった。
胸だ。
「っ？　お、おいっ!?」
「——う、動かないでっ!!」
驚きの声を上げて離れようとする刃更を、澪はそれ以上の大きさの声で制止する。
「お願い、このままでいて……動いたら、百回殺しちゃうんだからね」
すっかり硬直した刃更に、澪は消え入りそうな声で告げる。
こっちだって死ぬほど恥ずかしいのだ。それでも、こうする事で刃更を柚希に取られないで済むというのなら。これ位の恥ずかしさは、どうにか我慢する事ができた。

——万理亜からは、澪の胸は刃更に対して有効な武器になると言われた。
確かに。澪の胸は同世代の女の子と比べると結構——いや、かなり大きい方だ。
学校や街でも、顔だけではなく胸に対しても男の人の視線を感じる事は多い。
その事を嬉しいと思った事は一度もなかったが、今回だけは違った。
この胸は確かに、柚希にはない澪の武器で、
……刃更……。
澪は見る。硬直した刃更の上半身が、のぼせたように真っ赤になっていた。
刃更が意識してくれている——そう思うと何故だか無性に嬉しくて。澪はボディソープのボトルを手に取ると、中身を自分の胸に多めに掛けてたっぷりと泡立てて、
「……っ」
意を決し、再び胸を押し付けると、滑らせるようにして刃更の背中を洗い始めた。
すると澪の豊かな胸は、澪の動きと、当てている刃更の背中の筋肉の窪みに合わせて、驚く程いやらしく形を変えてゆく。思わず恥ずかしさを得ていると、やがて澪の躰に変化が生じ始めた。躰の奥から徐々に湧き上がってきたのは、くすぐったいような甘い熱で、
……んっ、あ……。
ふと澪は、自分の胸の先端が張り詰めている事に気が付いた。感じてしまっているのだ。

その恥ずかしさに澪の全身がカッと熱を帯び、みるみる躰が桜色へと染まってゆく。

——だが澪は、刃更の背中から自分の胸を離さない。刃更の方が恥ずかしそうにしていたからだ。言葉は発しないもの、その身体は明らかに熱を帯びていて。間違いなく今、刃更は澪だけを意識してくれている。その事実に、澪はこの上なく幸せを覚えた。

……刃更……刃更ぁ……っ。

これも主従契約の効果なのだろうか。普通なら自分は、断じてこんなはしたない事をしたりしないのに。刃更のために——己の主のために、ここまでできる自分が誇らしくて、

「んっ……ふ、あ……んっ」

いつしか澪は刃更の身体の前に両手を回し、限界まで押し付けるようにして、夢中になって眼の前の背中に自分の胸を滑らせていた。澪が動く度に、生まれた泡がいやらしい粘着質な音を響かせる。そして澪の胸が、刃更の背中で触れていない場所がなくなった頃、

「……も、もう綺麗になったと、思うんだが……」

限界とばかりに、しどろもどろの刃更が言った。澪がとろんとした顔を上げると、

「い、いや……俺ちょっと腹減ったかなって。飯もまだだし。折角ケーキも買ったしさ」

だからそろそろ出よう——そう言おうとした刃更に、

「——ああ、大丈夫です。そんな事もあろうかと私、持って来てます刃更さんのケーキ」

一体何処から取り出したのか、万理亜がケーキの入った白い紙箱を取り出した。

そして、素早い手際で開封すると、ショートケーキを手に取って浴槽から上がり、

「さあどうぞ刃更さん……あーん」

「ま、待てっ！　風呂に入りながらケーキはどうなんだっ!?」

斬新すぎる、と悲鳴を上げた刃更が万理亜を制止しようとして、二人の手が衝突。

「あ……」

万理亜の手から落ちたケーキは刃更の肩にぶつかり、そのまま二の腕から肘へと転がり、最後は床に落下した。白い生クリームとスポンジが、べっとりと刃更の肌を汚す。

「ほ、ほら、やっぱり風呂でケーキはレベル高いって！」

だからさっさと洗い流して風呂を出よう、そうしよう、と言う刃更に、

「——いえ、待って下さい。せっかく刃更さんが買ってきてくれたケーキなんです」

と万理亜は刃更を押し留めると、刃更の横の床に座った。そして、

「な、何をする気なんだ？」

「決まってるでしょう——美味しくいただきます」

困惑する刃更に、万理亜はさらりと言って。腕に付いた生クリームを舐め始めた。
「うおおおおおぉいっ!?」
「動かないで下さい。せめて落ちなかった部分は食べてあげないとケーキに失礼です」
万理亜は平然と言って、「良い仕事してます」とぺろりと唇を舐めた。そして、
「美味しいですよ澪さま——良かったら、そこの肩に付いてる部分とかどうです？」
「え……？」
そう言われ、澪は眼の前にある刃更の肩を見た。最初にケーキが落ちたそこには、生クリームがたっぷりと付いていて。まるで吸い寄せられるかのように、澪は見つめてしまう。
「おい、澪……まさかお前まで」
刃更が何かを言っていたが、今の澪の耳には届かない。
——気が付いた時には、澪は刃更の方へ唇を寄せて舌を這わせていた。
刃更の体温を含んだ生クリームは、驚くほど甘くて。舌の上でたっぷりと味わうと、口の中に溜まっていた、とろりとした唾液と混ぜて一気に飲み込んだ。
ゴクリと喉を鳴らすと、とろりとした感覚が体内を滑り落ちてゆくのを感じる。それはまるで、躰の中をそっとくすぐられているみたいで。その心地良さに澪はブルっと躰を震わせると、やがて「ああ……」と熱い吐息を漏らした。

——そして、もう止まらない。
澪は夢中になって、刃更の生クリームを舐めてゆく。美味しかった。何より、刃更を舐めながら彼の肌に躰を押し付けると、胸もお腹も腕も、全てが先刻より感じて。
生クリームがなくなった後も、澪は刃更の身体を舐め、自分の躰を刃更へと擦り付けた。
澪の中で完全にスイッチが入り、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と何度も刃更を呼ぶ。
その時だった——刃更が突然、その場に立ち上がったのは。
「……お前らな」
東城刃更は、浴室の床に座った澪と万理亜を見下ろしながら低い声で言った。
こちらをからかっているのか、信じて試しているのかは知らないが——澪と万理亜は可愛らしい女の子であり、そして刃更は男なのだ。ただでさえ一緒に暮らしていて、彼女達を家族ではなく女の子と見てしまう事が多く、これまでそうした感情を抑え込んできたというのに。こちらの苦労を無視してこんな真似をされては、流石にもう限界だった。
怒りと共に、頭の中で理性が飛んで、
「解った……お前らがそういうつもりなら、もうどうなっても知らないからな」

そう告げるなり、刃更は澪と万理亜へと覆い被さった。

「やんっ……刃更っ、お兄ちゃ、駄目ぇ」「ば、刃更さん、お、落ち着いてっ」

二人が慌てたように焦り出すがもう遅い。刃更は澪と万理亜を組み伏せながら、残っていたケーキを全て握り潰すと、二人の躰へと塗りたくった。生クリームにチョコレート、苺のムースなどで、澪と万理亜の柔らかい胸や尻、太股を始めとする全身を汚してやると、刃更は甘く染まった彼女達の肌を舌で味わい始める。澪と万理亜が濡れた声で抵抗したが、刃更は構わなかった。むせ返るような甘い匂いが充満した浴室で、澪の胸を揉みながら万理亜の躰を舐め、万理亜の尻を摑みながら澪の全身を激しく吸ってやった。

すると最初こそ僅かに抵抗を見せたものの、程なくして二人は刃更を受け入れ、艶めいた声しか上げなくなった。当然だ。刃更は澪の主であり、万理亜は澪の配下なのだ。刃更がこうしてその気になってしまえば、二人に抵抗する権利などない。

そして——完全に表情をとろけさせた二人を床に並んで寝かせると、

「もう二度と、こんな挑発的な真似ができないように、徹底的に屈服させてやる」

刃更はゆっくりと手を伸ばし、二人を完全に自分のものにしようとして。

そして——そこで眼が覚めた。

正気を取り戻したのではない。眠っていた状態から、たった今覚醒したのだ。

場所も浴室ではなく、刃更の部屋のベッドの上で、

「え？　夢……だったの、か……？」

思わず呆然となった刃更は、やがて大きく嘆息した。

助かった。もしあれが現実だったら、刃更はとんだ鬼畜野郎になってしまっていた。

「ああ……良かった。全部夢だったんだな」

そう言って、ホッと胸を撫で下ろした時だ。

「いいえ刃更さん——途中までは現実ですよ？」

その声に刃更はギョッとなった。そして刃更は、ようやく自分が万理亜を抱き締めるようにして寝ている事に気が付く。だが、温かくて柔らかな抱き枕の感触よりも、

「え……？　今の、途中までは現実だったのか？」

恐る恐る問うこちらに、万理亜はふふっと笑った。

「忘れちゃいました？　びっくりしましたよー。刃更さんてば、急に立ち上がったと思ったら、凄い勢いで鼻血噴きながら倒れたんです。もし警察の鑑識がウチのお風呂に入ったら、ルミノール反応とかバンバン出ると思います」

「……そ、そうか」

途中までは現実だった事は、それはそれで軽く頭が痛くなるが、刃更が澪や万理亜に対

して何かをやらかした訳ではないらしい。どうやら最悪の事態だけは回避されたようだ。
「あの――ところで刃更さん」
改まった口調で万理亜が言った。
「そろそろ私のお尻から手を離していただいても良いですかね」
「へ？　……――うわぁぁっ!?」
刃更の両手は万理亜の背中へと回され、可愛らしい尻を摑んでいた。しかも慌てて手を離そうとした所で、自分の手が万理亜の下着の内側で直接尻を触っていた事に気が付く。刃更は慌ててショーツから手を抜くと、飛び退るようにベッドの上で距離を取った。
「わ、悪いっ……」
「いえ、刃更さんのベッドへ潜り込んだのは私ですし」
焦る刃更に、万理亜はそう言ってから悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「しかし、寝ている時に無意識に女の子の下着の中に手を入れてくるなんて……刃更さんがこんなに積極的とは驚きました。でもまあ、あんな夢を見ちゃう位ですもんね」
「え……先刻のあれって、お前が見せた夢じゃないの？」
サキュバスは、男性に淫夢を見せて快楽の虜にしてしまうとされる女性の夢魔だ。
どうやら内容についても知っていたみたいだし、自分からベッドへ潜り込んだとも言っていた。てっきり万理亜が魔法で見せた夢だとばかり思っていたのだが、

「まさか。あれは刃更さんがご自分で見た夢です。私は、ちょっと覗かせていただいただけですよー。大体、もし夢魔法で刃更さんをどうこうするなら、刃更さんが澪さまや私を屈服させるのではなく、私と澪さまで刃更さんの事を骨抜きにして、私達の言う事を何でも聞くようにすると思いませんか？」
「うっ……確かに」
「いやいや、私も驚きました。夢は願望や深層心理が表れるものですが、まさか刃更さんがあんな夢を見るだなんて……案外、ドSな鬼畜野郎の素質があるかもですね」
「あってたまるか、そんな素質……」
想像もしたくない。刃更はげんなりとしながら、ふと、
「……そういや、澪はどうしたんだ？」
「倒れた刃更さんの事を心配していましたが、流石にもうお休みになってます」
こちらの問い掛けに、さらりと万理亜が教えてくる。ふと壁の時計を見れば、既に深夜の二時を回っていた。どうやら風呂場で倒れてから、かなりの時間が経っているらしい。
「そうか……なら丁度良いかもな」
先程のはどこまでが現実で、どこからが夢だったのかは気になるが、刃更はそれを一旦

置いておく事にした。澪に聞かれる事なく、万理亜と話しておきたい事があったからだ。
「万理亜……ちょっと相談したい事があるんだ」
「？　どうしたんです？」
キョトンと問い返してくる万理亜に、刃更はゆっくりと口を開いた。
それは帰宅してすぐ、二人に柚希との事情や経緯を話した時には伏せていた話。
澪には聞かせたくない話だ。万理亜へ語りながら、いつしか刃更は拳を握り締めていた。
別れる際に、柚希が言った言葉を思い出す。
……絶対にさせてたまるか。
敵は、澪の中に眠る魔王の力を狙う魔族だけで充分だ。
柚希まで——勇者の一族まで、澪を襲ってくるような事態になどさせるものか。

8

聖ヶ坂学園の校内に、四時限目終了のチャイムが鳴り響いた。
窓際にある自分の席で、澪はやれやれと嘆息する。
……これで昼休み。

あともう少しだ、と自分の心に言い聞かせる。金曜の今日を乗り切れば、明日からの土日は学校が休みになる。そう思うと、気持ちが少し楽になった。
——主従契約の呪いは、主に対する後ろめたい感情によって発生する。ところがこの発生条件、澪にとってはかなり不利だった。刃更が本気で澪を守ろうとしてくれている事は知っているものの、それでも澪はまだどこか刃更に対して素直になれないところがある。
また先日のお風呂では、刃更の前で自分でも信じられないほど乱れてしまった事もあり。その恥ずかしさも加わって、時おり反射的に天邪鬼な態度を取ってしまう事があった。
……それでも。
家に居る時はまだ良い。三人とも事情を知っているため、なるべく呪いが発動しない事を第一に考えて行動できるからだ。
——ところが、事情を知らない周囲の存在がある学校ではそうはいかない。
下手に不自然だったりぎこちない感じになれば、周りに訝しがられてしまう。理想は、学校にいる間は余り関わらないようにする事なのだが、かといって不自然に避けたりそっけない態度を取ったりすると、どうしても多少後ろめたい気持ちになってしまって。
そう思った瞬間には——もう呪いが発動してしまうのだ。首に浮かび上がる痣は魔法によるものなので普通の人間には見えないが、それでもこの数日間で何度トイレや保健室

に駆け込んだか解らない。辛うじて救いがあるとすれば、素直になれない程度なら余り強く呪いが発動しない事だろう。大人しく波が過ぎ去るのを待てば、数分程で回復できる。

「――お～いバサっち、飯行こうぜ飯」

ふと視線の先で、クラスメイトの滝川が刃更へ近付いてゆくのが見えた。

「ああ、ちょっと待ってくれ」

刃更は応答を返すと、教科書とノートを机の中に仕舞って立ち上がった。

「今日はどうする？」「食堂にしようぜ。週末だからいつもよりA定が豪華だしな」

自然な会話をしながら、刃更と滝川は教室を出て行った。

転校初日に、刃更はクラスどころか半ば学校中の男子を敵に回す事になった。その責任の一端は澪にもあるので、少し気になっていたのだが。どうやら無事友達もできたようだ。

まあ――あの呼ばれ方はどうかと思うが。

……問題は。

澪は、刃更を孤立させかけたもう一方の原因へと視線を移す。澪と同じ、窓際の列の一番前の席。そこに座る少女が、教室を出て行く刃更の背中を見つめていた。

冷たい空気を身にまとう美しい少女。刃更の幼馴染にして勇者の一族、野中柚希だ。

刃更の背中を切ない瞳で見ていた柚希は、ふと澪の視線に気付き、

「――――」

表情を感情の見えない冷たいものにして、そのまま自分も教室を出て行った。

……この間とは真逆ね。

刃更の転校当日、再会を果たしたと同時に柚希は刃更へと抱き付いた。周囲が驚くような大胆な行動。そんな真似をしても柚希は平然としていた。だから――てっきり次の日からも、刃更に色々とちょっかいを掛けてくると思っていたのだが。予想に反して翌日からは、刃更と関わろうとはしなかった。席こそ隣だが、会話もほとんどない。

――あの日、喫茶店で行なわれた刃更と柚希の話は物別れに終わったと聞いている。恐らくそれが原因なのだろう。突然の変化に、事情を知らない周囲は混乱していた。

……あたしのせい、よね。

澪を守ろうとする刃更と、関わらないべきという柚希。仲の良かった幼馴染の二人の意見は真っ向から対立し、その果てに今の刃更と柚希の状況がある。

でも。席が後ろにある関係で、見えてしまうのだ。話しかける事はなくても。一見よそよそしく見えても。柚希は刃更の事を想っていた。ふとした瞬間、彼の事を見つめていた。

そして――それは刃更も同じだった。刃更もまた、どこか柚希の事を気に掛けていて。

……何でなのかな。

そんな二人を見ていると、何だか胸の辺りが切なくなって。
苦しかった。澪がふっと視線を机に落としていると、
「成瀬さ～ん、お昼行こー」「早くしないと、席埋まっちゃうよー」
明るい声が、こちらを呼んだ。だから、
「……うん。今行く」
澪はそれ以上は考えるのを止め、ゆっくりと席を立った。

結局この日は、一度も呪いが発動しないまま放課後になった。
澪がホッと胸を撫で下ろしていると、すぐに刃更が鞄を持ってこちらへやって来る。
「さてと、帰ろうぜ」「う、うん……」
澪が頷き、席を立った時だった。
「――野中、それに東城、ちょっと良いか？」
担任の坂崎が二人を呼び止めた。「何です先生？」と振り返った刃更に、
「悪いんだが二人に、夏休みの課題の整理を手伝って欲しいんだ」
と、爽やかな笑顔で坂崎。

「な、何で刃更まで。そういうのは、委員長の野中……さんの仕事なんじゃ」
異論を唱える澪に、
「まあ確かにそうなんだが、東城は転校してきた関係で課題が免除されているからな。ここで雑用を手伝ってくれれば、少しでも他の生徒と公平性が保てるだろう」
と坂崎。刃更は頭を掻きながら、
「あー……それはまあ、そうかもしれないですね」
「すまないな。二人でやってくれれば、暗くなる前には終わるから」
それじゃあ後で職員室に来てくれ――そう言って、坂崎は教室を出て行った。
「残念だったなバサっち～。一人だけ楽できると思ったら大間違いだぜ」
「別に、夏休みの課題をやりたくなくて転校した訳じゃないんだけどな」
からかうように言ってくる滝川に、やれやれと刃更。そしてこちらを見て、
「……どうする？　終わるまで待ってるか？」
この数日、万理亜は学校には迎えに来ず、代わりに街に敵が潜んでいないか警戒して回るようになっていた。そのため、下校時は澪と刃更の二人で帰っている。まだ明るいし、下校時は人も多いが、それでも一人で帰るのは念のため避けた方が良いだろう。携帯で万理亜を呼ぶ事もできるが、急いで帰らなければいけない用事がある訳ではない。

だから。じゃあ待ってるね——そう言おうとした時だった。
「……別に私一人で大丈夫」
抑揚のない声で、そう言ったのは柚希だ。
「これは本来、私の仕事だから。刃更が手伝う必要はない」
澪も同感だった。こういった雑務はクラス委員である柚希の仕事だ。だが、
「先生が言ってただろ。二人でやれば暗くなる前に帰れるって。でも逆に言えば、二人でやらなきゃ遅くなるって事だ。もう引き受けたんだし、ちゃんと俺も手伝うよ」
だから、
「——どうする澪？　終わるまで待ってるか、それとも……」
万理亜を呼んで、先に二人で帰っているか。
刃更の言っている事におかしな事はない。でも——その二択は、澪の心にどこか暗い感情を生んだ。昼休み、刃更と柚希を見てモヤモヤした時の気持ちが蘇ってくる。
だって。どちらを選んでも、刃更が柚希を手伝う事は変わらないのだ。
終わるのを待つとしたら、自分は柚希の手伝いの後回しにされるという事で。万理亜と先に帰るという事は、刃更が自分よりも柚希との手伝いを選ぶように思えて嫌だった。
「——澪？」

どうしたのかとこちらを窺っている刃更を、澪は見た。
本来なら二つしかない選択肢。そんな中、もし自分が一人で帰ると言い出したら。
刃更は、柚希ではなく自分を選んで——
……違う！　何であたし、こんな……っ。
駄目だ。自分は今、良くない考えをしている。
これではまるで——刃更の事を信じていないみたいではないか。そう思った瞬間、
「あっ——……」
主従契約の呪いが発動した。嫉妬心による自己嫌悪。それは、最も後ろめたい感情の一つで。身体の奥に生まれた熱を感じ——澪はそれ以上立っていられなくなった。
そのままふらりと倒れそうになり、
「まさか——っと！」
こちらの様子に気付いた刃更が、慌てて澪の身体を支えた。それだけで、
「——っ」
澪はピクンと身体を震わせる。途端に呼吸が荒くなり、
「お、おい大丈夫なのか成瀬……？　また貧血か何かか？」
「ああ——悪い、俺ちょっとコイツを保健室まで運んでくる」

刃更は滝川に応えると、ひょいっと澪を抱き上げ、こちらにだけ聞こえる声で、
「……少しだけ我慢しろよ」
そう囁いてから、一気に教室を出て走り出した。

刃更は澪を保健室に連れて行ったが、どうやら養護教諭は不在のようだった。
保健委員もおらず、ベッドも全て空いている。完全な無人だ。
刃更はむしろ好都合とばかりに、澪を三台あるベッドの一つへと寝かせた。
「……大丈夫か？」
白のカーテンで仕切られたベッドで、澪は辛そうにしながら頷きだけを返してくる。
……やれやれ。
何かの拍子に呪いが発動してしまったのだろうが、こうなると効果が消えるまで数分間我慢するしかない。だが、
「あ……んっ、ふ……う……んんっ……っ」
湧き上がる感覚を堪えながら、澪は甘い声を押し殺そうと唇を噛んでいた。顔は赤くなり、瞳はとろんとして潤んでいる。制服の上からでも解る大きな胸が、何度も上下して、

……これは……っ。
いけない。このまま見ていたら、自分は激しく良くない事を考えてしまう。
「……えっと、俺ちょっと外に出てるよ。ここに居ると、お前も恥ずかしいだろうし」
そう言ってくるりと背中を向けると、
「……っ……お願、い……一人にしちゃ……やぁ……」
「いや、でも……っ。……あー解った、傍に居る。居るから、そんな眼で見ないでくれ」
変な気持ちになるだろ。どうやら、通常より強めに呪いが出ているらしい。だが、
「けど悪い……ここに居るから、せめて後ろだけ向かせてくれ」
今の澪を見ていたら、うっかり理性が飛んでしまいそうだ。
澪は何も言わず、刃更の制服――左手の袖口をキュッと摑んできた。
それを承諾のサインと受け取った刃更は、ベッドの脇の椅子に後ろ向きに腰掛けた。
二人だけの保健室に、澪の艶っぽい吐息だけが響いて。
そして。程なく澪の呼吸は穏やかなものになった。呪いの効果が消えてきたらしい。
「……どうだ？　大丈夫そうか？」
振り返ると、澪は摑んでいたこちらの袖を離し、自分の額に手の甲を当てながら、
「ん……っ、ちょっと、落ち着いてきた……かも」

そう言って、ゆっくりと身体を起こした。
「それにしても、今回は一体どうしたんだ……？」
先程の教室での会話を思い出してみたが、特に澪がこちらに対して何か後ろめたい事を思うような部分があったとは思えない。主従契約の呪いは、刃更に対してよからぬ事を思わない限りは発動しない筈だ。だが、もし呪いの発動条件が他にもあるとしたら、
……何か対策を考えてやらないと。
今回みたいに刃更が傍に居ればフォローのしようもあるが、澪が一人の時や、それこそ戦闘の最中などに呪いが発動しては、刃更や万理亜が一緒に居ても助けてやれない。
だが刃更の問い掛けに、
「……べ、別に。何か急にアンタの事がムカついて……それだけ」
そう言って、澪はどこか拗ねたように視線を逸らした。
「何だそりゃ……」
刃更は思わず脱力する。そんなのはもう、どうしてやりようもない。
理由が理不尽すぎる。そりゃ呪いも強く発動するだろう。刃更は嘆息を一つして、
「落ち着いたんなら、もう大丈夫だよな……？　だったら俺、先に戻るぞ」
緊急事態だったため、坂崎に頼まれていた件を放ってきてしまった。

「えっ――……？」
途端に澪は、驚いた顔になった。そして、
「……行っちゃうの？」
不安に揺れた澪の瞳が、刃更を見上げてくる。
思わぬ上目遣いに、刃更は「えっと」と頬を掻きながら、
「いや……まあ、先生に頼まれた件……柚希一人にやらせる訳にはいかないし」
それに、
「取り敢えず呪いは落ち着いたんだろ？　だったら――」
「……まだだもん」
ポツリと澪が呟いた。
「――へ？　そうなの？」
だもん、って……つい先刻、ちょっと落ち着いたとか言わなかったか？
あ、でも確かにまだ首に痣が出てるな。もう結構、時間は経ってる筈なんだが。
「……ねえ刃更。あたし……まだ苦しいよ？」
こちらの様子を窺うように、再び制服の袖をクイクイと引っ張られる。
「いや……お前、そうは言ってもだな……」

刃更は思わず、顔を赤くして言葉を濁した。澪が何を言っているのか解ったからだ。
――実は。呪いの効果を、すぐに消す方法が一つだけあった。
主従契約の呪いは、配下側の主側への精神的な裏切りによって発動する。
ならば、強引に服従の心を思い出させれば――屈服させてしまえば呪いは治まる。
要は、最初に契約を拒んでしまった澪を助けた時と同じようにしてやれば良いのだ。
「でも、お前だってもうあんなのは嫌だろ？　それも、こんな学校の保健室とかで……」
「……うん。で、でも……刃更が……お兄ちゃんがしたいなら、あたし……良いよ？」
「え――？」
思わず刃更は訊き返した。苦しいのは澪なのだから、自分は関係ないだろうと。
そう言おうとしたのに、澪は濡れた瞳で、刃更を「お兄ちゃん」と呼んだ。
それは、澪が刃更にある事を望む時の合図で。刃更はそれ以上、何も言えなくなる。
てっきり、澪は視線を逸らすと思っていた。現に頬は赤い。恥ずかしがっているのだ。
自分が何を言ったのかを、澪はきちんと理解している。
でも――それでも澪は刃更から眼を逸らさなかった。吸い込まれそうな瞳。気が付けば、刃更はゆっくりと手を伸ばしていた。スッと澪の頬に触れると、
「……んっ」

澪はピクンと反応し、眼を閉じた。だが、そのまま刃更の手の平に預けるように、自分の頬を擦り寄せてくる。手の平を通して澪の熱を感じていると、そっと澪が眼を開けた。
言葉はなくても、その瞳は雄弁で。だからこちらも覚悟を決める。
「……解った」
刃更はそれだけを言うと、シュルっと澪の制服のリボンを解いた。
「あ……」
恥ずかしさの中に、少しだけ嬉しそうな声を含ませた澪に、
「――すぐに楽にしてやるよ」
そう言って、刃更は澪の身体へと手を伸ばした。
そして指先が触れると同時――いきなり保健室の扉がガラっと開いた。
「「――――っ!?」」
慌てて飛び退き、刃更と澪が距離を取ると、
「……ん？　何をしてるんだお前ら？」
白衣の女性が、入口の所からこちらを見た。そして、ふと澪に気付くと、
「何だ成瀬……また例の貧血か？」
「は、はい、長谷川先生……」

慌てて胸元を隠しながら澪が頷くと、女性はこちらへやって来た。どうやら彼女が養護教諭らしい。保健室の場所は知っていたものの、利用した事のない刃更は初対面なのだが、……凄い美人だな。

顔つきといい、スタイルといい、雰囲気といい。何もかもが迫力の美女だった。胸などは澪よりもさらに大きく、男っぽい口調ながらも色っぽい声とマッチして、彼女の女らしさと艶めくような色気を際立たせる。白衣を翻しながら歩く姿も、実に様になっていた。

「……付き添いか？　保健委員ではないようだが」

すると、長谷川と呼ばれた養護教諭の遠慮のない視線が刃更を射貫いた。

「いや俺は……」「先生、彼は……」

とっさに刃更と澪が声をハモらせると、

「知っている。東城だろう？　ついこないだ転校してきた」

「俺の事を知ってるんですか？」

軽く驚く刃更に、長谷川は「ああ」と頷いてから澪を顎で指して、

「コイツや、お前らと同じクラスの野中は随分と男子に人気があるからな……お前の噂は色々と聞いている。転校初日から、学校中の男子を敵に回した気分はどうだ色男」

「やっぱ、そういう噂が立ってるんですね……」

これでは滝川以外に友人を作る道のりは遠そうだ。すると長谷川はふっと笑って、

「気を付けるんだな。本人が望もうと望むまいと、人より目立てば当然それだけ眼を付けられるものだ。そして、それは必ずしも好意的なものとは限らない。人は自分と大きく異なる者や、自分にないものを持っている者を嫌う。しかも生理的な同族嫌悪と違い、嫉妬や恐怖といった本能的な感情は振り幅があるからな。単純な反面、こじれると厄介だぞ」

「……ですね」

長谷川の言葉に、刃更は重い口調で頷いた。彼女が言った事は刃更自身、過去の経験で痛い程理解している。そして、長谷川の言葉は今の澪にも当て嵌まる。

父親である先代魔王の力を受け継いだ事で、今の魔王から狙われているのだから。

「……その気はないのに敵を作ってしまったら、どうすれば良いんですかね？」

自嘲にも似た苦い笑みと共に言うと、長谷川は「簡単だ」とあっさり言った。

「敵を作ってしまったら、それ以上に味方を増やせば良い。そうすれば戦って勝つ事もできるし、自然と相手から戦いを回避してくれるようにもなる」

「いや……でも、学校中の男子が敵らしいんですけど」

「味方も敵も問題なのは『数』じゃない。重要なのは『質』だ」

「まあ、それはそうなんでしょうけど……」

現状、刃更と口を利いてくれるのは滝川だけだ。たとえ質が良かったとしても、流石にこの圧倒的な数量差はカバーしきれないだろう。

……まあこっちは良いにしても。

問題なのは、澪を取り巻く状況の方だ。柚希も忠告してきた事だが、自分達だけで現魔王派と渡り合う事は難しい。迅の話では、澪が狙われないようにできる可能性はあるらしいが、しかし必ずしもそれが上手くいくとは限らない。

量よりも質。それは確かに真実なのだろうが、気休めにしかならない場合もある。

今はまだ敵も、勇者の一族に介入されないように派手な真似を控えているから、どうにか対抗できている。だが、もし後先考えずに、それこそ数に物を言わせるような強引な手段に出られたら、とてもじゃないが対抗しきれない。自分は――彼女を守ると決めたのに。

「――『質』の意味を勘違いするなよ」

こちらの迷いを見透かしたような声がした。顔を上げると、

「解らないか？『数』と『質』を別々にして天秤に掛けるなという事だ」

そう言って長谷川は笑った。だが、そこでふと校内放送が入った。

『長谷川先生、至急職員室までお越し下さい。繰り返します――』

「……っと、そうだったな」

長谷川はやれやれと言うと、ベッドとは反対側の壁際にある自分のデスクへと向かった。

そして引き出しから書類を取り出すと、

「悪いが、これからちょっと会議で外へ出なければいけなくてな。成瀬、お前の面倒は見てやれないが、もうちょっと休みたいなら寝てて構わないぞ――そら東城」

そう言って、こちらに銀色の何かを放ってくる。とっさに受け取った刃更に、

「この保健室の鍵だ。職員室には話を通しておく。後で施錠して返してくれれば良い」

そう言って、長谷川は来た時と同じく颯爽と部屋を出て行く。

そして、扉の所でふと「ああ、それと……」と立ち止まり、

「転入したてで知らないかもしれないから教えておくが――東城、私は馬鹿が嫌いだ。勉強ができない位なら構わんが、馬鹿の面倒を見るのは好きじゃない。年頃のお前らに盛るなとは言わんが、そのベッドは病人用だ。やるならせめて私ら教師に気付かれない場所でやれ。校舎裏でも体育倉庫でも、その手のスポットは幾らでもあるだろう」

「「なっ――」」

誤魔化せたと思っていたが、ちゃんとバレていた。思わず顔を赤くした刃更と澪に、

「教師は神様じゃない。やれる事とやれない事がある。だがな、もしお前ら生徒が最低限の校則を守れるなら、こっちだってお前らを守ってやれる。青春時代に色々とはしゃぎた

いのは解るが……私達がお前らを守れなくなるような事は仕出かすなよ」
そう言って、今度こそ長谷川は保健室を出て行った。
「……」「……」
しばし刃更と澪が呆然としていると、ふと刃更の携帯電話が鳴った。
着信画面に表示された相手は滝川だ。通話ボタンを押すと、
『よおバサッち、まだ保健室かー？』
明るい声が、耳元の受話口を通して聞こえてくる。刃更が「ああ」と頷きを返すと、
『そうなのか？　放送で長谷川が呼ばれてたけど、平気なのかよ？』
「それなら大丈夫だ。先生がここの鍵を貸してくれたから」
『そっか、なら良いや……あ、坂崎の件なら心配すんな。俺と野中でやっておくからよ』
「待てよ、あれは俺が――」
と刃更が言い掛けたところで、ふと澪と眼が合った。そして、
「――――」
ふっと澪が視線を伏せるのを刃更は見た。それは何かを諦めた表情で。
だから、刃更は澪に背中を向けて、
「……いや。ごめん、やっぱ頼んでいいか？」

「――え？」
驚きを含んだ声を背中で聞きながら、刃更は電話向こうの滝川に告げる。
「悪いな……今度、お前の食いたいもの何でも奢るからさ」
返って来た軽い承諾の声に、
「助かるよ。柚希と先生にも済まないって言っておいてくれ……ああ、よろしく」
そう言って通話を終えた。
「……行かなくて良いの？」
まだどこか信じられない声で言う澪に、刃更は「仕方ないだろ」と振り返って、
「まだ苦しいって言うんだから。かといって先刻の続きみたいなのはもう無理だし、でも今のお前を放って行く訳にもいかないからな。だったら、お前が治るまで付き合うさ」
「……本当に？」
不安そうに訊いてくる澪に、
「ああ。先生から、こうして鍵も借りたしな。折角だから、ちゃんと休んでいこうぜ」
ただでさえ敵が来ないか神経を遣ってるというのに、この所は呪いが発動しないように気も張っていた。疲れが溜まっていたんだろう。だから症状も強く出たりしたのだ。
「ほら、横になれよ……万理亜には、少し帰りが遅くなるって電話を入れておくから」

「う、うん……」
こちらの言葉に従って、澪はベッドに横になった。その上に布団を掛けてやりながら、
「ちゃんと傍にいるから、もう理由もなくムカつかないでくれよ」
「わ、解ってるわよ！」
羽更が告げると、澪はカッと顔を赤くして頭まで布団を被った。

9

保健室の空気は独特だ。柔らかくて心地の良い、校内で最も落ち着いた雰囲気。
ベッドで横になっていた澪の傍で、いつしか羽更も微睡んでいて、
「……ん」
羽更がふと眼を覚ますと、既に陽は落ちて夜になっていた。時刻を確認すると、
「八時か……随分寝ちまったな」
羽更は頬を掻いた。しかし、見ればベッドの澪はまだ静かな寝息を立てていて、
……もうちょっと位なら良いか。
長谷川は職員室に話を通しておいてくれると言っていた。あれから特に先生がこちらの様子を見に来ていないという事は、まだ校内にいても問題ないのだろう。
だから羽更は、澪を起こさないようにそっと保健室を出た。そして携帯電話を取り出し、万理亜をコールすると、帰る時間が遅れる事を告げる。すると、
『――了解です。それなら、もう少ししたら迎えに行きますねー』
と、一時間後に迎えに来てくれる事になった。
「さて、と……」
羽更は寝ていて凝った首をコキコキと鳴らすと、ゆっくりと廊下を歩き出した。
夏の夜の校舎内――生温い空気の中、向かったのは購買だ。人間は、寝ているだけでも体内の水分を消費する。特にこの時季は、熱中症など脱水症状を起こしやすい。羽更も喉が渇いたし、澪が起きた時のためにも何か飲み物を買っておいてやる事にした。
到着した購買は、とっくに営業時間外。当然のように無人だった。だが灯りはある。隅に設置されている自動販売機のライトが、ぼんやりと暗い購買を照らしていて、
「大丈夫そうだな……」
夜遅くまでいる教職員が買えるようにする目的もあるのだろう。稼動していた自販機で、羽更はスポーツドリンクを二本購入。そのまま自分の分に口を付けようとした時だった。
「――お？　何だバサッちか？」

ふと背後から、渾名で呼ばれた。この呼び方で刃更を呼ぶ者は一人しかいない。だから、
「滝川……お前、まだ校内に居たのか？」
刃更が振り返ると、「そっちこそ」と言って購買の中へ滝川が入ってくる。
「坂崎に頼まれた件をやっててよー。つい先刻、解放されたところだ」
「まさか、今まで掛かったのか？」
もしそれが本当なら、四時間以上も拘束されていた事になる。
二人でやれば暗くなる前に終わると、坂崎は言っていたのだが、
「いや、作業自体は結構前に終わってたんだ。何せ野中は、ひたすら無言で作業してたからな。余りに沈黙が気まずくて、代わりに手伝うって言ったの軽く後悔しちまった位だ」
と滝川。
「ただ作業が終わったら、坂崎が出前を取ってくれるって言ってな。遠慮なくたっぷり頼んだら、これがまた予想以上に量が多くてよー。雷々軒恐るべしだぜ。んで、腹がこなれるまでちょっと休んでたって訳だ」
成る程、そういう事だったのか。刃更は苦笑して、
「悪かったな滝川。お陰で助かったよ」
「んにゃ……そういや成瀬、あの後大丈夫だったのか？」

「まあ、何とかな……今もまだ保健室で寝てるけど、もうすっかり落ち着いてるよ」
「そいつは良かった。いきなり倒れそうになったから、かなりビックリしたぜ」
しかし、と滝川。
「顔とか赤くして、ちょっと恥ずかしそうだったな」
あー、と刃更は言葉を濁した。
顔が赤かったのは催淫効果のせいだろうが、恥ずかしかったのも間違いないだろう。
とはいえ、流石にその辺りの話を滝川に言う訳にはいかない。
「とにかくサンキューな。約束通り、今度奢るよ――雷々軒で良いか？」
「うぷっ……それだけは断る」
と、顔を顰めた滝川がふと、
「――そういやバサっち、野中と会ったか？」
「柚希……？　いや、会ってないけど」
滝川が今まで校内に残っていたのは、出前を食べ過ぎたからだ。柚希までそんな事になる筈がない。よって、てっきり先に帰っていると思っていたのだが、
「あれー？　おっかしいなぁ……お前らの様子を見に行ったみたいだったんだけどな」
「そうなのか？」

少なくとも、刃更が保健室にいる間は柚希は来ていなかった……と思う。
寝ている自分達に遠慮して、声を掛けずに帰った可能性もなくはないが——いや、幾ら刃更にブランクがあるとはいえ、流石に誰かが部屋に入ってきても熟睡したままでいる程は鈍ってはいない。だとしたら、ここへ来る途中で擦れ違ったのだろうか。
だが、澪と柚希——彼女らを二人だけにするのは、今はまだ良くない気がする。
「悪い滝川。俺、そろそろ戻るよ——」
そう言って歩き出そうとした時——不意に周囲が夜の闇で見えなくなった。
自動販売機のライトが、いきなり消えたのだ。
「——うおっ？　何だ、停電か？」
困惑の声を出した滝川の隣で、刃更は表情を厳しいものにした。まさか——という想いは、しかし現実のものになる。微かに灯る非常灯が、闇の中に浮かび上がる五つの影を刃更に見せた。その中には、明らかに人とは違う獣のようなシルエットもあった。
魔族だ。
「——————っ」
まさか、敵が学校などという騒ぎになりやすい場所で襲ってくるとは。しかも、
「な、何だよコイツら……」

呆然を思わせる滝川の声を、刃更は聞いた。そう――敵は一般人である滝川にも姿を晒していた。だが、その事実はより刃更を焦らせる。敵がこんな強引な手段に出たという事は、今の状況にそうするだけの価値があると踏んだからに他ならない。

何せ――澪は今、保健室にたった一人で眠っているのだ。

……どうするっ!?

敵の狙いは間違いなく澪だ。眼の前の敵は、そのために刃更を足止めに来ている。滝川に自分達の姿を見せたのは、跡形もなく殺してしまえばそれで済むから。穏健派と違い、普通の魔族にとっては人間など生きているだけのゴミにすぎないのだ。

――無論、刃更の魔剣ブリュンヒルドは一般人の眼には見えない。

たとえ今、具現化しても滝川には解らないだろう。だが、もしそれで眼の前で敵を倒せば、『影』が消滅する瞬間を滝川に見られてしまう。そうなれば、こちらの事情に滝川を巻き込む事になる。そして彼は、刃更に訊ねる筈だ。これは一体、何なのだ――と。

後で万理亜に、魔法で記憶操作を頼む事はできる。だが、彼女がここへ来るのはまだ少し先。今は一刻も早く澪の下へ行かないとマズイが、混乱した状態の滝川を一人にするのも危険すぎる。敵は事を大きくしないよう、積極的に滝川をどうこうする事はないと思うが、めまぐるしく状況が変わる戦場で、不慮の事態が起こらないとは言い切れない。

……ならどうする？

その答えを、刃更は即座に出した。そして、

「――悪い滝川」「へ……？」

キョトンとした声を出した滝川――その胴に、刃更は不意打ちで肘を叩き込んだ。

当て身だ。乱暴な方法だが、恐らくこれが一番危険が少なく、そして手っ取り早い。

滝川は「う」と短く呻くと、意識を失った。そして刃更が、床に滝川を寝かせるのと、

『――――』

五体の敵が、刃更に襲い掛かって来たのは同時だった。

――だが東城刃更は焦らなかった。即座にブリュンヒルドを具現化。

そのまま縦に一閃し、一番前に居た人型の『影』を両断する。そして、

「悪いがそっちの時間稼ぎには付き合うつもりはない――そこを通して貰うぞ」

そう言い放つと同時、一気に前へと向かって駆け出した。

第4章　君の悲しみがゼロになるまで

1

刃更が敵との戦闘を開始した頃――成瀬澪は、既に保健室から移動していた。
彼女が今居るのは、校内で最も空に近い場所。
屋上である。青白い月光の下で、澪は一人の少女と対峙していた。
それはクラスメイトにして、澪を監視する勇者の一族――野中柚希だ。
「……それで、話って？」
夜の保健室で澪が眼を覚ました時。席を外しているのか、刃更は不在で。しばらくして、保健室の扉を開けて中へと入ってきたのは、刃更ではなく柚希だった。そして、
『……貴女に話がある』
冷たい表情で告げてきた柚希の後に付いて、澪はこの屋上へとやって来ていた。
澪が発した問い掛けに、柚希は静かに――しかし、はっきりとした声で、
「刃更から聞いている筈……私が、この学校に居る理由を」
「そうね、確かにアイツから聞いているわ」
と澪。
「アンタが何者で――そしてアイツとどういう関係なのかもね」
先代魔王の力を受け継いだ澪と、勇者の一族である柚希。本来なら、自分達は互いに宿敵ともいうべき関係にある。それでも、これまでは互いにその事への言及を避けてきた。
現魔王への敵討ちを目標とする澪にとっては、柚希と衝突して勇者の一族まで敵に回すのは得策ではないと思っていたし、柚希にしても監視対象である澪に対し、己の任務である監視役という立場を貫いていたからだろう。だがそんなものは、新学期が始まった一週間前――刃更がこの学校へ転入してきた時から解っていた事だ。
「で？　アンタの事情をあたしが知っているから、それがどうしたっていうの？」
暗に「本題に入れ」と告げると、柚希はこちらを真っ直ぐに見据えて、
「――刃更から離れて。貴女と居ると刃更が苦しむ事になる……だから刃更から離れて」
「……やっぱり、そういう事」

澪は知っている。柚希にとって刃更は単なる幼馴染ではなく、それ以上の感情を抱いている存在なのだと。柚希の立場からしてみれば、澪に対する主張は尤もなもので。

気持ちは解る。だが……それでも、

「――嫌よ」

キッパリと拒絶した澪に、柚希はスッと眼を細めた。だが、澪は一歩も引かない。

「アンタに言われるまでもなく、その事については散々悩んだし、どうするべきかも沢山考えたわよ。一度はアイツを家から追い出そうともしたわ。アイツをこれ以上、あたしの都合や危険に巻き込まないためにね」

そう。最初は澪も、巻き込むつもりなんてなかった。

「……でもね、あたしの事情を知って、それでもアイツはあたしを守るって言ってくれたの。迷惑じゃないって。家族だからって。だから、あたしも考えたわ。そんな風に言ってくれたアイツに、あたしがすべき事って何なのかなって」

そして、結論を出した。

「アイツがあたしを守ろうとしてくれるなら。巻き込みたくないけど、それでも一緒に戦ってくれるなら――あたしはせめて、そんなアイツの想いを一ミリだって無駄にしない」

だって、

「それが今のあたしにできる、アイツの想いに応える事だって思うから」

ここで柚希の言葉に従って刃更と離れたら、それこそ彼に対する裏切りだろう。

決して譲れぬ想いを込めて、澪は自分の想いを口にした。それに対し、

「……そう」

柚希がそれだけを呟くと同時。

キンという甲高い音と共に、衝撃波が澪を襲った。しかし――澪にぶつかる直前、見えない壁に激突して霧散する。澪が予め張っていた、魔法の防護障壁だ。

澪は正面――具現化した刀を手に、緑色のオーラを発している柚希を見据えながら、

「――言う事を聞かなきゃ力ずくってワケ？」

そう言うなり、口端を上げて、

「だったら――こっちも容赦しないわ」

積極的に勇者の一族を敵に回すつもりはなかったが、売られたケンカは買ってやる。

百回殺す。澪が風の魔法を解き放つと、吹き荒れる豪風が柚希へと迫り、

「――――」

しかし白い剣閃が幾筋か煌き、風の魔法が斬り裂かれた。

それを見た澪は、柚希と自身の戦闘の相性に、心の中で舌打ちをする。

……さすが勇者の一族ってところね……。

戦闘における強さを示す指標――それは大まかに「力（パワー）」「速さ（スピード）」「技（スキル）」「魔力（マナ）」の四つに分類されるという。要は、RPGやシミュレーションゲームのステータスと同じようなものだ、と万理亜から教わった。理想は万能（ばんのう）タイプだが、基本的に四つの中から、自分に合った力を伸（の）ばしていく事になる。万理亜はパワー、澪は魔法がそれに当たり、各系統内でそれぞれ能力に適した戦闘スタイルを選択していた。万理亜であれば怪力を活かした肉弾格闘士（ハード・ストライカー）、澪なら中遠距離から強力な攻撃魔法を放つ上位魔法士（ハイ・ウィザード）といった具合に。

そして――恐らく柚希は技タイプなのだろう。近接ではパワータイプに、遠距離では魔力タイプに劣（おと）るものの、応用力が最も高く、あらゆるレンジで戦える系統だ。

何より。恐らく柚希は、澪とは比べ物にならない程（ほど）の実戦経験を積んでいる。だが、

……だからって、ここで引く訳にはいかない！

キッと正面を睨（にら）むと、柚希が冷たい表情で、

「そうまでして、刃更の優（やさ）しさを利用したいの？」

「あたしがアイツの優しさを利用してるっていうなら、アンタはどうなのよ？　アイツの意思を無視して、自分勝手な優しさを押し付けてるだけじゃない！」

「！　私は……っ」

思わず表情を硬（こわ）くした柚希に、澪は叫（さけ）ぶ。

「あたしは言い訳しない――でも後悔（こうかい）もしないわ！　今さら巻き込んでゴメンなさいなんて言ったら、アイツに失礼だもの！　だから堂々と戦うわ、アイツと一緒に！」

澪は、強い語調で言葉を叩き付けた。口にしたのは、刃更の想いに対して今の自分にできる応え。彼への純粋（じゅんすい）な想い――そう信じて疑わなかった。だが、

「……もう一度」

底冷えするような声が、柚希の口から発せられた。思わず気圧（けお）され、息を呑（の）む澪に、

「そんな勝手な事、もう一度言ったら許さない……刃更の事、きちんと知らないクセに」

「それは……っ」

出逢（であ）ってまだ一ヶ月足らず。お互いに隠（かく）している事や、言えていない事はある。でも、

「確かにあたしは、アンタよりアイツとの付き合いは短いわ……アイツの昔の事も、まだあんまり知らない。でもね、今のアイツの事なら知っているつもりよ！」

ずっと離れていて、一週間前に再会したばかりの柚希よりも、自分の方が今の刃更の事は知っている。彼がどれだけ優しくて、どれだけ澪達の事を想ってくれているかは。だが、

「……そんな事ない。刃更の事をきちんと知っていたら、そもそも彼を戦いに巻き込んだりする筈がないから」

だって、と柚希。

「刃更はもう、昔のようには戦えない……本当は、剣を持つだけでも辛い筈」

「何よそれ……どういう事……？」

思わず問い返す澪に、柚希は言った。澪に諦めさせるための――東城刃更の真実を。

「刃更は五年前、私達を助けるために――……」

一息、

「――――――」

その柚希の言葉に、

「……え？」

澪は呆然と聞き返していた。一瞬、柚希が何を言ったのか解らなかったからだ。

――それは、刃更が勇者の里を追放される事になった原因。

東城刃更の罪と、今もなお彼を苦しめているであろう心の傷だった。そして柚希の言う通り、澪はその事を全く知らなかった。よって、すぐに思考が追いつかない。だが、

「だから刃更と、迅さんは里を出た……一族である資格を失って」

と柚希が言葉を重ねてくる。

「貴女もおかしいと思った筈。なぜ勇者の一族が、普通の人として暮らしているのか」

「あ……あ……」

成瀬澪は理解する。柚希がなぜこれ程までに自分に怒っているのかを。何より――自分がどれだけ残酷な事を、刃更にさせていたのかを。そして澪は、刃更の言葉を思い出す。

『昔……田舎に住んでた頃に、ちょっと色々あってさ。トラウマっていうのかな……今でもたまに見るんだ。その時の夢を』

……そんな……。

何も知らなかった事に、澪が呆然となっていると――不意に屋上の扉が開け放たれた。駆け込むようにやって来たのは、焦りの表情を浮かべた刃更だ。

「やっぱここか……っ」

全力で走って来たのだろう。額には汗が浮かび、息は切れていた。

そして刃更は、屋上に残っている戦闘の痕と、柚希の手にある刀を見て顔を顰める。

「どういう事だ柚希……コイツはまだ監視対象の筈だぞ。なのに、監視役のお前が、何で霊刀を抜いてる？」

柚希が無言で俯き視線を逸らすと、刃更は次に澪へと向き直り、

「澪、お前も……勇者の一族とは敵対しないって言ってただろ。それを――」

と、そこまで言い、ふと表情を怪訝なものにした。こちらの顔色に気が付いたのだろう。

「あ、あたし……」
澪はとっさに何か言おうとして、しかし上手く喋れなかった。
動揺していたからだ。だから、
「どうした？　何でそんな……」
そう言って、刃更がこちらへ来ようとした。それを遮るように、
「――ああ、君の過去の話をしていたところだよ、たった今までね」
笑みを含んだ声が、あらぬ方向から澪達へと投げ掛けられた。

東城刃更は見る。自分達のいる屋上――その離れた場所に、静かに佇む存在があった。
白の仮面に黒のタキシードの姿。人の姿をしているが、肌で感じるのは禍々しくも圧倒的な負のオーラだ。こうして対峙しているだけでも解る。相当な力を持った魔族だった。
……マズいな。
刃更は表情を厳しいものにする。恐らくこいつが今回の黒幕なのだろうが、想像以上に強い。何タイプかまでは解らないが、恐らくA級クラスの実力の持ち主に違いない。
澪は準S級ランクに認定されているが、それはあくまで先代魔王のウィルベルトの能力を秘めている可能性を考慮してのものだ。通常の里の基準で考えれば、恐らくB級に分類される。柚希は特B級だ。相手が準A級ならともかく、もしA級以上ならば、柚希はおろか、刃更が加勢しても相手をするのは厳しいかもしれない。
現に無造作に立っているように見えるが、こちらに攻撃を許す隙が微塵もなかった。
相手の強さが解るのだろう。澪と柚希もまた、刃更と同様に動けずにいると、
「――いやいや、随分と興味深い話が聞けたよ。前におかしな邪魔が入ったとは思ったが、まさか勇者の一族に追放者が出ていたとはね。しかもそれが、大戦の英雄であるジン・トージョーと、その息子とは驚いたよ」
そう楽しそうに白仮面が言ったのを聞いて、刃更はスッと目を細めて、
「この間の公園も、お前の仕業か……」
「ああ。少し前から、君には眼を付けていたんだ。てっきり一般人だとばかり思っていたんだけど、まさか能力者で――しかも先代魔王の遺児の味方までするんだから。しかも中々良い腕を持ってる。どうやら、先程やった連中も倒してきたみたいだね」
「――――っ!?」
白仮面の言葉に、刃更の隣にいる澪が息を呑んだ。
自分と一緒にいない時に、刃更だけが狙われた事に驚いたのだろう。しかも、

……俺の過去の話、か……。

恐らく柚希が、澪が刃更から離れるように、五年前の事件について話したに違いない。

だとしたら、どこまで聞いたかは解らないが、恐らく澪はもう知っているのだ。

東城刃更の犯した罪と――そのせいで刃更の剣に迷いと躊躇いがある事を。すると、

「――おや？　どうしたんだい、そんな顔して」

顔を青ざめさせている澪に、白仮面が告げた。

「今更そこの彼を巻き込んだ事に後悔でも？　だとしたら、もうとっくに手遅れだよ。先日の公園や今だけじゃない。この数日、君の知らないところで、彼は何度となく剣を振るって戦っていたんだ――君が眠った後、夜が明けるまでずっとね」

「え――？」「っ――黙れっ！」

澪が驚きに目を見開いたのと、刃更が白仮面へと向かって駆け出したのは同時だった。

ブリュンヒルドを具現化し、白仮面へと斬りかかる。だが、

「おっと」

と白仮面が言った瞬間、ギィィィン！　と、振り下ろした剣が不可視の力に弾かれた。

後方へ吹っ飛ばされた刃更は、それでもとっさに体を捻り、どうにか足から着地する。

……コイツ、やはり強い……っ！

余計な口を塞ぐために繰り出したとっさの一撃とはいえ、力はしっかり込めていた。購買や公園で襲ってきた『影』程度なら、簡単に両断できていた筈だ。その斬撃を完全に防がれ、弾かれた。何より「スピードタイプ」の刃更の速度にも対応している。

「……刃更」

駆け寄って来た柚希に、刃更は「ああ」と頷く。恐らく柚希も同じ判断なのだろう。

……準A級……いやA級だろうな。

白仮面の実力は想像以上。だが、他にも解った事があった。

今の防ぎ方、詳しい原理は解らなかったが技か魔力、どちらかのタイプだ。

相手のタイプが解れば、戦略の立てようはある。だが、

……くそ、万理亜が居れば……。

スピードの刃更や、技の柚希と異なり、パワーの万理亜なら直接攻撃で白仮面の障壁を破れる可能性がある。だが、彼女が来る約束の時間は、まだ少し先だ。刃更や柚希が時間を稼ぎ、澪が強力な魔法を使うという手もあるが、もし敵が魔法タイプなら、敵の障壁は澪の魔法では破れない。そうなれば、こちらは手詰まりだ。

……どうする？

刃更がどうにか戦略を練ろうとしていると、

「ね、ねえ……アイツが今言ってたのって、本当なの？」
少し離れた場所から、どこか信じられずにいる声が刃更へと問い掛けてくる。
刃更は無言のまま、苦い表情になった。そんなこちらを見て、
「……そうなの？　刃更……アンタ、あたしの知らない所で、敵と戦ってたの……？」
どうして――と呟く澪に、
「決まってるじゃないか、君のためだよ……」
と、白仮面は笑いながら、
「君の中に眠る、先代魔王ウィルベルトの力――それはたとえ未覚醒であっても、強大な力の波動は漏れ出し、その力に惹かれた低級のはぐれ悪魔を呼び寄せる。そういった低級悪魔がもし人間に危害を及ぼせば、それは君の存在が原因だ。そうなれば当然、勇者の一族は君を害ある存在とみなし、監視対象から消滅対象へと切り替える」
その言葉に、柚希が黙り込んだ。それは肯定の沈黙だ。
「もし消滅対象となった君を庇えば、彼もこの世界の裏切り者だ。勇者の一族としても、見逃せなくなる……だからそこの彼女は、君に彼から手を引くように言ったのさ」
まあ、と白仮面。
「そうならないように、そこの彼や、あのお付きのサキュバスが、この数日必死に街中を

警戒して低級のはぐれ悪魔を狩っていたからね……良く頑張ってたよ、本当にね」
「そ、それじゃあ万理亜が学校に迎えに来ないで、警戒していたのも……？」
澪の問い掛けに、刃更は頷きを返した。残念ながら、これ以上は隠し通せない。
ここで嘘を重ねれば、澪の信頼を完全に失ってしまう。
「済まない……お前に言ったら、きっとお前は自分を責めると思って」
刃更は、お風呂の一件があったあの日の晩――ベッドに潜り込んできた万理亜に事情を話し、澪の力に引き寄せられたはぐれ悪魔による被害を防ぐため、秘密裏に動いていた。
その事を澪に伝えるのは、呪いのせいで精神的に負担がある今は避け、最低でも一ヶ月後――主従契約の魔法を解約して、精神的に落ち着いてからにしようと決めていたのだ。
「そんな……」
呆然と呟き、澪は完全に立ち尽くす。そこへ、
「そんなにショックを受ける位なら、その原因となる『力』を渡して貰えるかな」
白仮面がそう告げた。と同時、澪の背後に『影』が出現した。
既に大鎌を振りかぶっている。だが、澪はその存在に気付けていない。その代わりに、
「くっ――!?」
とっさに刃更が反応していた。一足飛びで『影』へと斬り掛かろうとして、

「へえ――今度は彼女まで消す気かい？」
そこへ、からかうような白仮面の声が投げ掛けられた。その効果は絶大で、
「――――っ」
心の傷を利用された。動揺した刃更の手から、ブリュンヒルドが消失する。だが、
「――っうおおおおおおおおおおっ！」
それでも東城刃更は歯を食い縛り――そのまま前へ飛ぶように床を蹴った。

最初――成瀬澪は何が起きたのか解らなかった。
「え……？」
気が付けば、澪は夜空を見上げていた。屋上の床に倒れていたのだ。
……一体何が？
そう思い、澪は身体を起こそうとして――しかしできなかった。そしてようやく気付く。
自分が重みを得ている事に。自分の上に、誰かが覆い被さっている事に。
見る。
「……刃更……？」

澪の呆然とした呟きに、刃更は応えなかった。
動かない。だから彼に呼び掛けようとして――彼の肩に触れた手が濡れた。
血だった。
「――――っ!?」
澪の意識が完全に覚醒し、フラッシュバックのようにその瞬間を思い出す。
自分の背後に現れた敵の『影』――その凶刃から刃更が守ってくれたのだと。
そのために、彼は背後から斬られてしまったのだと。
「勇者の一族といっても、所詮はその成れの果て……案外脆かったかな」
拍子抜けしたような白仮面の声が聞こえる。
「やだ……しっかりしてよ、ねえ！」
澪が悲痛な叫びを上げると、視界の横――すぐ傍で動くものがあった。
恐らくは、刃更を斬った『影』を倒したであろう柚希だ。
「……絶対に許さない……よくも！」
柚希は霊刀を抜き放ち、虚空へと降り下ろした。
轟音と共に衝撃波が生まれ、一直線に白仮面へと襲い掛かる。
「へえ……威力は中々だね」

少し感心したように言いながら、白仮面はあっさりと横へと跳んで回避した。
だが――その着地点に、柚希は先回りしていた。
予め回避されると踏み、衝撃波を放つと同時、動きを先読みして駆け出していたのだ。
中腰に霊刀を構えた状態から、神速の横薙ぎを繰り出す。
斬り裂いた。
しかし、柚希の霊刀が斬ったのは虚空だけ。白仮面は上――宙へと回避していて、
「良いのかい、僕の相手なんかしていて。彼の傷は浅くない。早く手当てをしないと――手遅れになるよ？」
「……っ」
悔しそうに歯噛みをする柚希から、白仮面はこちらへと視線を移した。傷付いた刃更を抱き締めながら、身を起こした澪へと。そして、笑みを含んだ声で告げてくる。
「解ったかい？　これが君の決断が生んだ結果だよ」
「あたし、の……」
自分の決断が招いた結果に呆然となる澪の前で、白仮面はフッと虚空に溶けるように姿を消した。夜風が、向こうの声だけを運んでくる。
『一旦引くよ。よく考えてみるといい。そっちの彼女が言った事は真実だ……周囲を巻き込んで、その彼を巻き込んで傷付けて。それでも勝ち目のない戦いをこれから続けてゆくのか。君の復讐のために犠牲になるのは、自分自身と周囲のどちらにするのか、もう一度選んで決めると良いよ』
そして最後に、こう付け加えてきたのを澪は聞いた。
『ただし――君の決断如何では、すぐに全てを終わりにできるけどね』

2

――かつて、勇者の一族の里に居た頃。
東城刃更は、幼くして既にその将来を嘱望される存在だった。
大戦の英雄である迅の一人息子であり、父の才能を受け継いだのか、同年代の少年少女と比べても、刃更の実力は群を抜いていた。さらに、刃更に期待した者が多かったのは、刃更が他の誰にも真似できないような特殊な技を使う事ができたからだ。
《無次元の執行（バニシングシフト）》。相手の攻撃に対してカウンターでのみ繰り出せるその技は、物理・魔法を問わずあらゆる攻撃を弾いたり、散らしたりする事ができるというもので。
さらに――「存在の根源」たる〝天元〟を見極め、断つ事ができれば、相手の攻撃の存

在・事象そのものをゼロ次元へと消し去る事ができた。
そのため次代の希望として、刃更は柚希ら同世代の子供と共に育てられていった。
――だが。そんな幸せな日々は、ある時、唐突に終わりを告げた。
かねてより軍を引いた魔族を追討すべきと訴えていた里のとある青年が、首を縦に振らない長老達に業を煮やし、自分一人でも……と強引な手段に出た。里の山奥で、大地にS級の邪精霊を封じていた、最強の魔剣ブリュンヒルドを抜き去ったのだ。
魔族の追討を訴える程だ。当然ながら、青年は自らの腕に自信があった。周囲もその事を認めていた。迅を除けば、間違いなく彼がナンバー1で。だから解放された邪精霊も、魔剣ブリュンヒルドで斬り倒すつもりだったのだろう。
しかし――そうはならなかった。その青年は、邪精霊に意識と身体を奪われて。
自らを封印した憎き存在――勇者の一族の里を襲ったのである。
――タイミングの悪い事に、その事件は、迅が里を離れていた時に起きた。
それでも勇者の一族だ。戦える者は数多くいた。彼らは必死に戦い、どうにか悲劇を食い止めようとした。だが、里でも一、二を争う腕の持ち主に、S級の邪精霊の力が宿ったのだ。頼りの迅もいない。悲劇は止められず、犠牲者はどんどん出ていった。
そして――その邪精霊を倒したのが刃更だった。だがそれは眼の前で友人らを殺され、

柚希へと凶刃が襲い掛かるのを目の当たりにし、精神が限界を迎えて《無次元の執行》を暴走させてしまったからで。気が付けば、刃更は医療所のベッドで横になっていた。そして聞かされたのだ。事態は既に収束したのだと。それを、他ならぬ刃更がやったのだと。その証拠に。迅すら使い手として選ばれなかった最強の魔剣ブリュンヒルドが、刃更を主として選んでいた。刃更のお陰で助かった命は多数ある。柚希もその一人だ。
――だが、生き残った者達の心までは救われない。
刃更の《無次元の執行》は、無慈悲なまでに完全に、周囲一帯を消滅させてしまった。操られていた青年も、邪精霊も、犠牲になった一部の者達の躯も――何もかも。
よって、《無次元の執行》は危険すぎる、二度と悲劇を繰り返さぬようブリュンヒルドと共に刃更を幽閉すべき――そんな方向に話が進むのに、それほど時間は掛からなかった。
事故のショックで、既に刃更は《無次元の執行》を使えなくなっていたにも拘らずだ。
でも――別に刃更はそれでも良かった。大切な友達を消してしまった刃更もまた、自分のした事の重さを背負いきれず、ほとんど抜け殻のような状態で。だが――里に戻った迅は刃更を庇った。他にも長老の一人や、柚希の野中家などが懸命に刃更を擁護して。そして結論が出た。刃更は一族としての資格を剝奪し、使役した魔剣ブリュンヒルドと共に里から追放。迅は刃更が能力を暴走させないよう、刃更を監督するために同行せよ、と。

その決定に、刃更は大人しく従った。だが、迅は真っ向から異論を唱えた。そして、
『勇者である事が、俺に刃更を守れなくするなら――俺も勇者なんざ辞めてやる』
そう言って、刃更と一緒に里を出たのである。

そして――あれから五年の月日が流れた。
あの日の悲劇の記憶は鮮明で、今も悪夢となって刃更を苦しめ続けている。
自分が犯した事への償いも、向き合い方すらまだ見出せていない。
それを証明するかのように、今でも《無次元の執行（バニシングシフト）》は使えないままだ。
ただ一度、マグレで万理亜の風の魔法を消し去った時を除いて。
……でも。
闇の中に意識を浮かべながら、それでも東城刃更は思う。
そんな中途半端な自分だが、それでも守りたいものができたと。新しい家族ができたと。
最初は兄として、彼女を守ってやれたらと思っていた。だが自分達の関係は偽りだった。
妹だと思っていた彼女は、実は魔王の力を受け継いだ少女で。だが、それは彼女が望んだ事ではなかった。それなのに――彼女は命を狙われていた。
そんな彼女が、それでも必死に前を向いて生きようとしている。戦おうとしている。
――かつて刃更を守るため、迅は勇者である事を捨てた。刃更も勇者の資格を失った。
だが今、勇者の一族は勿論、仲間の魔族ですらロクに守ってやれない少女が居る。
だとしたらそんな彼女を――成瀬澪を守れるのは、それはきっと自分なのだ。
今の刃更にはもう、かつてのように戦える力はない。
それでも、ブリュンヒルドは応えてくれる。手も足もまだ動く。意思もある。
「だから――……」
呟くように言って、そして刃更は眼を開けた。
闇の中に光が差し込む。すると、眼の前にあったのは見慣れた天井だ。
「良かった……解りますか？」
見れば、幼い少女が胸を撫で下ろしたようにこちらを覗き込んでいた。
「万理、亜……？」
「はい。安心して下さい。ここは家です、刃更さんの部屋ですから」
「俺の――」
記憶の不連続に、刃更は眉を顰め――そして思い出した。

途端に鈍い痛みを胴に得て、顔を顰める。
「そうか……俺は屋上で敵に……」
「すみません……もう少し早く私が迎えに到着していれば」
と、申し訳なさそうに万理亜。
「包帯などは保健室で借りて、その場で応急手当てをしましたが、学校では人目があるのでこちらまで運んだんです」
「そっか……ありがとう、助かった」
ここが家で、傍に万理亜が居るという事は、柚希は一旦引いてくれたという事か。時計を見れば、既に夜中の三時半を回っていた。どうやら七時間ほど眠っていたらしい。
「あの――」
と万理亜。
「言われていた通りにしましたが――本当に病院に連れて行かなくて良かったですか？」
「ああ……これで良いんだ」
自分にいざという事があっても、病院には運ばないでくれ――それは公園での戦いの後、万理亜に頼んでいた事だ。確かに病院に行けば治療は受けられる。だが治療や回復を優先する薬剤は、身体の感覚や思考力を奪う。むざむざ敵に対して隙を作るようなものだ。

「く――……っ」
刃更はゆっくりと身体を起こした。そして、ギュッと拳を握り締める。
……良し。
まだ痛みはあるが、身体は動く。思考の混濁もない。
「凄いですね……あれだけの傷を負って、もう意識が戻るなんて。普通の人なら、二日や三日眠ったままでもおかしくないですよ」
「俺達の一族は、子供の頃から特殊な訓練で身体を鍛えるんだ……だから常人よりも回復力も自己治癒能力もずっと高い」
それを知っているからこそ、柚希も刃更の看病を澪と万理亜に任せたのだろう。
全ては戦うために、戦って勝利するために身に付ける能力だ。
そう――自分達は勝たなくてはいけない。屋上でこちらを圧倒した、あの魔族に。
「そうだ、澪は今どうしてる――……万理亜？」
刃更が口にした名に、万理亜は小さな身体をピクリと反応させた。
それまでもどこか浮かない感じの表情が、さらに悲痛なものになって、
「……負傷した刃更さんを見て、育ての両親を殺された時の事を思い出してしまったんでしょう。私が現場の屋上へ到着した時、澪さまは酷く動揺されてました。半ばパニック状

態なのに、それでも刃更さんの手当てをご自分でなさろうとして……そこで一旦落ち着いていただくため、少しお休みになって貰ったんです。そして一時間ほど前、刃更さんの容態が安定した事をお伝えしたのですが、そうしたら」

「おいまさか――」

「はい……次に澪さまのご様子を窺いに行った時には、もうお部屋に居なくて……っ」

「あの馬鹿……っ！」

さては妙な責任感じて、一人で決着を付けに行きやがったな！

「――刃更さん！」

ガバっと万理亜が両手と両膝を床に着き、ギリギリまで頭を下げた。

「酷い怪我だって事は解ってます……それでも今、澪さまの居場所を感じられるのは主従契約を結んでいる刃更さんだけなんです！　戦ってくれとは言いません。でもせめて澪さまの居場所だけでも……どうか、どうかお願いします……っ」

小さな身体を震わせて行なわれる、必死の懇願。だから、

「――冗談じゃない」

そう言って、東城刃更は布団を撥ね除けてベッドから降り立った。

全身に灼熱のような痛みが走るが構わない。

「俺も行くに決まってるだろ――妹の危機に寝ているような、情け無い兄貴になるつもりは俺にはないんだ」

3

部屋を出て、家を抜け出した澪が向かったのは、丘の上にあるあの公園だった。

街の名所という事もあり、本来ならば夜中でもちらほらと人が来る場所だが、広大な敷地には、様々な木々が生い茂る雑木林も広がっており、深い場所ならまず人は来ない。

「……これで」

雑木林の奥で、念のために人避けの魔法を使うと、澪は大きく息を吐いてそっと眼を伏せた。敵を待つ準備が整ったのだ。

……二人共、ゴメンね……。

澪は心の中で、刃更と万理亜に謝った。もう家を抜け出した事はバレているだろう。自分でも無謀な事をしているとは思う。だが、澪はこうする以外に思い付かなかったのだ。

――成瀬澪は何も知らなかった。

自分の戦いに巻き込んでおいて、知らない所であの二人に戦って貰っていたなんて。

そして刃更は、そんな澪を庇って重傷を負ってしまった。

あの時――血を流した刃更が、澪の眼には殺された両親と重なって見えて。

心がどうにかなりそうだった。まだ敵のいる戦場で、情けなく動揺してしまう程に。

だから――万理亜に刃更の看病をしたいなら、まず自分が落ち着けと言われて。自分の部屋で一人で震えながら、それでもずっと考え続けた。

白仮面が言った言葉が、澪の頭の中をぐるぐると回っていた。周囲を巻き込んで、刃更や万理亜を巻き込んで、傷付けて。それでも勝ち目のない戦いをこれから続けてゆくのか。復讐のために犠牲になるのは、自分自身と周囲のどちらにするのか。

――そして。ようやく澪が出した答えが、これだった。

それでも、ここでこうして居ながら、なお思う事は一つだけ。

……お願い刃更、無事でいて……っ。

澪は祈るような思いでギュッと目を瞑った。万理亜は容態が安定したと言っていたが、予断を許さない状況は続いていた。傍で回復を祈り、見守る事はできる。

だが逆に言えば、傍に居ても回復を祈り、見守る事しかできないのだ。

……だったら。

澪は眼を開きながら思う。自分は、自分にしかできない事をしようと。すると、

「――どうやら結論が出たみたいだね」

ふと背後から声がした。「ええ」と澪は振り返る。

すると雑木林の中――視線の先に、白仮面が立っていた。

澪は無言で、白仮面を睨み据える。彼は屋上から去り際に言っていた。『君の決断如何では、すぐに全てを終わりにできる』と。その言葉が何を意味してるのか、成瀬澪はきちんと理解していた。すると、こちらの心の内を見透かしたように、

「へえ……思ったよりも素直だったね。でも、これが正しい選択だと思うよ」

と白仮面。

「君が戦い続ければ、これからも多くの犠牲が出る。でも君一人が犠牲になりさえすれば、全てが終わるんだから」

「……そうね」

と澪は頷いた。心の底から同意した。

「犠牲になるのは――戦うのはあたし一人で充分よ」

次の瞬間。白仮面が巨大な炎の柱に飲み込まれた。解き放ったのは地獄の業火――今の澪が使える最強の火炎魔法だ。それを待機状態にして、ずっと待っていたのである。

全ては、完全な不意打ちのタイミングで攻撃を仕掛けるために。さらに、

「まだまだっ！」

澪は次々に、攻撃魔法を発動させた。攻撃の手を休める事なく二連の雷撃。八方からの風の刃。無数の氷の槍。それらを、連続で白仮面へと叩き込んだ。

全てが全力。魔力と精神力の限りを尽くして行なった、殲滅必至の先制攻撃。

最後に爆炎魔法を叩き込み、燃え盛る炎を見ながら、

「ハァ……ハァ……こ、これで……」

と、澪が荒い息を吐いた。

声がした。

「――これで気が済んだかな？」

ヒュゴオォォッという風のような音と共に炎が掻き消される。そして、まるでダメージを負っていないかのように、先程と同じ場所に佇む白仮面がそこに居た。

「そんな……」

「何を驚いているんだい。相手が先に居る場所に、何の用意もなしに来る筈がないじゃないか。まさか、こんな手で僕を倒せると本気で思っていたのかい？」

「くっ……！」

弾かれたように後方へ退がり、新たな魔法を詠唱しようとする澪に、白仮面は笑った。

「そうそう素敵な家だよね、君があの元勇者の青年と住んでいる家――よく燃えそうでさ」

「――――っ!?」

「配下に命令して試してみようか？　君の火炎魔法とあの家、どっちが綺麗な炎になるか」

「卑怯な……っ」

あそこには傷付いた刃更がいる。万理亜もいるため、炎に巻かれる事はないかもしれないが、恐らく脱出するだけで手一杯だろう。火事を阻止する事はできない。すると、

「卑怯も何も、彼を巻き込んだのは君だろうに……責めるなら自分を責めて欲しいね」

「……っ」

澪は唇を噛み締めた。こんな卑怯な脅しに屈して、降参するなど冗談ではない。

しかし澪が今唱えようとしていたのは、あくまで戦闘を続行するための繋ぎの魔法だ。

先程の連続魔法すら通じなかったのに、この程度のもので倒せる訳がない。

とはいえ――それを皮切りに再び戦闘を続ける事はできる。組み立ても頭の中にある。

だが、澪はゆっくりと構えを解き、魔法の詠唱を中止した。

「……アンタの狙いはあたしでしょ。お願い、刃更にはもう手を出さないで」

でも、

「もしこれ以上アイツを傷付けたら――あたしはアンタを絶対に許さない。たとえどんな

手を使ってでも、アンタを百回殺してやるわ」
「構わないよ。それでこれ以上、余計な手間が増えないのであればね」
白仮面が、言葉の端に余裕の笑みを込めてくる。
虫唾が走った。自分の戦いは始まったばかり。まだこれからだというのに。
こんな所で敵に屈するなんて、死ぬほど嫌だった。
……でも……っ。
それでも、刃更の命を危険に晒すのは死ぬより嫌なのだ。だったらこれしか方法はない。
無言で立ち尽くす澪の眼の前に、宙を滑るようにして白仮面がやって来た。
「手を――」
促しの言葉に応じて両手を前に出すと、澪の手首に紫色の縄が巻きついた。
「これは……」
「魔法を封じる拘束用の魔導具さ。君程度のレベルなら特に問題があるとは思わないけど、まあ念のため封じさせて貰うよ。さて――それじゃあ行こうか」
「……どこへ連れて行く気？」
戦う事を止めても敵意は失っていない澪に、白仮面は答える。
「決まってるじゃないか……魔界だよ。僕の主が、君が来るのを待って――」

そこまでを言った瞬間、とっさに白仮面は澪から離れるように大きく後ろへ跳んだ。
と同時。それまで白仮面が居た空間を、斬撃による風の刃が切り裂く。
「まさか……！」
澪が振り仰ぐようにして己の背後――攻撃が来た方を見ようとしたのと、その横を高速で人影が駆け抜けたのは同時だった。
それは澪と同じ聖ヶ坂学園の制服に身を包み、右の手に霊刀を携えた少女。
野中柚希だ。

「――どうしてっ!?」
そんな澪の問い掛けを背中で聞きながら、それでも野中柚希は疾走を緩めなかった。
雑木林という不安定な足下にも構わず、一気に白仮面へと斬り掛かる。
しかし柚希の斬撃は、白仮面が展開した障壁によって難なく防がれ、
「意外だね、君が彼女に味方するとは……それは勇者の一族の判断かい？」
「……別に、彼女の味方になった訳じゃない」
余裕を含んだ声で告げてくる白仮面に、淡々と柚希は告げる。

——そう。当初、柚希には澪を助ける気などなかった。
彼女が受け継いだ先代魔王の力を巡る争いは、魔族同士で行なわれているものだ。
よって、勇者の一族は積極的に介入するつもりはない。
監視役の柚希も、その判断に異論はなかった。静かに暮らしていた刃更を巻き込んだ澪に対しては悪い感情しかなかったし、別に彼女が犠牲になっても構わないと思っていた。
……でも。

それでも刃更は、澪を守ろうとしていた。学校で刃更を見つめていると、彼は澪に気付かれないように彼女の事を見ていた。いつだって刃更は、澪の事を気に掛けていて。そして彼女の知らない所で、彼女のために戦っていた。そんな価値が澪にあるのか、柚希には理解できなかった。だから学校の屋上で、彼女に告げたのだ。刃更から離れろと。彼を巻き込むなと。そして、刃更が敵の刃に倒れ、白仮面が一度去った後。
野中柚希は激情の矛先を、とっさに澪へと向けようとした。
——全て貴女のせいだと。貴女が刃更を巻き込んだからだと。
でも言えなかった。倒れた刃更を前にして、澪は柚希以上に取り乱していたからだ。
激しくうろたえ、動揺し、それでも刃更の事を心配していた。ごめんなさい、ごめんなさい……と、泣きながら何度も繰り返していた。そんな悲痛な叫びを、野中柚希は聞いて

しまったのだ。だから万理亜が到着した時——一旦、刃更の手当てを彼女達に任せたのである。そして澪が一人で戦おうとし、さらには刃更のために戦うのを止めたのを見て。
刃更がなぜ澪を守ろうとしたのか、柚希はようやく少しだけ理解できた気がした。
それに、柚希がここへ来た理由は他にもあった。そう——大事な理由が。
「私はちゃんと言った筈——刃更を傷つけた貴方を、絶対に許さないと」
だから、冷たい殺意を込めて告げると同時。柚希の全身が光に包まれた。
霊刀『咲耶』の具現化と併せて、衣服を戦闘用へと切り替えたのだ。
それは野中柚希の決意。勇者の一族として、眼の前の魔族を倒すという意志の表れで。
そして戦闘が始まった。連続で繰り出す柚希の剣撃に対し、
「君の剣や技じゃ僕は倒せないよ……それは先刻の屋上の戦いで解ってるだろうに」
展開した障壁越しに、やれやれと嘆息する白仮面。だが、柚希はまるで焦る事なく、
「……そう？　なら——これで！」
放ったのは斬り返しの一撃。それが——鉄壁を誇っていた白仮面の障壁を断ち切った。
「な……っ？」
驚愕する白仮面に、返す刀で柚希は斬撃を繰り出した。
とっさに背後へ飛び退り、辛うじてこちらの剣を避けた白仮面が怪訝そうに、

「どうやってこちらの障壁を……」
「一撃では斬れない。だから斬れるまで繰り返した……それだけ」
と柚希。
「まさか……寸分違わず、同じ場所に斬撃を重ねて……？」
「それで貴方を倒せるなら、そうするだけ」
さらりと柚希は言い放つ。それは技タイプの中でも、限られた者だけができる芸当だ。
刃更と別れてからの五年で、柚希はそれだけの力を身に付けていた。
「――勇者の一族を舐めないで」
そして柚希は、再び前へ出た。霊刀を敢えて一旦鞘へとしまい、そして神速で抜く。鞘走りを利用して生じる居合いの斬れ味は、通常の斬撃の数倍。一撃で相手の障壁を断ち切り、しかもそれで終わらない。居合いと斬撃を組み合わせ、柚希は攻撃を連ならせてゆく。たまらず大きく背後へ跳び、こちらと距離を置いた白仮面は、
「良いよ……なら少し遊んであげようか」
そう言って、こちらへと手の平をかざしてきた――次の瞬間、黒い闇が走った。
「――――っ？」
とっさに柚希は横へ跳んでいた。それは着地の体勢を全く考えない反射的な動きだ。

その直後。轟音と共に大地が震動した。地面を転がった柚希は見る。直前まで自分が居た辺り――雑木林の地面が、爆発によってごっそりと抉られていた。

「へえ、あれを避けるんだ……」

感心したように白仮面は言った。そして、

「だったら――これならどうかな？」

そう告げると同時、白仮面の周囲に無数の黒い光球が出現した。

……いけない……っ！

あれだけの数を避けるのは不可能だ。防御も不可能。どうする――その僅かな逡巡が、柚希から完全に回避の可能性を奪った。気が付いた時にはもう、柚希は激しい衝撃に巻き込まれ、後方へと吹っ飛ばされていて――直後、爆発の轟音が響き渡る。

勢いそのままに、柚希は巨木の幹に背中から叩き付けられ、衝撃に呼吸が止まった。

「――野中！」

澪の叫びが遠くで聞こえる。だが、柚希は反応できない。ぐらりと身体が前へと傾き、

「っ――……！」

それでも霊刀を地面に突き立て、倒れる事だけは拒否する。

……ま、だ……っ。

そう、まだだ。まだ自分は戦える。だって彼に――刃更に助けて貰った命なのだから。あの悲劇から五年。自分は何のために強くなった？

……決まって、る……。

刃更は己の未来を犠牲にして、自分を助けてくれた。だから。そんな彼と、彼の守りたいものを、今度は自分が守る。刃更が暮らすこの世界を――彼の日常を守る。

そのために厳しい修行に耐え、強くなったんじゃないか。

「逃げて……早く、野中っ！」

澪の叫びを柚希は無視した。冗談じゃない。これ位で諦めてたまるものか。

「っ……うぅ……っ」

柚希は必死に歯を食い縛り、ゆっくりと顔を上げて。

そして理解した。澪が何故、自分に逃げるように言ったのか。

野中柚希は見る。白仮面の頭上に、彼が生み出したであろう巨大な闇の光球があるのを。

このままでは、柚希が死んでしまう――そう思った澪の行動は早かった。

「……っ、いい加減に――！」

両手を縛られた状態で、それでも肩から白仮面へと体当たりを試みる。だが、

「――邪魔だよ」

対する白仮面は、無造作に衝撃波をこちらへ放った。

「きゃあああああぁぁぁ――っ！」

拘束用の魔導具で魔法を封じられている澪に、それを防ぐ術はない。まともに喰らった澪は、吹っ飛び地面を転がって、

「……く、……う……っ」

それでも澪は、必死に起き上がろうとした。

……させる、もんですか……っ。

絶対に嫌だった。これ以上、自分の運命に誰かを巻き込むのは。

誰かが犠牲になってしまうのは。たとえそれが、勇者の一族である柚希だろうと。

だが――想いだけでは、悲劇を止める事はできない。

「これで終わりだよ」

白仮面がそう告げると同時。巨大な闇の光球が、柚希へと向かって解き放たれた。

「やだ……っ、ダメぇえええエエエエ――っ！」

とっさに澪は叫んでいた。だが白仮面は澪を無視した。柚希に迫る闇の光球も、残酷な

現実も澪を無視した。どれだけ澪が叫んでも、澪が柚希を助けられる事はなかった。

だから、柚希の死は免れる事はない――そうなる筈だった。

――だが。それでも一つだけ、澪に応えるものがあった。

「……え？」

聞いたのは吹き抜ける風の音。そして、

「――任せろ」

そんな短い呟きと共に。

風よりも速く――一人の青年が、光球と柚希の間に割って入った。

東城刃更が戦いの場に到着したのは、白仮面が巨大な闇の光球を解き放った瞬間だった。

柚希を庇うように前に立った刃更は、即座に己の決断を強いられる。

負傷している柚希を抱えての回避は不可能だ。ならば選択肢は一つだけ。そのたった一つの可能性を、東城刃更は躊躇わずに選択する。完全に使える訳ではない。でも、

「行くぜ……《無次元の執行》っ！」

東城刃更は、青い光球へと魔剣ブリュンヒルドの斬撃をぶつける。

……たとえ完全消去は無理でも……っ。

まだ過去を引き摺ったままの自分でも。弾くか、散らす事ならやれる筈。だから、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

大地を踏みしめ、両手にありったけの力を込めて、刃更はブリュンヒルドを振り抜いた。

確かな手応えが返ると同時——青い光球が砕け散り、刃更と柚希の左右へと流れた。

巻き起こる爆発。だが、破壊されたのは林の地面だけ。刃更と柚希は無事だった。

「なっ……今のは一体？」

「……刃更……」

呆然となった白仮面の前で、背後の柚希がこちらを呼んだ。刃更は顔だけで振り返り、

「もう大丈夫だ柚希……後は俺がやる」

笑みと共にそれだけを言うと、再び前を向いた。

そして、ふと僅かに顔を顰める。背中に、灼けるような痛みを感じた。

……今ので、傷が開いたな。

痛みは我慢できるが、出血が続けば動けなくなる。決着を急がなくてはいけない。

「————」

だから刃更は、大地を蹴って前に出た。生み出されたのは、スピードタイプの最高速度。

それも、かつて大戦の英雄である父以上の才能と謳われた、神童時代に近い速さだ。

一瞬で彼我の距離が無に帰した。神速で放たれた斬撃が、白仮面の胴へ吸い込まれ、

ガキィィィィィィィィン！　しかし甲高い金属音と共に、ブリュンヒルドを持つ

刃更の手が痺れを得た。剣撃が弾かれたのだ。

「驚いたよ、見事な剣捌きだ。通常の障壁なら、僕もろとも両断されていたかもね」

白仮面が称賛の声を上げ、「でも」と続ける。

「生憎とそっちの彼女に破られたから、障壁を厚くしておいたんだ……残念だったね」

「……ああ、残念だったな」

刃更は頷いた。

「お前がな——」

そして叫ぶ。

「——万理亜っ！」「任せて下さい！」

刃更の背後から幼い少女が前へと飛び出した。小さな身体から、右の拳が繰り出される。

サキュバスである彼女は、学校の屋上では不在だった「パワータイプ」の仲間だ。

その一撃は——刃更の斬撃を受けて脆くなっていた、白仮面の障壁を粉々に打ち砕く。

「な——っ！」

驚愕した白仮面は、とっさに障壁を張り直そうとし、
「――遅い！」
それよりも、刃更の方が早かった。
スピードタイプの特性を最大限に活かした、刃更の戦闘スタイルは神速剣術使い。
さらにまるで糸を引くような神速の剣閃が、連続攻撃へと繋がってゆく。
斬！　という音が始まり。
斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬斬斬

がまず何を言うべきか思い至る。だから視線を腰の万理亜へと落とし、
「ごめん……ごめんね……」
自分がした勝手な行動に対して。心配させ、不安にさせた事を澪は謝った。すると、
「……無事みたいだな」
刃更の安堵した声を澪は聞いた。だから「ええ」と顔を上げて。
澪は表情を凍りつかせた。
「どうした……？」
キョトンとする刃更――そのすぐ背後に『影』が立っていた。
声を出す暇もなかった。
刃更の胴を、後ろから短剣が貫いた。剣先は、刃更の腹を貫通して、
「――――？」
刃更が自分の胴へ視線を落とすのと同じタイミングで、ずるりと短剣が引き抜かれた。
まるで糸が切れたように、刃更の身体が崩れるように倒れて、
「いや……いやあああああぁぁぁぁぁぁぁっ」
離れた場所に居た柚希が、狂ったように悲鳴を上げた。
刃更の背中、服に血の赤が広がってゆく。だから、

「あ、ああ……」
呆然が声になって漏れた瞬間――澪の中にあった理性が弾けて、
「あああああああ

それでもどうにか顔を上げて。そして東城刃更は見た。

「これは……」

周囲の空間が赤く染まり、震えるように鳴動していた。まるで竜巻のように、轟々と風が吹き荒れている。少し離れた場所に、万理亜が倒れているのが見えた。別の場所には柚希も倒れていた。どうやら何かの衝撃を受けて、意識を失っているらしい。

そして。全てを揺るがす赤い波動の奔流——その中心に澪が居た。

長い髪の色を灼熱を思わせる真紅に変え——背中に小さな翼を生やした姿で。

だから刃更は唐突に理解した。澪は今、自分の力を暴走させているのだと。

そしてこれこそが、紛れもなく先代の魔王ウィルベルトから受け継いだ力なのだと。

恐らく暴走の引き金になったのは、

……俺か。

やっと助かって緊張の糸が切れているところへ、眼の前で刃更が凶刃に倒れたのだ。

それを自分の責任だと感じ、自分自身を許せなくなってしまったのだろう。

「……馬、鹿野郎……っ、俺なら平気だ……っ、おい澪っ！」

「ば、刃更……？」

こちらの呼び掛けに、澪はハッとなったように視線を合わせてきた。

どうやら意識はあるらしい。

……良し……っ。

最悪の状況に、僅かに光が差した。これならば、まだどうにか事態を収束させられるかもしれない。敵の姿がないところを見ると、どうやら今度こそ撤退したのだろう。

もしくは消滅したか、いずれにせよこれ以上の脅威はないと考えて良い筈だ。

「落ち着け……俺なら大丈夫だ……。終わったんだ全部……だから」

「や、やってるわ……でも駄目なの……っ！」

澪は叫んで首を振った。

「力を抑えるだけで精一杯で、ぜ、全然収まらない。上手く行かないの……な、何で？」

うろたえる澪は半ばパニック状態で、刃更は表情を苦いものにする。

……くそっ、やっぱ落ち着けってのは無理か……！

だが——かといってこのままにはできない。

……ウィルベルトは、重力を操る力を持っていた。

ならば、その力を暴走させれば一体どうなるか——それはやがて、事象となって現れた。

「え……？」

澪が驚きの声を上げる。彼女の周囲の空間が、陽炎のように揺らぎ始めていた。

「……始まっちまったか」

刃更は舌打ちする。制御できない過質量が行き着く果て――それは重力の特異点だ。

このままでは澪を中心にブラックホールが生成され、周囲の空間を飲み込みかねない。

――無論。発生源が澪である以上、澪が消滅すれば特異点は消失する。

流石に地球崩壊という事にはならないだろうが、それでも周辺の空間は根こそぎ持っていかれる。恐らく、半径数キロ圏内の近隣市街地の消滅は避けられないだろう。

しかし――これらはあくまで刃更の推測でしかない。暴走が引き起こすエネルギーの質量は未知数だ。被害規模はもっと小さい可能性も、もっと大きい可能性もある。すると、

「お、お願い刃更……もうこれ以上、力の暴走を抑えられないの……だから」

震える声で澪が何を言おうとしているのか解り、刃更は声を張り上げた。

「待て！　今、方法を考える！　何か方法を考えるから――」

「――聞いて！　もう時間がないの。このままあたしが世界を壊しちゃう前に、アンタや皆を巻き込んじゃう前に」

悲壮な声で、成瀬澪は最後の願いを告げてくる。

「お願い――早く、あたしを殺して……っ」

それは。確かにこの事態を収束できる、最も手っ取り早い方法だった。

澪を犠牲にすれば、街も、刃更達も全員が助かるだろう。だが、

「……お断りだ」

そう言って、ゆらりと立ち上がった刃更に、澪が慌てたように叫んでくる。

「ば、バカ……っ、あたしとこの世界、どっちを守るべきか考えるまでもないでしょっ!?」

「知るかよ……そういう事はお偉い勇者サマにでも言ってくれ。生憎だが俺はもう違う。世界の平和なんて大層なもの、どうこうするつもりも、どうこうできる力もないんだ」

だが――澪を助ける力はある。その唯一の方法を、東城刃更は知っていた。

それはかつて使う事ができ、今は失っている、世界で唯一の自分だけの力。

……ああ、そうだよ。

何て事はない。状況が言っているのだ。未来のために、今――過去を乗り越えろと。

だから、東城刃更はゆっくりと、前へと向かって歩き出す。

「……俺はもう勇者じゃない。でもな、俺はお前の家族だ。兄貴なんだよ。お前は仮初めと思っていても、俺は本気でそう思ってる。そして、兄貴ってのはな――たとえ世界を敵に回してでも、妹ぐらいは守ってやるものなんだよ！」

刃更は怒鳴るように言葉を叩きつけた。澪ではなく、自分自身へと言い聞かせるように、

「……連れて帰るからな」

「え――…？」

呟くようなこちらの言葉に、訊き返してくる澪へ、

「絶対に連れて帰ってやる……お前は帰るんだ。俺と一緒に、あの家に帰るんだよ！　妹ならこんな時くらい、黙って兄貴に守られとけ――解ったか！」

刃更は己の想いを叩きつける。理屈も理性も何もない、感情任せの叫び。

でも、だからこそ通じる。

届く。

「っ……うん」

泣きそうな表情になりながら、澪が頷いた。何度も、何度も。そして、

「お願い――助けて、お兄ちゃん」

澪は言った。確かに言った。だから、刃更は「ああ」と頷いて、

「待ってろ。今、消し去ってやる。お前の苦しみも悲しみも全部――ゼロになるまで」

その場で足を止める。それは、力を暴走させている澪に接近できるギリギリの距離。

重力の波動が大気を揺るがす中、東城刃更は深呼吸を一つし、全身の力を抜いた。

完全な《無次元の執行（ベニシング・グンフト）》を発動する準備に入ったのだ。

見極めなければいけないのは、澪が暴走させている力――その存在の根源たる〝天元〟。

だがあらゆる事象・物質は、その存在が微弱に揺らいでいる。

当然、天元の位置も常に変動している。しかも刃更が消そうとしているのは、荒れ狂う力の奔流だ。天元の位置は超高速で、さらに不規則に動いている。外せば全員アウト。

しかも天元は斬っても、澪を傷つける訳にはいかない。ましてや、澪まで消してしまうなど以ての外だ。少しの失敗もできない。許されるのは百％の成功のみ。

多くの血液を失い、視界が霞む中――それだけでも厳しいというのに、

「――――っ」

刃更は、自分の鼓動が跳ね上がったのを感じた。そして手が震え出す。

……くそ……！

失敗した時の事を考えてしまったせいだ。脳裏に白仮面の言葉が蘇る。

『――今度は彼女まで消す気かい？』

五年前の悲劇を思い出した。決して癒える事のない心の傷、過去に犯した罪の意識が、容赦なく刃更の心を飲み込もうとする。だから、

……やっぱり、できねえ……。

東城刃更は思う。とてもじゃないが、できないと——ああそうだ。
自分と同じ苦しみを、澪に味わわせるような真似だけは、絶対にできない。
ふと見れば、澪は穏やかな瞳でこちらを見ていて。
こちらと視線を合わせると、ゆっくりと眼を閉じた。
口元がそっと動く——「信じてる」と。
だからその瞬間、東城刃更の覚悟が決まった。自分もまた、澪と同じように瞳を閉じて、
「————」
荒れ狂う力の奔流、刃更は吹きすさぶ風に己の身を任せた。
その上で全神経、全身全霊、魂までをも研ぎ澄まし——感じ取る。
東城刃更が成瀬澪を救う事ができる、たった一つの可能性を。
そして——次の瞬間、世界から音が消えた。澪の力の暴走が、一気に膨れ上がったのだ。
広がる破壊と無の波動。
東城刃更はただ——静かにブリュンヒルドを振り切った。

5

——直後、刃更の世界が真っ白に染まった。
それが《無次元の執行（バニシングシフト）》の発動によるものなのか、ブラックホールに呑（の）みこまれたからなのかは解（わか）らない。自分が眼（め）を開けているのか、閉じているのかさえ解らなかった。
ただ、己の中にある全（すべ）ての力を使い果たし、
「――――」
刃更はゆっくりと、前へと倒（たお）れていって。ふと――柔（やわ）らかな温（ぬく）もりに包まれた。
その心地良（ここちよ）さに、思わず微笑（びしょう）を浮かべる。
確信があったからだ。
そして、刃更は微（かす）かに口を動かした。今はもう、力はほとんど残っていない。
それでも一言だけ。一言だけを、刃更は口にした。どうしても言いたい言葉があった。
だからどうか声になるようにと、静かにそう願いながら。
東城刃更はそっと呟いた。
「――帰るぞ」

エピローグ　守りたいもの

1

深夜の公園での戦闘（せんとう）の後――東城刃更（とうじょうバサラ）はしばらくの絶対安静を余儀（よぎ）なくされた。
何せ、屋上で斬られた傷も塞（ふさ）がっていないのに無茶（むちゃ）をし、さらには腹部を貫通（かんつう）するような重傷まで負ったのだ。
それでも柚希（ゆき）から、一族に伝わる特別な回復薬を貰（もら）い、どうにか入院はせずに済んだ。
学校側には夏風邪（なつかぜ）を引いたと連絡（れんらく）。刃更の看病をするため澪（みお）も同じ症状（しょうじょう）だと伝えて。
事件から五日後――ようやく刃更は回復し、無事に登校する事ができていた。
――そして。刃更は今、ゆっくりと校内の階段を上っていた。向かう先は屋上である。
現在は四時限目の授業の真っ最中。つまりサボりだ。誰（だれ）かに見つかる可能性はあるし、

何より今日からは澪も登校している。本来なら彼女から眼を離すべきではないのだろうが、

「まあ、大丈夫だろ……」

公園での戦闘後、再び敵が襲ってくる事はなかった。刃更を始め、澪や柚希も負傷し、回復に努めていたこの数日間は、敵にとっては絶好の襲撃チャンスだった筈。にも拘らず、一切のアクションがなかった所を見ると、どうやら一先ずのケリは付いたらしい。

……澪の『あの力』も、あれ以来消えたままだしな。

死にかけた刃更を見て動揺し、ウィルベルトから受け継いだ力を暴走させてしまった澪だったが、そのまま覚醒――という事にはならなかった。あれから何度か重力系の魔法を試してみたが、いずれも発動はせず。結局、以前の状態に戻ったようだった。

――あの時。刃更の《無次元の執行（バニシングシフト）》は成功し、暴走した澪の力を完全に消去した。

その際に、澪が受け継いだ力も一緒に消し去ったのではないか――そんな可能性を澪が口にした。両親の復讐をしたいという澪の気持ちは残るにせよ、それならば現魔王が澪を狙う理由は消滅する。勇者の一族が澪を警戒し、柚希が監視をする必要もなくなって。事態はずっと良い方向へ進む事になる。だが、

……残念だけど、それは有り得ない。

刃更が《無次元の執行》で消したのは、あくまで澪の外に漏れていた力の奔流である。

もし澪の中にある力まで消そうとしていたら、恐らく彼女もろとも消し去ってしまっていただろう。だが、そんな結末にだけはしたくなくて。

だからこそ刃更は、最も難しく、しかし最良の可能性に賭けたのだ。

よって、これで全てが終わった訳ではない。それでも束の間の平穏は訪れた。

今はただ、その事を喜んで良いだろう。

――そして上りの階段が終わり、刃更は屋上へと出た。まず最初に刃更の眼に飛び込んできたのは、鮮やかな青の色彩。美しい空だった。夏にしか見られない、透き通るような蒼の空だ。眩しい陽射しが照り付けてはいるものの、しかし不快な蒸し暑さはない。時折そよぐ風も涼しく爽やかで、優しく身体を撫でるように吹き抜けてゆく。

そこで刃更は、屋上の隅に先客が居る事に気が付いた。落下防止の柵に両腕を置き、刃更と同じ空を眺めている青年――滝川だ。滝川はこちらに気が付くと、

「おいおい――バサっち。病み上がりの奴がサボって良いのか？」

からかうような口調で言ってくる。刃更は苦笑しながら、滝川の方へ。

「人の事が言えるのかよ。俺より先に堂々とサボってたクセに」

「もう良いのか風邪？　やっぱあれか、こないだの成瀬の風邪がうつっちまったのか？」

「まあ、そんなとこかな……。それよりも、お前こそ大丈夫だったか？」

「……ん？　ああ、購買での事か？」

そうだった、と思い出したように滝川。

「あれは酷すぎるだろバサッち、いきなり人の鳩尾に肘を入れた挙句、そのまま置き去りとか。眼が覚めた時、俺がどれだけ切なかったか解るか？」

「悪かったよ……でも、俺が言ってるのはその事じゃなくてさ」

と苦笑して。そして東城刃更は言った。

「公園で俺、お前の事をかなり滅多斬りにしただろ――よく死ななかったな」

その瞬間、真夏の屋上に冷たい静寂が訪れた。

「……何の話だ？」

「シラを切り通すつもりなら良いけど――後悔するなよ？」

それでも表情を変えない滝川に、刃更はスッと腰を落とした。そして、

「おいバサっち……」

戸惑う滝川に対し、刃更はカッと眼を見開くと、神速で腕を振り抜いた。

剣を持っていれば横薙ぎの動作。そう――刃更の手に魔剣ブリュンヒルドはない。だが、

「――――」

滝川の姿は、一瞬で遠く離れた場所にあった。それは――ただの人間にできる真似では断じてない。最早、完全に顔から感情を消した滝川に対し、刃更はフッと笑って、

「落ち込む事はないぞ滝川、それが当然の反応だ。俺の連続斬りでも死ななかったお前は、俺が澪の力を消去した瞬間も見ていた筈だからな……とっさに殺気を込めれば、たとえフリでも絶対に回避を選ぶと思っていたよ」

刃更の言葉に、滝川はしばし無言だった。

だが――やがて大きく嘆息すると、諦めたように頭をガリガリと掻きながら、

「あーあ、上手く誤魔化せると思ってたんだけどなぁ」

そう言った後、こちらへと問い掛けてくる。

「――いつ気が付いた？」

「確信したのは、全てが終わってからだ。お前のお陰で、俺は絶対安静だったからな……包帯まみれでベッドで横になりながら、色々と考える時間があったんだよ」

と、肩を竦めながら刃更。

「きっかけは、公園で白仮面を――お前を倒した後だ。澪に歩み寄ろうとした俺の腹を、お前の配下の『影』が短剣で貫いた……でもな、それっておかしいんだ。自分を指揮する

上位魔族がやられたのに、そのまま戦闘を続けようとするなんていうのは」
何故なら、
「滞からウィルベルトの力を回収するようにお前らに命じていたのは、お前らが仕える魔王様なんだからな。普通なら、早々に撤退して報告する事を選ぶ筈だろ」
「任務失敗の処罰を恐れて、せめて一矢報いようとしたって可能性は？」
「確かにその可能性も考えたよ――けど、他にもあるだろ」
滝川の言葉に、刃更は告げる。
「あの『影』は白仮面の配下じゃなく、魔法で生み出された人形だったって可能性がさ」
もしそうなら、『影』があの現場に残った説明がつくのだ。『影』は大した力を持っていなかった。恐らく、単純な命令しか実行できないタイプの人形に違いない。多分『影』は、滝川の命令に従って刃更に攻撃を仕掛けただけなのだろう。
「……だが、『影』が魔法の人形だとすると、他に奇妙な事が出てくる。あの停電した夜の購買で、お前は『影』を見て驚いていた。でもな、魔族が意図的に姿を現したならともかく、魔法で作られた人形は、普通の人間には見る事ができない筈だ」
「成る程な。でもそれなら普通、やっぱり『影』は魔法人形じゃないって考えないか？」
「けど、確かめてみる価値は充分にある。それにお前がもし普通の人間なら、俺が殺気をぶつけた所で何も感じないんだ。**確認するだけなら、何の問題もないだろ？**」

「その割には、確信があったみたいな口振りだったけどな……」
と、まだ納得できずにいる滝川に、「まあな」と刃更。
「……お前さ、夜の購買で俺に言っただろ。倒れた滞の事を話している時に、『顔を赤くして、恥ずかしそうだったな』って」
それは事実だ。主従契約の呪いが発動し、強制的に快感を得てしまっていたのだから。
だから刃更も、その時は全く違和感を覚えずに滝川の言葉を流したのだが、
「でも、よく考えてみればおかしいだろ。確かに滞は、俺に対してはキツイところがある。でもここ最近、アイツは体調不良と称してよく保健室に行っていた。そんなアイツが顔を赤くしてふらついたら、普通はまず熱が出た可能性の方を疑うだろ」
「……そういう事、か」
あちゃあ、と滝川は額を手で押さえて、
「失敗したなあ……成瀬のおかしな反応を何回か見て、お付きのサキュバスが絡んでるのはすぐに解ったんだ。だから気付かないフリよりも、笑いを堪える方が大変でさ。自然に振舞おうとしてたんだが……まさか、それが逆に失言に繋がっちまうなんてな」
やれやれと苦笑。そして、

「――で？　どうするよバサッち」
凄惨な笑みを顔に貼り付けて、問い掛けてくる。
「ここで公園の続きをやるっていうなら、俺は別に構わないぜ？」
すると、途端に刃更と滝川を取り巻く空気が張り詰めたものになった。まるで長閑だった屋上が、あっという間に戦場へと変貌したかのように。
互いに無言で対峙する事しばし。先に動いたのは刃更だった。肩の力を抜き、フッと笑う。
「……止めておくよ。今の俺じゃ、一対一でお前に勝てるとは限らないし。それに――戦うよりも、俺はお前と交渉したいと思ってるんだ」
「交渉……？」
怪訝そうに問う滝川に、「ああ」と刃更は頷いた。
「恐らくお前は、現魔王派が遣わした澪の監視役なんだろう。勿論、可能ならウィルベルトの力の覚醒を促すように命じられていたんだろうが、わざわざ人間のフリまでしてアイツと同じ学校に通うなんて、目的は監視しか考えられないからな」
滝川は無言を返してきた。それを肯定と受け止め、刃更は続ける。
「お前が今回、強引な手段に打って出たのは、澪を守ろうとする新しい家族――俺という存在ができたからだ。澪が魔法の力に目覚めたのは、育ての両親の死がきっかけだった。

なら、澪の眼の前で俺を同じ目に遭わせれば、**そのショックで今度はウィルベルトの力が**覚醒できるかもしれないと踏んだんだろう。手っ取り早く任務を終えたいお前にしてみれば、利用するにはもってこいだっただろうな。それで、俺に近づいたんだろ？」
「……まあな、半分はそうだ。でも、ぼっちのバサッちが見てられなかったってのも本当だぜ。何せ、俺も馴れない人間の高校とか通わされて、当初はかなり浮いちまったからな。転校初日にハブられてるお前を見てて、ちょっと辛くなっちまってよ」
「……そんなにか？」
まさか、敵の魔族に同情されるレベルの孤立っぷりだったとは。
しかし――刃更はふと口元を緩めた。眼の前の滝川から、殺気が消えていたからだ。
こちらの話を聞く気になってくれたのだろう。だから、
「とはいえ、お前は焦って任務に失敗した。ウィルベルトの力を何としても手に入れたい現魔王が、お前に下した命令はあくまで監視。下手に殺したりしたら、澪と一緒に力まで失われる可能性があるからな。だが、その監視役の正体がバレちまったんだ。強引な手段に出て失敗した事もある。このままだとお前、色々とマズイんじゃないか？」
「どうだろうな……バサッちを殺して口を封じれば、まだ問題ないと思うぜ」
「たとえ俺を殺せても、お前は澪まで殺す訳にはいかないんだ。どうしたって隠し通せや

しない。手詰まりだよ滝川。だからこそ先刻、ここで一人で黄昏れてたんだろ？」

刃更の推測に、滝川は憮然となって押し黙った。

それは好機だ。だから刃更は提案する。先ほど口にした『交渉』を。

「だが――もしお前が今後は本来の監視役に徹してくれるっていうなら、お前の力になってやっても良い。お前の正体に気付いたって事は、現魔王派には知らせずにいてやるよ」

刃更がした提案に、滝川は眉を顰めた。

「……どういう事だよ？」

「もしお前が失敗したとなったら、向こうは新しい奴を送り込んで来るだろう。次は失敗しないように、お前よりも強くて厄介な奴をな。もしかしたら監視なんて止めて、強引な手に出てくるかもしれない」

だが、

「お前とやり合うだけで精一杯の今の俺達じゃ、そんな敵とはまだ渡り合えない。たとえそいつに勝てたとしても、次に来るのはもっと手強い奴だ。下手すりゃ数で攻めて来るかもな。そうなったら、いよいよ勝機はなくなっちまう。ならいっそ、しばらくはこのまま何もなかったようにお前に監視役を続けて貰った方が、俺達にとっては都合が良い」

そして、

「これならお前も、任務に失敗した事はバレずに済む――悪い話じゃないだろ？」

敵である滝川と手を結ぶ。

これは、養護教諭の長谷川千里がくれたアドバイスから考え付いたアイディアだ。

彼女は言っていた。もし敵ができたら、味方を増やせと。そして味方も敵も、大事なのは数ではなく質――だが、数と質を別々の天秤に掛けてはいけないと。それは敵を最後まで敵と割り切るのではなく、もし新しい味方が望めないなら、今いる敵を味方に変える努力をしろ……そういう意味ではないだろうか。たとえ今はクラスで孤立していても、諦める必要はないのだと。それは、今の澪を巡る状況にもそのまま当てはめる事ができる。

現に勇者の一族である柚希が、公園では澪を助けてくれたのだから。

敵味方は、その時々によって立場が変わる事もある。ならば――今の刃更達が勝ち抜くためには、滝川と手を結ぶくらいの強かさが必要だ。そして、

「……成る程な。確かにバサっちの提案は悪くない」

刃更の提案に、やがて滝川はポツリとそう呟いた。

「だが忘れてるぜ……俺達は敵同士だ。お互い状況が変われば、いつ裏切ったっておかしくない。そんな信頼とは無縁の状況で、一体どうやって手を結べる？」

「そいつは多分、心配ないと思うけどな……」

状況は限られているとはいえ、こちらも味方にする相手は選んでいる。
もし無理だと思ったら、最初から交渉などしていない。
「こないだまで殺し合いをしていたんだぞ。どうして心配ないなんて言えるよ？」
滝川の言葉に、刃更は頬を掻いた。
「友達だから……ってのじゃ駄目か？」
「ああ、残念だけどな」
じゃあ言おう。
「俺が今――こうして生きているからだ」

「お前がやろうとしたのは、言ってみればショック療法みたいなもんだ」
刃更は滝川を前にして告げた。
「だったら、できるだけ澪に衝撃を与える方法を選ぶ方が効果的だった筈だ。だが、お前は俺を殺さなかった……それどころか、俺の腹を貫いた『影』の短剣は、可能な限り急所を避けていた。まるで針に糸を通すように――細心の注意を払ったみたいにな。だからこそ俺は澪を救う事ができたし、俺自身も手当てが遅れても助かった」

「そりゃ、単にバサっちの運が良かっただけの話だろ」
「いいや。お前が言っていたように、俺達は殺し合いをしていた筈だろ。あの状況で助かって、それを幸運で片付ける程、残念ながら俺は純粋じゃないよ」
それに、と刃更。
「お前の計画の肝は、犠牲役の俺に対する澪の信頼度を上げる事だった筈だ。その方が、俺が倒れた時のショックは大きいからな。だとしたら、どうしても邪魔な存在がいるだろ」
「へえ……誰だよ？」
「万理亜だよ。育ての両親を失った今の澪にとって、傍に居続けた万理亜は最も信頼できる存在だ。それこそ俺よりもずっと澪に近い距離にいる」
だから、
「もし澪の精神を限界ギリギリまで追い詰めるなら、万理亜を先に排除し、最後の心の支えとなった俺を殺した方が効果的だった。ここ最近、万理亜は一人で街を警戒して回り、低級のはぐれ悪魔を狩っていた。そして実力はお前の方が上。始末するチャンスは幾らでもあった筈だ。でも――お前はそれをしなかった」
まるで万理亜を見逃すかのように。まるで本当は澪を思いやっているかのように。

まるで――現魔王の命令とは別に、他の誰かから真逆の命令を受けているかのように。

――とはいえ。流石にそれを口に出しては言わない。これらはあくまで、刃更の希望的な観測を含んだ推論である。だが、もし刃更の推測が正しかったとするなら。その事実は、周囲に決して漏れてはならない滝川八尋の秘密の筈だ。だが、こちらがその可能性に思い至っている事を――そして、そんな彼の立場を理解している事を暗に伝えられれば。

そこには確かな信頼が生まれる。それこそ、手を結ぶには充分な程の。

「これが、俺がお前を信じる理由だ、滝川。できればこれがお前にとっても、俺を信じる理由になってくれたら……って、そう思ってる」

そして刃更は言葉を切った。自分が言うべき事は、もう全て言ったからだ。

こちらの手札は晒した。後は滝川の答えを待つしかない。

滝川は長い間無言だった。ずっと何かを考え込んでいた。こちらは交渉と言ってはいるが、滝川の立場からしてみれば、半ば脅迫されている所もあるのだ。迷ってくれている。それを前向きに捉えなくてはならない。――どれだけ時間が過ぎただろう。やがて、

「悪いが、バサッちの言った話に覚えはないな……」

「……そうか」

やっぱりか。

「――でも、まあ今回の件で俺も色々と立場がキツくなったからな」

と滝川は嘆息して、

「取り敢えずの所は乗ってやるよ……お前が言うそのアイディアに」

こちらが望んでいた言葉を、苦笑混じりに口にした。だから、

「……助かるよ」

刃更もまたふっと笑みを返す。

――先程の推測が当たっていたのか、外れていたのかは解らない。もし仮にそうだとしても、認めれば現魔王派に対する裏切りになるし、同時に極秘任務に失敗する事にもなるのだ。もし刃更の推測が当たっていたとしたら、余計に滝川はそれを認める訳にはいかない。だが少なくとも今、滝川は手を結ぶと言った。ならば、今日のところは上出来だろう。

そして――四時限目の終わりを告げるチャイムが鳴った。昼休みが始まったのだ。

「さて、俺はそろそろ戻るわ」

そう言って、滝川は屋上の出口へ向かって歩き出す。だから、

「――なあ、滝川」

最後に。どうしても一つだけ聞いておかなければいけない事があった。

ウィルベルトの命令で、澪を育て、その成長と幸せを見守っていた二人。

「澪の養父母を殺した奴――知ってるか？」
それは成瀬澪を襲った、始まりの悲劇。澪の復讐の動機であり、発端だ。
滝川は犯人ではない。もしそうだとしたら、澪がとっくに気が付いているだろう。
だが、澪の監視をしていた滝川なら、或いは――すると、
「ああ――知ってるよ」
立ち止まり、滝川は肯定した。
「……名前は？　どんな奴なんだ？」
「おいおいバサっち、俺達は一応手を結んだんだろ？　一方的に情報を出せっていうのは、フェアじゃないぜ」
「でも……っ！」
とっさに刃更は詰め寄ろうとして、しかし自分を抑え込んだ。ここで無理に聞き出すような真似をしては、折角できた滝川との信頼関係が崩れてしまう。
「……いや、お前の言う通りだな。済まない、今のは忘れてくれ」
そう言って俯いた刃更は、ふと滝川の嘆息を聞いた。そして、
「――ゾルギア」
滝川が口にした名を、刃更は確かに耳にした。

「ゾルギア……」
「俺の前に成瀬の監視をやってた奴だ……でもそれ以上は、今はまだ知らない方が良い」
何故なら、
「ほら――来たぜ」
滝川が言ったのと同時、屋上の扉が向こう側から開かれた。
やって来たのは一人の少女――澪だ。

2

澪に軽く声を掛けると、「じゃあ」と言って滝川は屋上を出て行った。
代わりに刃更の方へと澪がやって来て、
「呆れた……こんな所で、二人して授業をサボってるなんて」
「悪い。良い天気だったんで、ついな……」
「ふーん……滝川と何話してたの？」
「別に。良い天気だなって」
澪の問い掛けに対し、刃更は嘘はつかなかった。だが――全てを話す事もしない。

滝川の正体については、澪や万理亜には話していない。柚希にもだ。敵は勿論、澪達にも気付かれずに手を結んでいた方が都合が良い。その方が、滝川も立ち回りやすいだろう。

……それに。

もし話していたら、澪は滝川と手を結ぶ事にはきっと反対しただろう。自分達を襲い、刃更に重傷を負わせ、自分の力を暴走させるきっかけを作った相手だ。今の澪にとっては、滝川は自分の両親を殺した現魔王派に属する敵でしかない。そんな彼女に、滝川と手を結ぶ事を納得させるのは酷だろう。——だから、これは刃更の役目。

東城刃更は、成瀬澪を守ると決めた。澪が望むであろう正攻法で彼女を守れるなら、それが一番良い。だが——残念ながらそれは難しいのだ。ならば、手段を選んではいられない。澪の敵は、自分達が思っているよりもずっと強大な相手なのだから。

「……どうしたの？」

「いや……何でもないよ」

黙り込んだこちらを不思議そうに見上げた澪に、刃更は首を横に振った。そして見る。自分が守り、これからも守ってゆくと決めた少女を。すると、キョトンとしてこちらを見ている、澪の仕草が可愛くて。気が付いたら——刃更はそっと澪の頬に触れていた。

「え？　な、何……っ？」

「あ、悪い……つい」

自分がこの表情を守れたと思ったら、無意識に手が伸びてしまった。

「……っ」

すると、澪は神速で屋上の入口を振り返り、他に人が来ていない事を確認すると、

「あ、あのね……」

そう言って、少しだけ顔を赤くして俯いた。

「あたし……助けてくれたお礼、まだ刃更にしてなかったよね？」

「ん？　ああ……」

そうだっけか。こっちはそんな事、特に気にしていなかったのだが。

「だ、だから……だからね」

澪は刃更の制服の袖をキュッと摑むと、こちらへ向かって一歩前に出た。

互いの身体が今にも触れそうな距離。

近い。

……あれ。

まただ。何だろうこの雰囲気は。

呪いが発動して保健室に運んだ時もそうだったが、澪はこちらと二人きりになると、態

度が変わる時がある。暴走してしまったのを助けて以降は、その傾向が特に顕著だ。部屋で看病している時も、万理亜が席を外すと途端に殊勝になったりしていた。すると、

「い、今なら二人きりだから……」

頬を赤く染めながら、澪はそっとこちらを見上げて、

「ちょっとだけなら、お兄ちゃんがあたしにしたい事しても良いよ……何でも」

「――お兄ちゃん、って……お前」

首に痣は出ていないのに。それは、澪が刃更に屈服させて貰う事を望む時の合図で、

「な、何なら……こないだの保健室の続き、とか」

「……え？」

あれの続き？　やるの？　今ここで？

「……――っ」

いやいや待て。思わず黙ってしまった自分待て。今、何を想像した。

あと、澪も黙るな。それと、その恥ずかしそうな覚悟顔を止めろ。お前はこっちが、屋上でどんな事をすると思ってる。しかし、沈黙している間にもどんどん空気がおかしな方向へ傾き、何かしないと収まりがつかない雰囲気になってくる。そして、

「――ん」

とうとう澪が、意を決したように眼を閉じた――キスシーン入りました。

そこまでされてはもう、刃更としても誤魔化して終わりにはできない。だから、

「……」

意を決し、ゆっくりと刃更は澪へと顔を近付けていき、

「……駄目」

いきなり横から腕を引かれた。

「へ……柚希？」

見れば、一体いつの間にやって来たのか、柚希がこちらの手を取っていた。

「の、野中っ？　何で……っ!?」

「油断も隙もない……刃更に色目を使わないで」

「い、色目……？　――っ」

柚希の言葉に、澪の顔がシュワっと赤くなった。

「だ、誰も色目なんて使ってないわよっ！　大体アンタ、あたしの事を助けてくれといて、今更こんな邪魔とか何のつもりな訳っ!?」

「別に。貴女を助けはしたけど、刃更をあげるなんて言ってない」

そして、くるりと刃更の方を向くと、

「捜してた刃更……これ、食べて欲しくて」
「お、もしかして弁当か……？」
布製の袋を差し出してくる柚希に、刃更は思わず表情を明るいものにした。
「懐かしいなあ……そういやお前、小さい時から上手かったもんな料理」
「刃更が好きなおかず、いっぱい入れてきた」
「……ま、待ちなさいよっ、あたしだってこの後、刃更と一緒にお昼するつもりでっ」
そうはさせじと、澪が叫んだ。すると柚希はフッと勝者の笑みを浮かべて、
「……手ぶらで？」
と告げた瞬間。
「――お任せ下さい、澪さまっ！」
バターン！　とけたたましい音を立てて、屋上の扉が開け放たれた。
そして幼いサキュバスの少女――万理亜が一直線にこちらへとやって来る。
「おいちょっと待て、どうやって入ってきた部外者！」
「愚問ですね刃更さん。私の大人の色気に掛かれば余裕です。『家族がお弁当を忘れてしまって……』と、濡れた瞳で頼んだら、すぐに入れてくれました！」
「それ単に子供が泣きそうに見えただけじゃ――」

「とにかく！　こっちもお弁当の準備は万端です！　さあ澪さま……こんな、**無表情系幼馴染女**なんかに負けてはいけません。刃更さんにあれをやるんです。アーンですよアーン」
手に持っていたバスケットを開けて、ずいずいと澪へ迫る万理亜。
しかし、人前では刃更に対して素直になれないのが澪だ。
「じょ、冗談じゃないわよ……何であたしがこんな奴に！」
と叫び、途端に「はうっ」と身体を震わせた。不遜に主従契約の呪いが発動したのだ。
「またかよっ！　学習能力ないな、お前！」
「仕方ありません。こうなったら刃更さんが澪さまにアーンを……いえ、澪さまをアーンと言わせて下さい」
「お前も真顔で何を言ってるっ？」
「決まってるじゃないですか、呪いを解くんですよ呪いを。任せて下さい。こんな事もあろうかと私、良いおかずを――ええオカズを持ってきてますので。さあ刃更さん、この極太のフランクフルトで、澪さまの可愛いお口を少し乱暴に犯して――」
「できるかああぁぁっ！　大体、何で俺がお前の欲望バリバリなサキュバス心を満たす手伝いをしなくちゃならないんだ！」

「何を今更。刃更さんと澪さまと私は、もっと凄い事をした仲じゃないですかー。この間だって、お風呂で裸になって三人でケーキプレイを――いやん」

「……どういう事？」

明らかに怒りを込めた声で柚希が言葉を挟んだ。すると万理亜はふふんと笑って、

「知りませんでしたかー？　刃更さんは少し前から、澪さまのご主人様なのです」

「そ、そんなの駄目……ぜ、絶対許さへんもん！」

あ、柚希が切れた。

「残念ですが諦めて下さい。何せ澪さまは、これから身も心も刃更さんの下僕になるんですよ――この私の眼の前で！」

「ちょ、ちょっと何勝手な事を言ってんのよ万理亜！　百回殺すわよっ！」

症状が軽かったのか、呪いから回復した澪が万理亜に食って掛かり。

「おい……お前ら」

とうとう刃更を放置して、三人の少女達は言い争いを始める。

だから刃更は嘆息を一つして――しかし、ふと表情を穏やかなものにした。

眼の前にあるのは、本当ならば頭が痛くなるような光景。騒がしく……どこにでもあり、だからこそ得がたいもの。当たり前という名の、幸せな日常だ。

……守っていけるのかな、俺は。

その答えはまだ出ない。自分達の戦いは、まだ始まったばかりなのだから。

それでも刃更は昨夜、迅に一連の出来事についてメールを送っておいた。

息子として――父親が留守にしている家を、家族を、取り敢えず守る事ができたと。

返事はまだ来ていない。あの父親の事だ。「まだまだだな」と言われるかもしれない。

だが、それでも及第点くらいは貰えるだろう。

過去と向き合い、もう一度立ち上がった自分に、迅が何と言ってくれるか楽しみだ。

返信する言葉はもう考えてある。

それは感謝の言葉。

かつて勇者の資格を捨ててまで、貴方が守ってくれた息子は。

今――自分にしか救えない少女を、確かに守れていると。

3

暗い森の中に、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

場所は魔界。本来ならば電波が届かない筈のその場所で、

「――はいよ」

ボタンを押し――かつて大戦の英雄と謳われた勇者、東城迅は通話を開始する。

「おうお前か……ああ、もう知ってる。アイツからメールが届いていたからな」

通話相手に迅が言ったのは、刃更が送ってきたメールについてだ。

――本来ならば、人間の世界で作られた通信機器を魔界で使用する事は不可能である。

だが、大戦時は魔界へ潜入する事もあった。

そのため、生命線ともいえる連絡手段の確保は必須となり、様々な手段が講じられた。

時代の移り変わりと共にその方法は変化し、今は携帯の中に特殊な魔力チップを入れ、その波動を周波数化して飛ばし、異なる世界とも連絡を取れるようにしていた。

「だから言っただろ？　別に心配する必要はないって。恐らく今回の事がなくても、きっかけさえあればアイツは立ち上がった筈だ」

迅は笑いながら、

「何せ刃更は、俺と――そしてアイツらの息子なんだからな」

すると、相手が返してきた言葉に対し、

「まあ、お前がアイツの心配をするのは解るよ……だから、お前の眼の届く場所に行かせたんだ。だから俺が留守にしている間は、刃更や澪達の事を見てやってくれ。悪いが、こっちはもうしばらく掛かりそうなんでな」

と、そこで声を落とし、

「ああ。やっぱり『彼女』とは連絡が取れなかった。あのウィルベルトが死んだんだ。いざという時に落ち合う場所にも来なかったから、心配していたんだが……恐らく今の魔王に変わったせいだろう。狙われないように、身を隠したんだと思う」

だから、

「俺の方も、こっちでもうちょっと深く潜ってみる。澪の件もあるしな……やれる事は意外と多そうだ。心配すんな……ああ、刃更にもちゃんと連絡は入れるよ」

そして電話を切ると、東城迅はゆっくりと歩き出した。

彼を襲った無数の魔族達の躯を背後に残して、その顔に、不敵な笑みを浮かべながら。

東城迅は虚空へと告げる。

「一歩前進できた位で満足してんじゃねえぞ、刃更。いつまでも避けてる訳にはいかないぜ。澪だけじゃない、自分の過去や運命からは、お前も逃げられやしねえんだからな」

あとがき

初めましての方も、既に私の事をご存知の方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。これまでスニーカー文庫では見かけなかった名前だと思うのですが、その通りです。実は私、ラノベ作家としてのデビューは他社レーベルのH J文庫さんなのですが、今回ご縁があってスニーカー文庫さんでも書かせていただける事になりました。いやー、何ともありがたい話です。……あれ？　でも担当さんから声を掛けていただいた時って、担当さんってスニーカー文庫とは別のレーベルの編集さんだったような……いやいや、きっと気のせいですよね。という訳で、これからはスニーカー文庫さんでも精一杯頑張らせていただきますので！　どうぞよろしくお願いします。

さて新シリーズという事で、この『新妹魔王の契約者（テスタメント）』について少しご紹介などを。本作は「勇者」と「魔王」に「妹」と、王道な要素てんこ盛りに「お色気サービス」までトッピングした、言わば豪華全部盛りです。でも中身は読みやすさを重視してますので、どうか気軽に召し上がっていただければとー。まあ本作が正しい「妹モノ」のジャンルに分類されるかは解りませんが、ウチの妹キャラの澪は、担当さんのアドバイスもあってか

なり凄いキャラになりました。だって「普段は素直になれないのに、いざHな呪いが発動すると『お兄ちゃん』と呼んで甘えてくる妹」ですよ？　ポテンシャルが高すぎるっ！

では、そんな本作の関係者の皆様に謝辞をー。まずはイラスト担当、ニトロプラスの大熊さん。素敵イラストの数々をありがとうございます！　一発目のキャラデザからスーパークオリティ続きで、もうずっと震えっぱなしです。またデザイン面から色々なアイディアもありがとうございます。ニトロさんの窓口の戸堀さんも、ご協力いただきましてありがとうございました。そして担当編集さんとスニーカー編集部の皆さん、様々なアドバイスをありがとうございます。お陰でこうして自分の実力以上の作品を世に送り出す事ができました。他にもデザイナーさん、校閲さん、営業さんなど多くの方に支えられて本書は発売されました。当然の事ですが、ライトノベルは本です。作者、絵師、担当を始めとするスタッフがチームを組んで作り上げます。本作はそうした全員のチーム力を、最大限に活かして生まれる事ができた非常に幸運な作品です。本書を手に取っていただいた皆さんにも、ぜひ読者としてこの作品に関わるチームの一員になっていただけると嬉しいです。

ここまで読んでまだお買い上げいただいていない方は、そのままレジへGOですよっ！

それでは、次巻でまたお会いしましょう。

上栖綴人

忘れるなよ東城刃更
――お前の過去は
消せない
魔王の力を暴走させた
澪を助け出し、
一層絆を深めた刃更達。
だが、そんな澪を
危険な存在と判断した
勇者の一族は、
柚希に非情な指令を下し、
さらに新たな刺客を送り込む。
かつての仲間達を前に、果たして刃更は――
新妹魔王の契約者 The Testament of Sister New Devil テスタメント II
COMING SOON!

お買い上げ
ありがとう
ございます!
今回挿絵担当させて頂きました
大熊猫介と申します！ども！
いぁー・・・ラノベのお仕事は
初めてだったので、ドキドキドクン！
反省点も多いですが、
自分の新たな可能性を少なからず
見出せた気がします。(エロぃ要素で)
お話の方も今後の展開にワクワク
しつつ、自分も上栖先生のお話に
負けないイラストを皆様にお届け
できるようモリモリがんばりたいと
思います！
(主にエロぃ要素をね！)
オミットした
メガネゆきちゃん